

FOLKLORE  
OF  
STONEMASON  
IN  
KUNISAKI  
PENINSULAR  
Vol.1

国東半島の石工 1

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 報告書第1集

# 国東半島の石工 I

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館調査報告書 第1集

1983

## 序

長い間、陸の孤島と呼ばれていた国東半島には、宇佐八幡の勢力下に発展した六郷満山の文化や、中世の大友人西以来、半島の各地に蒔かれた武士団の影響下に作られたと思われる数多くの石造文化財が、美しい自然と調和しながら、今日もその面影をとどめている。

民俗学的にみても、修正鬼会やケベス祭などを始めとする半島各地の信仰行事や、屋敷神、小一郎神などの民間信仰、瀬戸内沿岸に共通的な性格を示す村落構成や漁業形態など、多数で複雑な習俗の様相が豊富に残っている。

当資料館は、「うさ・くにさきの歴史と民俗」を調査研究し、その保存や紹介に努めることを目的としているが、昭和56年11月に開館して以来、着々とその成果を挙げている。

この概報は、昭和57、58年度の2か年にわたって実施される国庫補助事業「国東半島石工民俗調査」の報告書であり、資料館報告書第一集として上梓するものである。

従来、石工等の職能集団のもつ技術伝承や信仰行事、あるいは村落における役割や特定の年中行事などの調査研究はいたって少ないこと、国東半島の各地に見られる磨崖仏や国東塔、五輪塔などの多くの石造物には、当然の担い手である石工たちの存在がなければならないこと、さらには近年急速に開発が進んで、伝承文化の衰亡が憂慮されることなど、現時点におけるこの調査研究の必要性はきわめて高いといえる。

本年度は、半島西部の村々に存在した石工たちの、中世から現代に至るまでの系譜、凝灰岩を加工した技術や民俗などを明らかにし、次年度は東部一帯と半島内陸部の調査を行う計画である。広く江湖の御叱正と御指導を賜われば幸甚である。

終りに、この調査の指揮をされた主任調査員の染矢多喜男氏をはじめ、調査に従事された調査員各位、ならびに御協力いただいた地元教育委員会と関係者の方々に厚くお礼を申しあげる次第である。

昭和58年2月

大分県立宇佐風土記の丘

歴史民俗資料館 館長

藤原正教

## 例言

一、本書は昭和57年度国庫補助事業による「国東半島石工民俗調査」の報告書である。補助事業の実施にあたっては、文化庁の木下忠主任文化財調査官の指導を受けた。

一、調査ならびに本書の事業主体は、大分県教育委員会であり、調査実施ならびに本書の刊行は、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館である。

一、調査の実施期日は、昭和57年6月から予備調査に入り、同年7月と10月に合同調査を行ない、翌年1月まで補足調査を行なった。

一、本調査の調査団の構成は次のとおりである。

調査団長	藤原正教	県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館館長
事務局長	村岡雄一	県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館総務課長
主任調査員	染矢多喜男	大分県文化財保護審議会委員
調査員	小泊立矢	県総務課県史調査員
同	金田信子	国東町歴史民俗資料館学芸員
同	渡辺文雄	県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究員
同	段上達雄	県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究調査員

一、本書の執筆分担は次のとおりである。

染矢多喜男	第2章第2節
小泊立矢	序章、第1章第3節
金田信子	第2章第1節
渡辺文雄	第1章第1節及び第2節
段上達雄	第2章第3節

一、本書の編集にあたって、染矢多喜男主任調査員の指導ならびに監修を受けた。

一、本書の編集は段上達雄が担当し、真野和夫、長谷雄智代、吉松祐子が協力した。

一、本調査にあたり、豊後高田市、香々地町、真玉町、大田村の各教育委員会に協力いただいた。

一、本調査に話者として、取材協力をしていただいた方の氏名は次のとおりである。

豊後高田市田染	豊田製沙松	73才（明治42年2月26日生れ）
同上	渡辺伊三郎	66才（大正5年8月6日生れ）
〃	倉成哲男	75才（明治40年11月22日生れ）
〃	岩田利光	72才（明治44年2月3日生れ）
〃	渡辺 一	67才（大正4年3月28日生れ）
〃	綾部喜寿	74才（明治40年9月11日生れ）
〃	山田正八	63才（大正9年1月20日生れ）
真玉町城前	土谷蓮美	68才（大正3年8月10日生れ）
香々地町夷	板井利太郎	71才（明治44年9月17日生れ）
豊後高田市	田染石工同業組合	

## 目次

序章 中世における関東半島の石工	1
第1章 近世における半島西部の石工	
第1節 石造品にみえる石工	3
1. 熊野の石工	3
2. 大仏などの石工	5
第2節 仁王像の系譜	8
1. 熊野系仁王像の系譜	8
2. 田染系仁王像の源流	13
第3節 法橋位を持つ石工	21
1. 板井系仏師・石工	21
2. 土谷善三郎定勝	32
3. 安藤源平僧恒	39
第2章 田染の石工	
第1節 石工の系譜と生活	46
1. 石工の系譜	46
2. 石工の生活	54
第2節 同業組合と製品	56
1. 同業組合	56
2. 製品	59
第3節 石切場と道具	68
1. 石切場	71
2. 技術と道具	75
イ、石切りと用具	75
ロ、縫工と用具	80
ハ、鍛冶と用具	84
ニ、運搬と用具	89
ホ、計測と用具	91
ヘ、機械の導入	91

## 序章 中世における国東半島の石工

大分県は、石仏をはじめ石造品が多く、ほぼ県下全域に分布していることは周知のとおりである。中でも国東半島や大野川流域などには、古く平安時代からの石造品が多く分布し、石造美術の一大密集地帯となっている。

しかし、これまでこれらの石造品についての調査研究は、磨崖仏や国東塔など一部を除いては、あまり進んでいないのが現状で、今後の成果を持つ分野は多い。今回調査を行う石工についても、調査研究は遅れており、関係町村誌などに、江戸時代を中心とした石工の名がわずかに出てくるにすぎない。そのような中で、県内の石工についてまとめたものとしては、

- ・望月友善「豊後宝篋印塔とその形式—附石工玄正のこと—」(『史蹟と美術』370号所収)
- ・渡辺信幸「灯籠童子とその作者」(『国東半島の文化』第5号所収)
- ・渋谷忠章「石造仁王の石工」(『大分の石造仁王』昭和55年刊所収)
- ・『大分県史』中世篇Ⅰ 第6章鎌倉時代の文化などが目につく程度である。

望月氏の論文は、南北朝期に、現大野郡一帯で活躍した、石工玄正について論考したもので、彼が得意とした宝篋印塔<sup>1)</sup>の作風・系統などを、中

### 石造品に残る国東半島の中世の石工名

年号(西暦)	石工名	種別	所在地
正応3(1290)	因 匠 僧 浄 彦	国 東 塔	国見町大字伊美・駒宮社
元応3(1321)	大 工 僧 良 戒	#	大田村大字小野・財前東墓地
元亨元(1321)	大 工 僧 尊 口	#	国東町大字堅来・長木家墓地
康永3(1344)	大 工 一 女	#	東京都港区・根津美術館
貞和4(1348)	工 西 上 阿	三 重 塔	山香町大字内河野・西明寺
延文5(1360)	大 工 妙 空 西 蓮 小 工 平 佐 清 光	板 碑	安枝町大字掛樋・岩屋堂
応安6(1373)	大 工 智 安	宝 篋 印 塔	山香町大字西中尾・三社八幡宮
応安8(1375)	大工造心五郎太郎	国 東 塔	豊後高田市大字平野・熊野墓地
永和4(1378)	沙 弥 大 心	十 五 石 像	国東町大字大恩寺・文殊山寺
永徳3(1383)	大 工 口 妙 口	宝 篋 印 塔	国東町大字来満・金剛寺
水應4(1384)	大 工 五 郎 大 郎	国 東 塔	山香町大字貫井塔ノ本
文明10(1478)	作 者 清 普	仁 王 像	国東町大字瀬戸寺・廻戸寺

心に述べたものである。大野郡一帯には、この玄正をはじめとして、鎌倉時代から室町時代末まで、各種石造品に20名の石工の名を見ることができ、その系譜等については不明な点が多い。

渡辺氏のもは、西国東郡真玉町一帯に分布する、灯籠童子(童子像が、火袋を頭に支えたり、火袋状の火袋に腰にさげたりした特殊な石灯籠)の作者について、調査研究したもので、土谷定勝・安藤源平という2名の石工について、その作品の特色などを論じている。両者は、江戸時代末から明治時代始めの石工で、共に法橋位(僧綱に授けられる称号であるが、中世以降には技能優秀な大工・画工・建師などにも授けられた)を有する。この法橋位も、江戸時代になると名のみで、技能的に劣った人物でも、法橋位を名の傾向が見られるようになる。しかし国東半島など地方になると、法橋位はやはり江戸時代末まで、技能優秀な人物が有していたようである。

渋谷氏のもは、西氏著「大分の石造仁王」の中の一節で、主に石造仁王像に見られる石工について述べたものである。中でも、江戸時代末に活躍した、国東町浜崎の石工佐藤茂助は、今後系譜・作品ともに、十分な調査が必要と思われる石工である。

# 第1章 近世における半島西部の石工

## 第1節 石造品に見える石工

### はじめに

江戸時代になると、各種石造品の造立が急激に増加する。全国的に見れば、寛文年間(1661~73)ころから葛橋の急増(1)や、庚申塔をはじめとする民間信仰関係の石造品の増加が著しい。国東半島西部でもほぼ同様で、多くの石造品が造られるようになると、専業の石工の数も増え、名を刻む例も多くなる。

半島西部の場合、はっきりと石工名を確認できる例は、寛文13年(1673)銘の、大田村田原野宮社の石燈籠の「石大工惣三郎」が初見である。以後多数の石工名が判明するようになるが、この調査により、次の様に大別することができた。第1は、夷村(現香々町大字夷)を中心に、夷谷の豊富な安山岩を石材として、西暦1800年前後から活躍した板井家とその門弟達。第2は、夷村に隣接する城前村(現真玉町大字城前)を本拠として、同じころに活躍した土谷家とその門弟達。第3は、田染石という凝灰岩の柔かい材質を生かして、1800年代から現在まで、その石工技術の伝統を保持する、田染(豊後高田市)の石工である。

しかし、これら主要な石工集団の系譜以外にも、従来ほとんど知られていない小集団の石工が地区の。例えば、熊野村(豊後高田市大字平野町地区)には、享保年間(1716~35)から安永年間(1772~80)のほぼ50年間、他の地域の石工に先がけて、仁王の造立に手腕を発揮した、松本姓を名のる一派がある。また大力村(豊後高田市大字大力)には、

小表1 石工松本銘の仁王像

物件名	造立年	石工銘	所在地
智恵寺仁王像	享保14年(1729)	石工熊野村・松本吉左衛門・曾右衛門	豊後高田市大字大隈
白賢神社仁王像	宝暦2年(1752)	熊野村石工・松本吉右衛門	大田村大字下赤洲
大儀寺仁王像	享保10年(1760)	田染石工・松本平次郎・岡村伊曾七	安岐町大字馬場
電書寺仁王像	天明5年(1768)	石工熊野村・松本平次郎	豊後高田市大字築地
田原若宮仁王像	安永6年(1777)	石工熊野村・松本平次郎宗作	大田村大字水松

【大分県史】の中世書1では、鎌倉時代から南北朝末期までの、県内に分布する石造品に見られる、石工名を拾い出して考察を加えている。これまでどちらかというと、個別の石造品や金百年表の作成が主であった、本県の石造美術の分野において、銘文からその造立の背景を追求するとともに、鎌倉時代・南北朝期、大分県における石工に関して述べたものである。

本調査をまとめるにあたって、これらの成果をもっと参照させていただいた。

今回の調査は、近世以降の石工が主な調査対象となるが、前史ともいえるべき中世の石工について記す。現在判明している国東半島全域の石工を表すならば、表の様になる。

大平が「大工」と記しているが、これは「石大工」あるいは「石造大工」のことである。このほか大工以外の呼称としては、表にある「工巧」・「作者」や、「石切」・「佛師」などがある。

造立年代を見ると、同じ石造品密集地帯の大野郡では、鎌倉時代末から室町時代末まで、石工名を刻んだ例が見られる。しかし国東半島では室町時代の例は、現在のところ1例しか確認されていない。このように、室町時代になって、石工名を刻んだ石造品が減少するのは、全面的な縮小でもある。田原孝太郎氏は、鎌倉・南北朝時代の石造品に石工名が多く刻まれているのは、彼等が作品に対しての責任を明らかにする芸術家であり、近世の専業の職人には異なっており、自信を持っていたことが推察される<sup>60</sup>、と述べている。

大分県の場合でも、大きなもの・優秀なものに名を刻んであるということは、芸術家としての自負心からも考えられる。しかし石工の中には、僧侶の単なる職人とは異なり、芸術家を持っていたことが推察される<sup>61</sup>、と述べている。

大分県の場合でも、大きなもの・優秀なものに名を刻んであるということは、芸術家としての自負心からも考えられる。しかし石工の中には、僧侶の単なる職人とは異なり、自信を持っていたことが推察される<sup>62</sup>、と述べている。

次に南北朝から室町時代になると、石造品は小形化し、力強さを失ったもの、形態の簡略化されたものが、大半を占めるようになる。このことは、それまで限られた階層で作られていた石造品が、他の階層にまで浸透したことを意味しよう。

簡素な一石五輪塔などの流行からも考えられるように、石造品の需要が増加し、小形化・簡略化されてくると、道具と石材さえあれば、農作業人は農作業の合間に石を刻んだであろうことは、十分考えられることである。石造品に石工名を刻まなくなったのも、兼業の石工の作品が、大半を占めるようになったからではなからうか。

岩戸寺石造仁王像は、現在のところ丸彫りの在銘石造品としては、全国で最も古い例である。それまで見られなかった新しい形式のもの、さらにはある程度の大きさや水準のものも造立したことから、「作者の清き名を刻んだのではないかと考える。前述のように、大野郡一帯には、室町時代を通じて、石工名を刻んだ石造品が残っている。現在確認されている12例中7例が石燈である。石燈ぐらいの大きさ・構造になると、専門の石工の手によらなければ困難であったのであろう。

今回の調査地点である香々町・真玉町にも、近年銘のある石造品を含めて中世の石造品は多い。しかし石造品から石工の系譜をたどるには、悉皆調査や精密な実測などが必要となり、時間的にも不可能なことである。ここでは、中世を通じて、これらの地に石工達が活躍したのであろう、ことを記すにとどめておく。

- 注1) 玄正の在銘石造品5点中、4点が宝篋印塔である。
- (2) 『日本の石』第8号(木村 昭和33年刊)、望月友典氏が全国の中世石工一覧表を掲載しているが、173例中、鎌倉・南北朝時代が140例、室町時代が33例となっている。
- (3) 『日本石工史』 藤森泰 昭和46年刊。
- (4) 国東半島の場合石工名の判明する12例中、銘文から見ると、経供養11、追善供養2、逆修2、現世安福住生歴業1、為法利益1となっている。造物の趣旨ははっきりしていない宝篋印塔も、納経のために建立されたと思われる。

小表2 熊野地区の松本姓の墓碑

没年	俗名	戒名
延宝5年(1677)	松本長吉	
# 6年(1678)	松本六兵衛	陽雲道林禪定門
元禄7年(1694)	松本六兵衛文	秋實禪定門
正徳1年(1711)	松本原助	梅山道玄禪定門
享保1年(1716)	松本虎吉女	天真了智信女
# 19年(1734)	松本平六女	玄照了智信女
寛保1年(1741)	松本武右衛門直勝	鎌宗宗栄禪定門
宝暦6年(1756)	松本六兵衛宗勝	新東家秋山運信士
# 10年(1760)	松本武右衛門	菊園淨永信士
# 14年(1764)	松本字右門子きそ	夏月妙相信女
文化1年(1864)	松本字右衛門	秋宗玄信士
# 10年(1813)	松本字右衛門娘	寒月西飯信女
文政4年(1821)	松本里助娘	青源玄女

享保14年(1729)に豊後高田市来嶋応利山中の報恩寺に仁王像を刻んで、松本吉左衛門と同曾右衛門である。共同製作者として名を並べている二人は、その名の配列順からして、吉左衛門の方が年長であることは間違いないと思われる。また、前者が報恩寺像以降その銘を残していないこと、後者が報恩寺像から28年後の宝暦2年(1752)に、大田村白賢神社の仁王像を刻んでいることなどから判断して、両者は恐らく親子の間柄であったと考えられる。その後、宝暦10年(1760)造立の安岐町大儀寺仁王像の石工銘には、松本儀平次と同伊曾七の二人の名が見える。伊曾七については、それ以外の作品に名をとどめないが、儀平次の方は大儀寺像以後、明和5年(1768)の電雲寺(豊後高田市大字薬地)の安永6年(1777)の田原若宮社(大田村大字水松)の各仁王像にその名を残している。彼は、仁王像以外にも大田村大基地の観音菩薩石碑(安永3年、1774)にも名をとどめており、かなり長期間にわたって積極的に活躍したと思われる。

報恩寺仁王像を初見として、田原若宮仁王像にいたると、松本姓の石工達の活躍期間は、1700年代中頃のほぼ50年間にわたる。熊野地区の墓碑銘調査によれば、旧熊野村(現豊後高田市大字平野)の地には、たしかに延宝年間から文政年間頃までの約150年間にわたって、松本姓をもつ一族が居住しており(小表2参照)、石工松本某もその中に含まれて

いたことは疑いない。しかし、現在熊野の地には松本姓の家は1軒もなく、また、同地にある唯一の寺院今熊野山胎藏寺の過去帳(現在文化・文政以降のものしか残っていない)にも、松本姓はみあたらず、江戸末期のある時期に農村したものであろうか。いずれにしても、現在まで家系の続いている、同地の生地氏・後藤氏・井堀氏等と比べて、松本姓の墓碑の数は3軒程度で少なく、せいぜい同時期に1軒ないし2軒程度が存在するにすぎなかったと思われる。したがって、各仁王像に刻まれた石工、松本吉左衛門・曾右衛門・儀平次・伊曾七は、各々親子ないし兄弟の間柄であった可能性が高く、報恩寺像から田原若宮像までの約50年間の年代差は、むしろ吉左衛門と曾右衛門・曾右衛門と儀平次が、各々親子関係にあったことを示している。伊曾七については、名前に「曾」の字のつくことから、やはり曾右衛門の子、儀平次の弟であったと考えられる。なお、曾右衛門については、胎藏寺門前の地蔵石碑に、「施主當村松本曾右衛門」と、その名をとどめているので付記しておく。

このように、松本一派ともいうべき石工集団が、1700年代中頃、他の夷・城前の石工、田染の石工等に先がけて、熊野の地を本拠地として、仁王像製作に手腕を揮っていたのである。彼らの石切場が、熊野のどの辺りにあったかは定かではないが、石形に産した安山岩質の地質が産した当地

小表3 鷲海信四郎の在銘品

造立年	物件名	石工銘	所有	所在地
天保7(1836)	鳥居	願主 鷲海信四郎自刻	熊野神社	豊後高田市大字人力尾岩屋
# 9(1838)	鳥居	石工大力岳 鷲海信四郎	大所神社	大字加礼川原山
# 11(1840)	鳥居	大力村石工 鷲海信四郎	春日社	# #
# ( )	鳥居	石工城前村石神三郎・大力村鷲海信四郎	豊日宮	# # 鶴
安政5(1858)	鳥居	石工 鷲海信四郎	桂神社	大字彌玉川原
万延1(1860)	大日如来尊像 千手尊	佛師法橋土谷定勝 鷲海信四郎	岩屋堂	大田村大字下後木下

は、彼らの仕事場としてうってつけであったに違いない。彼らの出自と消息については、今回の調査では明らかにできなかったが、弘化3年(1846)、大田村岸奈の大神宮の鳥居を造立した後藤屋久、文久3年(1863)胎藏寺仁王像を製作した後藤屋久が、共に熊野村の石工であったことを考えると、既にこの頃までに石工松本一派は商業ないし雇付していたと思われる。

## 2 大力などの石工

豊後高田市の東部、都甲地区の一画、旧大力村堀岩屋にある稲荷神社の鳥居には、「天保七年、丙申正月 願主鷲海信四郎自刻」という刻銘がある。

「自刻」というのは、造立の発願主である鷲海信四郎自らが、この鳥居を刻んだということである。鷲海信四郎は、この稲荷社の所在する旧大力村で、19世紀の中頃に活躍した石工である。小表3は、彼の手になる在銘石造品の、年代順に示したものである。これを見ると、鷲海信四郎が、主に鳥居を手がけた石工であったことが知られる。とくに、天保9年(1838)の屋山六所神社の鳥居は、その建立記念碑によるところ、大庄屋以下願主25名、新城市・梅木村・一畑村・長岩屋村の4村総出の夫力のもとに造立されたもので、その安山岩製の巨大かつ荘重な作風は、彼の石工としての構想力の並々ならぬことを示している。天保11年(1840)の戴鳥宮の鳥居や、万延元年(1860)の岩屋堂大日如来・臥牛像において、城前石工土谷

善三郎と共同製作している点から、彼もまた石工としては、格の高い、高度の技術水準をもった設計家であったに違いない。土地の古老の証によると、大力村のうち、堀岩屋には、明治時代の終り頃まで、鷲海姓を名のる石屋があったとのことである。また、鷲海姓については、城前の石工に鷲海藤八がおり、あるいは、彼もまた城前の石工土谷家のもとで、石工の技術を学んだのかも知れない。

鷲海信四郎の活躍した大力村には、彼と同時代、あるいは一世代遅れる頃に活躍すると、大野壽右衛門基理がいる。安政6年(1859)、豊後高田市大字岩崎屋筋の、六所権現鳥居を初見として、万延元年(1860)、同市御玉若宮八幡社の石橋、文久2年



写真1 屋山六所神社鳥居





写真2 若宮八幡社石橋

(1862)、同 斯智恵寺の山紙社の鳥居、慶応元年(1865)、同 磯町恵美須宮の鳥居にその銘を残す。若宮八幡社の石橋は、安山岩製のアーチ橋で、小規模ではあるが非常に堅牢な構築性を示している。同じ大井村を本拠地とする大野壽右衛門と、鷺海西四郎が、どのような関係にあったかは定かでないが、その活動期を同じくし、両者ともに単なる石彫技術のみでなく、建築家の構築性をも要求される鳥居や石橋などに、手腕を発揮した点、何らかの関係を有したことが予想される。

以下、在銘品としてまとまった遺品に恵まれないため、その系譜を知ることができないが、江戸時代に、たしかに活躍し、その名を個々の作品にとどめている石工達について記しておくこととする。

- 石大工惣三郎 大田村永松の、田原若宮社にある豊瀧の棟石と思われる安山岩製の石柱に名をとどめる。今回の調査で知られた、江戸時代最古の、寛文13年(1673)の石工銘である。
- 石屋惣十郎 黒山長安寺本堂横の、2基並んであるうちの元禄13年(1700)銘の宝篋印塔と、豊後高田市加礼川字中平にある、同14年(1701)銘、

青面金剛を平円彫した庚申塔に刻銘がある。宝篋印塔の方に、細工齋村とあることから、当加礼川出身の石工であったことが知られる。

- 石工柏木忠右衛門 年号不詳であるが、豊後高田市大字路にある、富貴社の仁王像を刻んだ石工である。同所中園にある、享保8年(1723)銘庚申塔の作者、「石工忠右衛門」と恐らく同一人物と思われる。「柏木」という姓は、この露地区に数軒あり、彼は、当地の出身である可能性が高い。
- 肥前石屋馬場忠右衛門 享保17年(1732)造立の、大田村南俣水蔵神社に立つ仁王像にみえる石工銘である。豊後高田市田福にある月読宮の鳥居を造立した、防州石工弥左衛門元只と並んで、県外出身の石工の貴重例である。
- 石屋仁右衛門 同上 歳神社の、享保20年(1735)造立の燈籠に見える石工銘である。
- 石工富夫 富貴寺境内にある、元文5年(1740)銘の庚申塔に刻まれる。
- 石工幸八、丈作 豊後高田市松行にある、安永3年(1774)造立の、牛頭社の鳥居に見える石工銘である。
- 石工諸田村万吉 大田村大字小野田原河内に立

つ、龍華寺祖秀建立の、大乗妙供養塔(文化5年、1808)を刻んだ石工である。諸田村は、現安岐町の諸田である。

- 石工宗助、生斗 文化14年(1817)造立の、大田村下波多方、鶴神社境内にある大燈籠に見える石工銘である。
- 石工熊野村後藤屋敷・俣見村小矢八百平・同村小矢信右衛門 大田村大字永松俣余の大神宮にある、弘化3年(1846)銘の鳥居を造立した石工達である。後藤屋敷は、文久2年(1862)、豊後高田市大字平野にある胎藏寺の仁王像を造立した後藤光久と、同系統の石工であろうか。俣見村は、現大田村大字俣水である。
- 常盤村石工助成松右衛門 豊後高田市草地の黒松地区にある山神宮の、安政7年(1860)銘の鳥居に見える石工である。常盤村は、現真玉町大字常盤であり、この石工は、城前の石工達と共に活躍した人物である。
- 石工山口慶三郎 豊後高田市大字草地米山の、山神宮の鳥居(安政7年、1860)を造立した石工である。
- 石工後藤光久 豊後高田市大字平野の胎藏寺に立っている、文久3年(1863)造立銘の仁王像を、日出の石工一宮正行と共同製作した石工である。
- 防州床波石工弥左衛門元只 豊後高田市大字田福の月読宮にある、花崗岩製の鳥居(慶応4年、1868)を造立した石工である。

(その他の石工および石工在銘品については表1、2を参照のこと)

## 第2節 仁王像の系譜

### はじめに

国東半島における、石工在銘の仁王像は、文明10年(1478)清晋作の岩戸寺(国東町大字岩戸寺)の仁王像が初見である。この像は、国東の仁王像としては、比較的厚みの富んだ安山岩に半円彫されたものである。その動勢に富んだ姿態や、肉取り、衣文の表現等に、鎌倉期以来のアリフティに富んだ仁王像の名残りをとどめている。この像の作者、「清晋」は、恐らく、中央の石造彫刻の伝統に直に触れ、その技術を学んだ作家であったろうと推測される。

この、写実味に富んだ岩戸寺の仁王像に先駆し、さらには、その源流になったと思われる作品に、文殊仙寺(国東町大字大恩寺)の仁王像がある。岩戸寺像より一まわり大きく、ほぼ等身大のこの仁王像は、『文殊仙寺誌』(文政9年、1826)によれば、同寺所蔵の十王像・役行者像とともに、永和年中に造立されたと伝える。岩戸寺像に遡ること、約100年である。阿・吽両像の身構え、天衣や腰裳の表現など、全体のプロポーションにももちろん、細部の表現にいたるまで、岩戸寺像と相似しており、両像が機次的系譜を同じくすることは明らかである。ただ、両像に、100年余の年代差があることを考慮するならば、岩戸寺像が、文殊仙寺像の作風を踏襲しながら、その臨模からくる形式の甘さ、省略的表現がみられるもの譲けるのである。文殊仙寺像には、その初発性を裏付ける、刀の牙えがみられるのに対し、岩戸寺像にはかたちの鈍化したところがあり、刀の切れ味も鈍くなっている。ここに、我々は、岩戸寺仁王像に先駆する作品を知り得たことを喜ぶ次第である。

石工在銘品の集中する江戸期になって、国東半島の仁王像も、石工の系統によって、いくつかの作風系譜がみられるようになる。これを、西国東に限定するならば、大きくは、隔立した3つの系譜を見ることができ、一つは、先述した熊野村の石工、松本一派の手になる仁王像であり、他

は、夷・城前村の、板井・土谷両家の系統をひく仁王像であり、第3に、その夷・城前の影響下に成立したと推定される、田染系の仁王像である。年代的には、最初の松本派の仁王像が、他を先駆して、1700年代の初め頃から既に遺品を見ることができ、夷・城前の板井・土谷家系統、および田染系の作品は、ようやく、1800年代に入ってから現われる。作風の上からも、後2者が、安山岩と凝灰岩の違いこそあれ、密接な関係を有するのに対し、松本派の仁王像は、それらとは全く異なった表現形式をもっているのである。

### 1 熊野系仁王像の展開

豊後高田市大字文鑑の、応利山の8合目あたりには、かつて国東半島六郷山寺院の本山本寺として栄えた、大折山報恩寺の寺域が広がる。その入口、参道の両側に、やや小ぶりの安山岩製の仁王像一対が立っている(写真3)。その台座前面に刻され



写真3 報恩寺仁王像(阿形)



写真4 報恩寺仁王像の衣文表現

た銘文によると、この像は、享保14年(1729)に、当山現住沙門殿のとき、熊野村の石工、松本古左衛門・曾右衛門両人の手で造立されたことが明らかである。松本姓を名のる石工の作品の初見である。この像は、荒積みされた自然石の上に、右阿形、左吽形が配され、各々同じ安山岩製の台座に嵌込まれている。両者ともに、すこぶる短幅に刻まれたその像容は、天衣や腰裳の形式的表現と相まって、素朴雄渾た造型をみせている。

松本姓の石工銘をもつ作品は、この報恩寺像をはじめとして、そのほとんどが仁王像に終始しており、国東半島各地に所在する。石工松本某の在銘品については、前節にあげた小巻1の通りである。これら、一連の松本姓をもつ石工の作品は、ともに同質の安山岩製であること、一見雄渾味を帯びた特異な像容をもつことなどから、すべて同一系統の石工の作品であると考えられる。像は、いづれも膝部には比して頭部が大きく、その比率が、小児に近い短幅の像である。阿形像が、肩近くあげた左手に金剛杵を持ち、拳を握った右手を腰に置き姿勢をとるのに対して、吽形像は、右手を施無畏印に構え、左手を腰上に据える姿にみられる。また、後頭部から両肩にかけて飄曲した天衣や、腰裳の折返しなどにみられる不自然な形式的像容も、松本派仁王像に通有の特徴である。

これら一連の石工松本路の仁王像を標準作として、その作風を敷衍するならば、石工松本一派の作らみられるいくつかの作品が検出できるのである。

松本古左衛門の標準作である報恩寺像は、松本



写真5 報恩寺仁王像の脚部

一派の仁王像の初見として貴重であるが、そのあどけない小児を思わせる像全体のプロポーションといい、顔貌・体部の肉取りや、天衣・腰裳の細部表現にいたるまで、松本一派の仁王像のさがけとなるのである。とくに、腰裳の折返しの際に曇むような衣文表現、筒状の裳裾からのぞく膝頭の逆三角形の表現、顔の下から体側によって垂下する天衣のかたちなどは、松本系統の仁王像に特有の細部表現であるので注目したい。しかし、両頬を膨らませ、体軀をやや太りにしにつくるのは、報恩寺像、つまり吉左衛門側有の作風とみられる。それに対して、宝曆2年(1752)造立の、白鬘神社像(曾右衛門作)以後の松本一派の仁王像は、同じ忿怒相でも、頬骨が張り出し、顎のとがったかめしものにも変わり、体部も、腹のへこんだ、あばら骨が目立つ細身のものに変化するからである。

この吉左衛門作の報恩寺像と、像容の非常に近似した作品に、安国寺仁王像(国東町大字安国寺)がある(写真6)。造立年・作者名ともに不明であるが、同じ安山岩製であり、阿・吽両像の身構え、プロポーションから、腰裳の折返し、三角形の膝頭などの細部表現にいたるまで、松本一派通有の作風を示し、同系統の作品と見做してよいと思われる。そして、顔の膨らんだ顔と太りぎみの体軀も、この像が、松本古左衛門の手になることを示している。寺伝によれば、この像は、安国寺の旧山門にあった伝説作の仁王像が、戦国期に大友軍の兵火に会ったため、後世いづれの時に造立されたという。この像は、報恩寺像に比べて、顔貌や衣文



写真6 安国寺仁王像(阿形)

の影袂に、鋭さと張りがあり、息子曾右衛門との共同製作である報恩寺像が、古左衛門の晩年期的作品とすると、それ以前、彼壮年期の充実した頃の作品と考えられる。

次に、曾右衛門の作品であるが、古左衛門・曾右衛門父子の共同製作になる報恩寺像が、むしろ古左衛門の作風をより強く反映していると考えられるから、曾右衛門単独の、宝曆2年(1752)造立の白髻神社像(写真7、大田村大字下御所)を彼の標準作とすることができる。この像は、一連の松本一派通有の像容を示しているが、古左衛門作と考えられる報恩寺像や安国寺像に比べて、全体としてやや細身となり、顔貌や体軀の内取り、腰裳や天衣の表現に、より形式化が進んでいる。眉を吊上げ、頬骨を強調した忿怒相にもかかわらず、安国寺像で見た激刺とした初々しさや、仁王像の威厳は稀薄になっている。

この白髻神社像と同じく、曾右衛門の手になると思われる作品に、同宝曆2年造立の延隆寺仁王像(写真8、山香町大字立石)がある。像高2m25の巨像であるが、天衣の一部を上膊に巻きつけるなど、若干



写真7 白髻神社仁王像(阿形)

の相違はあるものの、像全体のプロポーションから、忿怒相、天衣や腰裳の表現にいたるまで白髻神社像に近似しており、両者が同一石工の手になることを予想させる。延隆寺のある立石は、熊野からは陽平を通り、山越えすと直ぐの位置にあり、熊野村の石工の作品が存在しても不思議ではない。享保14年(1729)の報恩寺像において、父古左衛門と共同製作したときの曾右衛門が、20~30歳の青年期にあつたと仮定すれば、白髻神社・延隆寺両像を製作した宝曆2年(1752)には、40~50歳の円熟期に達しており、両像とも曾右衛門の最も充実した活躍期の作品であるといえる。ちなみに、大田村南俣水にある歳神社の狗犬一對には、「宝曆二壬申大三月 石工くまの作之」とあり、あるいは、これも曾右衛門の手になるものかも知れない。

曾右衛門の息子と考えられる儀平次は、石工松本一派の中にあつて、最も多数の遺品を残している。在銘品のみに限っても、宝暦10年(1760)、安岐町大儀寺の仁王像、明和5年(1768)、豊後高田町築地電雲寺の仁王像、安永6年(1777)、大田村田原若



写真8 延隆寺仁王像(阿形)

宮の仁王像がある。また仁王像ではないが、安永3年(1774)には、同じく大田村大内基地に、観音菩薩の石碑を刻んでいる。そのほか、儀平次在銘品以外にも、作風の上から、彼の手になると考えられるものが、4、5件あり、彼の旺盛な製作意欲を窺わせる。

儀平次と伊曾七との共同製作になる大儀寺像(写真9)は、2mを超える巨像である。全体の身振りや、頭部を大きくつくるプロポーションなどは、他の松本一派の仁王像と同じであるが、阿形像の突つているような顔、阿形像の口を引込んだ波面には、どこことなく新調味があつて、特異な像容を呈している。細部についても、後頭部から肩・腋下へと流れる天衣、条線を刻んだ腕、縦に平行に畳む腰裳の折返し、三角形の膝頭などは、いずれも松本一派通有の表現である。しかし、天衣を撰れたように表現し、それを巻に巻きつけるやり方や、歯・口唇などに朱を入れるのは、この像をはじめとする儀平次の作品に個有な特徴である。しかし、大儀寺像から8年後、明和5年(1768)製作の電雲寺像(写真10)や、安永6年(1777)の田原若岩像(写真11)で



写真9 大儀寺仁王像(阿形)

は、大儀寺像ほどの造型力はなくなり、形の省略や萎縮がみられる。とくに、田原若岩像は、頭部に対して膝部が極端に小さく、手足のバランスも崩れ、肉取りや腰裳の衣文に省略が目立っている。「松本儀平次」という本名の後に、「宗信」という諱を刻んでいるあたり、かなりの高齢に達してからの作品かとも思われる。

以上の3件の儀平次銘の仁王像を、彼の標準作とすると、無銘の仁王像の中から、彼の作品に比定し得るものがいくつも見出される。

山香町小武寺の山門に直立する仁王像1対(写真12)は、その眼珠に銅板を嵌入してあることから、地元では、「金の眼玉をもつ仁王様」として親しまれている。この仁王像については、従来作者不明とされてきたのであるが、今回の調査で、これも松本一派の作品と判明したのである。像全体の身振りや、頭部の大きいプロポーション、後頭部から肩・体側へ流れる天衣、形式的に表現された腰裳、三角形の膝頭など、一連の松本一派の仁王像に共通するものである。従来無銘とされていたこの像も、今回の調査で、向って左阿形像の自然石の台座左



写真10 電雲寺仁王像（阿形）

側面に、方形の切り込みがあり、その中に銘跡があることがわかった(写真13)。刻痕、苔の付着など風化が著しいが、銘文は、「□和 □千□□/二月/□日/石□野村/□□」と判読される。江戸期の年号で、下に「和」の字がつき、「千」の干支をもつものには、元和8年(壬戌、1622)、天和2年(壬戌、1682)、明和9年(壬辰、1772)、享和2年(壬戌、1802)があり、この中で、松本一派の活躍した1700年代中期に該当する明和9年が、この像の造立年と考えて差つかないと思われる。また、「石□野村」は、「石工熊野村」である可能性が高く、これまたその作風とともに、松本一派の手になることを裏付けている。明和9年(1772)は、松本儀平次在銘の電雲寺仁王像(明和5年、1768)から4年後、田原若宮像(安永6年、1779)の5年前にあたり、この像が、松本一派の中にあっても、最も多作であった儀平次の作品であることはほぼ間違いない。曾右衛門作の仁王像よりもさらに頬骨が突出し、顎の張った顔貌や、大衣を被られたように表現(彫削像では右肩上で反転する)し、腕に巻きつけるのは、大儀寺像と共通した儀平次作品の特徴である。



写真11 田原若宮仁王像（咩形）

幅広い腰姿の折返しや、形式的で固い衣文の畳み方なども同様である。ここに、小武寺仁王像を、松本儀平次の標準作に加える次第である。件築市船部にある光明寺の境内へ続く石段の左右には、安永5年(1778)の造立銘をもつ仁王像(写真14)が立つ。阿・咩両像とも、台座を含めて、基礎3段、像高160cmほどの等身像である。頭上髷の左右両側から肩口にかけて、振るように天衣をつくり出し、それをいったん腕に巻きつけて体側へ流すのは、大儀寺・電雲寺・小武寺の各仁王像に共通した儀平次の作風である。安永5年という年代からいっても、彼の作品とみて間違いないと思われる。この像の特徴は、前3者に比べて、さらに誇張された表現が目立つことである。仁王の顔は、眼珠が大きく見開き、頬骨も一段と高く、胸のあばら骨を表現した条線も、より深く刻み込まれている。また、この像では、それまで縦に平行に畳まれていた腰姿の折返しの衣文線にかわって、波を打つような文様となり、安永6年(1779)の田原若宮像より近くになっている。この省略的な衣文表現は、儀平次晩年作の特徴といえるだろう。



写真12 小武寺仁王像（阿形）

安波町岡下にある岡所神社と、豊後高田市馬平の猛嶋神社の両仁王像も、造立年・作者名ともに不明であるが、その作風から、松本儀平次の手になるものと考えられる。岡所神社仁王像(写真15)は、小武寺像と同様に、眼珠に銅板を嵌め込んでおり、同像に近い頃の造立と考えられる。像全体の比較的自然的な表現からは、小武寺像より以前の、明和年間頃の作と思われる。猛嶋神社の仁王像は、腰姿の折返しの波文状の衣文表現において、光明寺像や田原若宮像と近似している。しかし、妻縮したような像全体のプロポーションからは、より後者に近く、儀平次最晩年の作風をよく表わしている。大儀寺像において、巨像に対する製作意欲を發揮し、諧謔味溢れる独自の仁王像の様式を完成させた儀平次も、その晩年に向うにしたがい、しだいに形式化と省略化の方向に傾いたようである。儀平次の弟とされる伊曾七は、兄との共同製作による大儀寺像にその名をとどめるのみで、彼単独の遺品は知られていない。従って、彼の作風が、いかなるものか推測の域をでないが、恐らく兄儀平次のそれに近いものであったろうと思われる



写真13 小武寺仁王像台座銘文

る。以上の熊野村の石工、松本一派の作品に比定される仁王像について、その作者と造立年代の関係をわかりやすく示すと、小養4のようになる。

熊野の地にあって、江戸時代中期のほぼ50年間を、吉左衛門・曾右衛門・儀平次および伊曾七と親子3代にわたって、仁王像製作に影枝を揮った石工松本一派は、国東半島における、いわば専門的技術者としての石工のさきがけをなすものであった。秀・城前の板井・土谷両家が、仏師法橋という僧侶をもった、中世的伝統に立脚した技術者集団であったとするならば、彼らは、何ら権威や資格をもたず、自らの「うで」となるべき技術のみを頼みにした、近世的職人としての石工集団であったといえるだろう。

## 2 田染系仁王像の源流

国東半島にあって、田染石とよばれる柔かい凝灰岩を主な石材として、現在までも、その彫刻の伝統を伝える唯一の石工集団である田染の石工組織が、いつ頃成立したかは大きな問題である。石工銘品の上で、田染石工と称するものの初見は、先述の空羅10年(1760)、大儀寺仁王像の、「田染石工 松本儀平次・阿姓伊曾七」であるが、これは田染石工についても、熊野村を出身とする松本一派のことであり、その作風の上からも、使用した石材の違いからも、直接現在の田染石工の系譜に繋がるものではない。しかしながら、石材に限っていうならば、田染の石工達が、当初から現在のような石彫に好適な田染石のみを使用していたと



写真14 光明寺仁王像（叫形）

は限らない。明和2年(1765)、豊後高田市陽平にある烏帽子観音堂に、「石工上野村 安藤藏七」が石段を造営しているが、これは、石材としては比較的硬度と粘着力に富んだ安山岩を用いているし、現に、田染地区駒山の三宮八幡社近くには、安山岩を切出した石切場が、戦前まであったことが知られている。田染石工も、現在のように、田染石が豊富に切出される以前には、安山岩を重要な石材としていたのである。

今回の調査で確認した田染石工の在銘品のうち、その初期に属する明治以前の石工在銘品を示すと、小表5のとおりである。多くの遺品にもかかわらず、田染で活躍した石工の在銘品は意外に少なく、また、その歴史もさほど古くなく、およそ1800年代の初め、文政年間頃からようやく存銘品に恵まれるようになる。しかし、江戸末最期頃以降には、田染地区間戸の石切場を中心として、急速に石工の数が増大したようで、現在、「大門の古墓」とよばれている墓地には、ほかの墓石にまじって間戸の石切場で活躍した石工達の墓石が散見され、数10人の石工の存在が確認される。その中に



写真15 両所神社仁王像（阿形）

は小表5に示した石工達のうち、嘉永3年(1850)、大歳神社仁王像に銘を残す河野種造や、明治9年(1876)、田原若宮に総社記念石碑を造立した河野吉之十の名も見えている。江戸末から近代にかけての田染石工の発展は、目覚ましいものがあり、それは間戸の石切場が開発され、石材として加工しやすい大量の田染石が切出されるようになったからであろう。

田染間戸の石工である河野種造は、嘉永3年(1850)、現豊後高田市大字駒中ノ上居にある大歳神社に、一对の仁王像(写真15)を造立した。田染石を石材とし、作風を同じくする、いわゆる田染系仁王像の中では、江戸期に造立された唯一の石工在銘品である。この仁王像は、その破損の激しさにもかかわらず、等身像としては驚くほど大きな大きさを感じさせる優品で、忿怒相や体驅・四肢などの力のこもった肉取りには、追真的なリアルティがあり、袈裟の衣文も自然で質感に富んでいる。先述の松本一派の作品をはじめとする素朴で稚拙味のある仁王像に比べ、極めて写実味に溢れた像容である。



写真16 猛嶋神社仁王像（阿形）

この大歳神社仁王像に代表される田染系仁王像は、凝灰岩の田染石製であること、その像容が極めて写実的であることをその特徴とし、その作品の分布は、豊後高田市を中心に、国東半島のほぼ全域におよぶ。小表6は、石材・作風の上から、明らかに田染系の仁王像に比定されるものを、造立年代順に示したものである。

このうち、天保6年(1835)造立の二宮八幡社仁王像は、田染系仁王像の作者と造立年代



写真17 大歳神社仁王像（叫形）

王像は、阿・叫両像とも2mを超す巨像である。一連の田染系仁王像の中にあって、その彫技の優秀さにおいて、ひときり目立つ存在である。忿怒相を示す顔から、肩・胸さらには下半身にいたるまでの、筋肉の凹凸を表す適切なモデリング、天衣や袈裟の衣の質感を適格に捉えた衣文表現など、頭頂から足先まで一貫してみられる写実表現には、田染系仁王像の初期作としての初々しさが



写真18 二宮八幡社仁王像（阿形）

見てとれる。このような首尾一貫した写実的表現は、技術的な優劣による差こそあれ、田染系仁王像に共通した特徴である。

関戸の石切場が開発され、1800年代の初め頃文政年間あたりになって、初めて本格的な石工集団として成立したと考えられる田染系の石工達の中において、鎌倉時代以来の仁王像の造形の伝統を受継いだような、洗練された写実的表現が可能であったことは驚嘆すべきことである。それでは、彼らほどのようにしてこのような仁王像造立の技術を学び、どこにその規範を求めたのであろうか。

田染中村にある元宮八幡宮には、3軀の仁王像

小表5 田染石工在銀品一覽（明治以前）

造立年	物件名	石工銘	所 有	所 在 地	石 材
明和2 (1765)	石 段	石工上野村 安藤藏七	鳥帽子観音堂	豊後高田市大字平野平等	安山岩
文政2 (1819)	鳥 居	石工田染真木村 河野作兵衛	山 神 社	〃 大字田福上野部	安山岩
〃 8 (1825)	石 塔	田染石工 渡辺太郎		大田村大字永松中村	凝灰岩
〃 9 (1826)	仁王像	田染石工 金高佐平	梅 遊 寺	〃 大字一畑梅遊寺埜	凝灰岩
嘉永3 (1850)	仁王像	河野橋造	大 蔵 神 社	〃 大字高中ノ土居	凝灰岩
安政4 (1857)	鳥 居	富村 金高佐平	金 昆 龍 宮	〃 大字真中真木	凝灰岩
明治9 (1876)	石 碑	タシマト石工 河野吉之十	田 原 若 宮	〃 大字永松中村	凝灰岩



写真19 元宮八幡社仁王像

が存在する。現在、社殿前庭にある一対は、元來別のもので、うち難陀作風を示す方は、境内の南隅に置かれる像と対をなす。残りの1軀は、像高2m36の堂々とした巨像であるが、その像容は、一連の田染系仁王像とよく近似している。むしろ、像全体の自然なプロポーションや、顔貌・体軀の適切なモデリング、大衣・腰裳の神経のいきどいた緻密な表現は、どの田染系仁王像より優れ、それらに先駆する作品であることがわかる。あるいは、田染系仁王像は、この元宮八幡宮像を規範として出発したのではなかろうか。田染地区のほぼ中央、江戸末期における田染の石工たちの石造品

小表6 田染系仁王像一覽

造立年	物件名	所 在 地	石 工 銘
文政11 (1828)	願止寺仁王像	豊後高田市大字相原字森園	
〃 12 (1829)	長安寺仁王像	〃 大字加礼川字望山	
天保2 (1831)	成仏寺仁王像	国東町大字成仏	
〃 5 (1834)	福厳寺仁王像	国見町大字向田字寺下	
〃 6 (1835)	二宮八幡社仁王像	豊後高田市大字真中野戸	
〃 11 (1840)	貫船社仁王像	安岐町山浦字小瀬原	
〃 12 (1841)	山神社仁王像	〃 大字油留木字下油留木	
弘化5 (1848)	山神社仁王像	〃 大字系永字峰	
嘉永3 (1850)	貫船社仁王像	豊後高田市御字上ノ段	
〃 ( )	大蔵神社仁王像	〃 御字中ノ土居	河野橋造
安政2 (1856)	成仏寺仁王像	国東町大字成仏	
慶応2 (1866)	原天澤社仁王像	〃 大字原字畑中	
昭和3 (1428)	安養寺仁王像	豊後高田市大字真中野戸	都甲八郎・渡辺一策 都甲八郎・渡辺吾男 同一輩・坂本安吉
昭和10 (1935)	白鳥神社仁王像	〃 大字小田原字高伏	

生産の場であった、関戸の石切場にも近い田染元宮に、彼らの手になる仁王像の源流ともいふべき作品が存在するのは意義深い。

ところで、例えば、文化元年(1804)造立銘の、豊後高田市大字尾上の長賢寺棟にある地藏堂の仁王像や、文化10年(1813)造立銘の同市長賢屋行園の山神社にある仁王像は、その石工銘から、両村の仏師法橋寄伯、すなわち坂井甚蔵国伯の作であることが知られる。その高く籠り上げた鬘や顔・胸・四肢の内付け、腰裳の文文のリアルで自然な表現など、その像容が田染元宮の当該仁王像に非常に近似しており、あるいは、これも法橋寄伯、ないしその周辺の石工の手になるものかもしれない。これは、様式的近似を前提とした推測の域を出るものではないが、「夷石工から田染石工へ」という石工技術伝承の系譜を示唆するものである。安山岩と凝灰岩という石材の違い(しかし、硬い石材から柔らかい石材への移行は可能である。)はあるが、初期の田染石工が安山岩をも手がけたことを考慮すれば、この系譜の図式も不可能とは言い切れない。大方の教示を持つ次第である。

別表1 石工在鑑品一覧表 (豊後高田市・大田村)

造立年	物件名	石工銘	所有	所在地	備考
元禄3(1321)	富東塔	大工豊良哉	西前家墓地	大田村大字小野田河内原	安 大藏主大公義氏大工豊良哉或取由
貞和4(1348)	三重塔	上野上阿	山寺町大字内野田	福	
応永6(1373)	宝篋印塔	石工 賢安	三社八幡宮	山寺町大字西中尾	安
応永8(1375)	南東塔	大工通心五郎大郎	新野墓地	豊後高田市大字平野町石	福
永徳4(1384)	四東塔	大工五郎大郎	山寺町大字賢井塔ノ木	福	
寛文13(1673)	燈籠	石工惣一郎	田原若志寺	大田村大字赤松中村	柿石のみの規文山背龍正寺鐘門石工惣一郎
元禄13(1700)	宝篋印塔	藤田与村十郎	長安寺	豊後高田市大字加川山	安 大阿闍梨法印藤田大阿闍梨 長安寺
元禄14(1701)	廣中塔	石工藤惣十郎	山寺町大字藤山	安 藤田金剛を刻む 藤主 匠左衛門はか	
享保4(1719)	石塔	石工佐生助	豊後高田市大字高直	大乗妙興六十六部日本國供養塔	
享保8(1723)	突中佛	石工志右衛門	豊後高田市大字高直中園		
享保17(1732)	仁王佛	石工木重忠右衛門	豊後高田市大字高直口	安 寺寄進 藤田長直石工佛 凡三 永松寺ノ、賢井	
享保9(1724)	石佛	鍛冶原作七衛門	成神寺	大田村南泉永市場	安 山上 重光宗南門
享保14(1729)	仁王佛	松平吉安衛門 松平登之助	成神寺	豊後高田市大字栄徳心山	安 藤主 藤田長直石工佛 凡三 永松寺ノ、賢井
享保17(1732)	仁王佛	石匠松平藤三右衛門	成神寺	大田村南泉永市場	安 藤主 藤田長直石工佛 凡三 永松寺ノ、賢井
元禄20(1735)	佛座	石工藤三右衛門	長興寺	大田村南泉永市場	安 藤石のみの規文石見舞半圓河野平次
元禄5(1740)	廣中塔	石工次夫	長興寺	豊後高田市大字高直	安
宝暦2(1752)	鉦大石	工くまの	成神寺	大田村南泉永市場	安 寺寄進 風見村一野分 早田大衛門
宝暦2(1752)	仁王佛	柳村工部本善寺門	白静神社	大田村大字下番	安
宝暦2(1752)	仁王佛	(同上カ)	成神寺	山寺町大字石上忠念寺	安
宝暦10(1760)	仁王佛	石工藤三右衛門	大蔵寺	安岐町大字高直上馬場	安 觀主 水松氏石工藤三 吉取次右衛門
天明2(1765)	石佛	石工野村安藤藤七	瑞福寺	豊後高田市大字赤松中村	安
天明5(1768)	仁王佛	石工藤村松平儀平次	龜藏寺	豊後高田市大字赤松中村	安 山上 当山八世末光
安永9(1772)	仁王佛	石工藤村 〇〇〇	小武寺	山寺町大字小武	安
安永3(1774)	石佛	石工藤村松平儀平次	大内轟鳴	大田村大字武野	安 (願首善羅を半肉内) 奉寄進 民助
安永3(1774)	石塔	前石工土谷茂太郎		豊後高田市草地	安
安永3(1774)	石佛	石工幸八・文作	牛頭寺	豊後高田市大字松行	安
安永5(1776)	仁王佛	(松平儀平次カ)	光明寺	杵築町大字藤平橋南	安 藤主 藤田長直石工藤三 三社八幡中村
安永6(1777)	仁王佛	江崎柳津長平左衛門	成神若志寺	大田村大字赤松中村	安 願主 版本藤藏
享和2(1802)	燈籠	石工成平兼成源後	延命寺	豊後高田市大字福崎小崎	安 山上 安岡貞右衛門
天明1(1804)	仁王佛	石工河野辰兵衛	地蔵堂	豊後高田市大字藤平橋上限上	安 山上 藤主 藤田赤右衛門
文化3(1806)	石佛	石工奥島徳助忠孝	龍王寺	豊後高田市大字並石	安
享和不明(1807)	馬蹄	石工藤殿高助忠孝	大内神社	豊後高田市大字三郷	安 (柱のみの規文)
文化5(1808)	石塔	石工藤田村吉		大田村大字小野田河内原	安 大阿闍梨藤田村吉 藤田長直石工藤三 三社八幡中村
文化9(1812)	石塔	仏師興村法徳僧自	身命神社	豊後高田市大字長松原上	安 藤主 藤田長直石工藤三 三社八幡中村
天明10(1813)	仁王佛	仏師興村法徳僧自	身命神社	豊後高田市大字長松原上	安 村主 山口忠兵衛 現藤主 土居〇〇〇
文化14(1817)	燈籠	石工三助助 半平	神神社	大田村大字高直	安 大阿闍梨 川口三助 藤田長直石工藤三 三社八幡中村
文化5(1819)	馬蹄	石工藤田村吉	山神寺	豊後高田市大字藤田上野部	安 願主 影野佐治右衛門
文政2(1820)	石佛	中邑石工藤高直	白鳥神社	豊後高田市大字小中原高直	安 藤主 藤田長直石工藤三 三社八幡中村
文政8(1825)	石佛	石工藤村三吉三郎	佛徳神社	豊後高田市大字御前金天寺	安 藤主 野野市左衛門・山田藤三郎常定
文政8(1825)	石塔	田原石工藤佐平		大田村大字赤松中村	福
文政9(1826)	仁王佛	田原石工金重左衛門	瑞壽寺	豊後高田市大字御前寺町	福 藤主 久藏
天保7(1836)	馬蹄	長瀬善海寺西前	船岡社	豊後高田市大字大内原	安 高橋保助・渡邊忠十郎

安は安山石、福は福沢石、花は花崗石を示す。

造立年	物件名	石工銘	所有	所在地	備考
天保9(1838)	馬蹄	石工長瀬善海寺西前	六所神社	豊後高田市大字加川山	安 (藤田長直石工藤三 三社八幡中村) 藤主 長瀬善海寺西前 同所御前寺通達ノ名 1名
天保11(1840)	馬蹄	石工長瀬善海寺西前	春日神社	豊後高田市大字加川山	安 願主 木村徳兵衛・同名民助
天保11(1840)	馬蹄	石工藤田三吉三郎	龍島宮	豊後高田市大字加川山新築	村長 藤主 藤田長直石工藤三 三社八幡中村 藤主 藤田長直石工藤三 三社八幡中村 藤主 藤田長直石工藤三 三社八幡中村 藤主 藤田長直石工藤三 三社八幡中村 藤主 藤田長直石工藤三 三社八幡中村
弘化3(1846)	馬蹄	石工河野道雄	山神寺	人田村大字永松津奈	安 辻屋 弘忠助
弘永3(1850)	仁王佛	石工 河野道雄	大蔵神社	豊後高田市大字高直中ノ原	福 寺寄進 徳野長三郎吉備 ほか3名
安政4(1857)	馬蹄	石工山村高直	金屋羅宮	豊後高田市大字高直中ノ木	
安政3(1858)	馬蹄	石工鶴崎徳四郎	桂神社	豊後高田市大字藤田上原	
安政6(1859)	馬蹄	石工大内大野重三郎	六所権現	豊後高田市大字藤崎若殿	
安政7(1860)	馬蹄	藤田三吉三郎	山神宮	豊後高田市大字草地松	安 願主 近藤佐平ほか3名
安政7(1860)	馬蹄	石工山中藤三郎	山神宮	豊後高田市大字草地山	安 願主 將永伊勢ほか4名
万延1(1860)	大日如来像	石工藤田三吉三郎	岩屋宮	大田村大字下番	安 (大日如来像を彫る) 藤主 藤田長直石工藤三 三社八幡中村
万延1(1860)	馬蹄	牛(同上カ)		大田村大字下番	安 (上記大日如来像と1対のもの)
文久2(1862)	馬蹄	石工大内大野重三郎	若宮八幡	豊後高田市大字田原	安 藤主 藤田長直石工藤三 三社八幡中村
文久3(1863)	仁王佛	藤田三吉三郎	山神寺	豊後高田市大字平野野見	安 (柳野現形寺通達に記述あり)
文久3(1863)	石佛	石工石倉善平 十郎半	龍王寺	豊後高田市大字並石	安 奉寄進松三郎 次力小田中村
慶応5(1865)	馬蹄	石工大野重三郎	志美須宮	豊後高田市磯町	
慶応4(1868)	馬蹄	熊川藤三右衛門	月読寺	豊後高田市大字田原	花 藤主 藤田長直石工藤三 三社八幡中村
明治1(1868)	佛	石工河村鏡政勇助	都甲八幡社	豊後高田市大字松行築地	安 佛田原中野吉左衛門
明治9(1876)	石佛	石工藤田三吉三郎	田原若志寺	大田村大字赤松中村	福 藤主 藤田長直石工藤三 三社八幡中村
明治11(1879)	馬蹄	石工藤村 有松新三郎	田原若志寺	大田村大字赤松中村	
明治16(1883)	馬蹄	石工伊藤三吉三郎	船岡社	豊後高田市新町	
明治28(1895)	馬蹄	石工藤田三吉三郎		豊後高田市柳ノ木	
明治29(1896)	馬蹄	石工永松大太郎	山神寺	豊後高田市鹿ノ道	安 石及石工等並永松綱半
明治29(1896)	手水鉢	石工庄武安太郎	眞鏡神社	大田村大字下番	藤主 藤田長直石工藤三 三社八幡中村
明治42(1909)	鉦大石	長瀬善海寺西前	眞鏡神社	豊後高田市大字草地松	石 藤主 近藤次夫 財前可伸
大正1(1915)	馬蹄	藤田長直石工藤三 三社八幡中村	比佐神社	大田村大字小野	安 藤主 藤田長直石工藤三 三社八幡中村
大正9(1920)	馬蹄	藤田長直石工藤三 三社八幡中村	眞鏡神社	大田村大字下番多中園	安 藤主 藤田長直石工藤三 三社八幡中村
大正10(1921)	馬蹄	石工藤田三吉三郎	成神寺	大田村大字南泉永市場	花 寄馬 藤主 藤田長直石工藤三 三社八幡中村
大正10(1921)	馬蹄	石工藤田三吉三郎	若宮八幡社	豊後高田市藤五	
大正13(1924)	馬蹄	石工藤田三吉三郎	眞鏡神社	豊後高田市大字藤田口	福 藤主 藤田長直石工藤三 三社八幡中村
昭和2(1927)	馬蹄	藤田長直石工藤三 三社八幡中村	龍神寺	豊後高田市西町	安 高橋村六建立
昭和3(1928)	馬蹄	石工藤田三吉三郎	山神寺	大田村大字永松津奈	
昭和3(1928)	鉦大石	藤田長直石工藤三 三社八幡中村	眞鏡神社	豊後高田市大字野野見	道 藤主 藤田長直石工藤三 三社八幡中村
年記銘なし	銘法大佛	藤田長直石工藤三 三社八幡中村	水福寺跡	大田村大字赤松	福 藤主 藤田長直石工藤三 三社八幡中村
昭和4(1929)	馬蹄	石工藤田三吉三郎	眞鏡神社	大田村大字赤松	安
昭和9(1934)	鉦大石	藤田長直石工藤三 三社八幡中村	都甲八幡社	豊後高田市大字松行築地	花
昭和10(1935)	馬蹄	藤田長直石工藤三 三社八幡中村	若宮八幡社	豊後高田市藤五	
昭和10(1935)	仁王佛	石工藤田三吉三郎	白鳥神社	豊後高田市小田原寺町	福
昭和10(1935)	馬蹄	石工藤田三吉三郎	桂神社	豊後高田市藤五山	

別表2 近世石工年代表（豊後高田市・大田村所在のもの）

出身地	石工銘	1700	1750	1800	1850	1900
照野村	松本吉左衛門		寛政14年(1802)			
照野村	松本曾右衛門		天明2年(1812)			
照野村	松本儀平次		天明7年(1817)			
照野村	松本伊曾七		天明10年(1820)			
照野村	後藤显藏		天明10年(1820)			
照野村	後藤光久		天明10年(1820)			
大力村	粟海信四郎		天明10年(1820)			
中村	大野寿右衛門		天明10年(1820)			
中村	財前権九郎		天明10年(1820)			
真木村	金高佐平		天明10年(1820)			
真木村	西野作兵衛		天明10年(1820)			
上野村	安藤蔵七郎		天明10年(1820)			
上野村	渡辺太四郎		天明10年(1820)			
間戸村	河野権造		天明10年(1820)			
間戸村	河野吉之十		天明10年(1820)			
夷村	板井甚藏		天明10年(1820)			
夷村	猪股勇助		天明10年(1820)			
城前村	土谷孫太郎		天明10年(1820)			
城前村	土谷善三郎		天明10年(1820)			
城前村	土谷寿平		天明10年(1820)			
城前村	土谷伊平		天明10年(1820)			
常盤村	助成松左衛門		天明10年(1820)			
譜田村	万吉		天明10年(1820)			
俣見村	小矢八百平		天明10年(1820)			
俣見村	小矢信右衛門		天明10年(1820)			
肥前国	馬場忠右衛門		天明10年(1820)			
防州末波	弥左衛門		天明10年(1820)			
出身不明	惣三郎		天明10年(1820)			
出身不明	惣十郎		天明10年(1820)			
出身不明	柏木忠右衛門		天明10年(1820)			
出身不明	宇佐庄助		天明10年(1820)			
出身不明	作右衛門		天明10年(1820)			
出身不明	仁右衛門		天明10年(1820)			
出身不明	富夫		天明10年(1820)			
出身不明	華八・文作		天明10年(1820)			
出身不明	宗助・生斗		天明10年(1820)			
出身不明	山口麿三郎		天明10年(1820)			

### 第3節 法橋位をもつ石工

はじめに

石工の系譜を作成することは、石造品の作者や、彼等の生活・活動範囲などを、少ない資料で把握するのが目的である。そのためには、石工の名を刻んである作品調査が中心になる。それにより各石工の作風を確認し、無銘の石造品の作者も推定できる。また作品の分布状況から、石工の活動範囲も知ることができる。もちろん作品調査以外に、裏付けとなる文書調査も必要であるが、今回は法橋補任状や、関係寺院の過去帳が見られた程度である。聞き取り調査も、江戸時代からの石工の系譜を引く人はわずかに1名で、不十分な点が多かった。結局作品調査を中心とせざるをえなかった。

本稿では、江戸時代に輩出した石工のうち、法橋位をもつ石工を特に記すことにする。彼等を調査の対象としたのは次の理由が主なものである。

- (1) 比叡山から法橋位を付与されたことが、補任状からはっきり把握できる。
- (2) 親子・師弟関係が、系図などからある程度たどることができる。
- (3) 作品が多く残っている。

などである。ただし(1)の場合、技術の優劣性が認められて法橋位を認可されたのか、単なる申請によったものであるかは分からない。一つ考えられることは、坂井系師・石工および土谷定勝は、それぞれ天台宗の古刹奥山霊仙寺、大岩屋山応遷寺の檀家であるから、比叡山とつながりがあったのであろう。なお土谷定勝・安藤善平については、上京して修業を積んだという伝承があるが、詳細は不明である。

補任状および作品の銘文から、法橋位を有する、あるいは法橋位を名のる石工をあげると、次の13名を数えることができる。

- 坂井甚藏門俊（文化5年(1808)、補任状）
- 坂井貞馬国光（年不詳、国見野田平等寺の三十三観音像）
- 坂井貞四郎国光（文政8年(1825)、補任状）



写真20 法橋補任状（土谷定勝）土谷運美氏蔵

- 坂井利三郎国良（弘化2年(1845)、香々地野蓮恩寺舎殿供養塔）
- 坂井泰助国安（安政4年(1857)、補任状）
- 坂井徳四郎国政（安政4年(1857)、香々地町六所神社石燈籠）
- 坂井林三郎国政（安政5年(1858)、香々地町前田薬師社石燈籠）
- 坂井善藏（明治29年(1896)、補任状）
- 坂井国造国正（大正10年(1921)、補任状）
- 坂井益二郎（昭和4年(1929)、香々地町夷中山前職堂山口熊行大塚家）
- 土谷善三郎定勝（天保14年(1843)、補任状）
- 安藤源平国恒（安政2年(1855)、補任状）
- 祐成松右衛門国光（文久3年(1863)、真玉町弥勒寺三社権現鳥居）

以上のうち、祐成松右衛門国光については、土谷定勝のところに関連して述べるので、ここでは坂井一統をまとめた坂井系師師・石工、土谷善三郎定勝、安藤源平国恒について、系譜・活躍時期・作品などを見ていくこととする。

#### 1 坂井系師師・石工

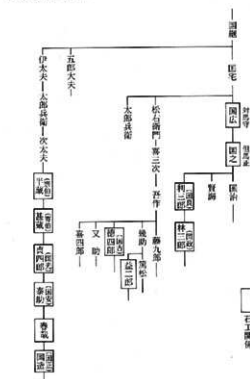
西国東郡香々地町夷地区の板井家は、文和5年(1356)ころ、夷に來住した成貞を祖とするという<sup>1)</sup>。その後本家はまた々神祇を継ぎ、その分かれに法橋位を有する石工達がいる。坂井家系図の中か





写真21 千手観音仏龕 (板井半蔵作)  
真玉町 多宝院

板井家系図より



ら関係部分を抄出してみよう。なおこの系図に見られないが、作品に板井宮内国貞の名が出ている(例西狩場五柱神仁王像、下佐古琴平宮高馬路など)en。作品に名が出てくるのは、現在のところ、寛延3年(1750)の山香町西明寺二十八部衆修理銘に、「誦迦恵比須村 佛師半蔵」とあるのが最初であるen。半蔵は、木彫仏を主に手がける仏師であったらしく、西明寺以外には、香々地町夷夷神社殿に、「彫物師板井半蔵」の名が見える。石造関係は、現在のところ1点だけで、宝暦9年(1759)の千手観音仏龕(真玉町有多宝院)に、「佛師夷邑板井半蔵」とある。丁寧な彫りで、童顔の尊像には木彫仏を手がけた手法がうかがえる。

肩書に石工として出てくるのは、天明4年(1784)銘の香々地町夷夷横岳の観音堂手洗鉢に、「石工 板井國廣」とあるのが最初である。この板井國廣が、本家筋の國広(係図では享和元年(1801)卒とある)と、同一人物かどうか不明であるが、年代的には合致するの同一人物とみてよかろう。なお香々地町夷夷通観音堂の木造聖観音立像の底板に、「天明三卯年 佛師板井对馬守 奉彫色観世音菩薩 大施主矢野仁三郎 十二月吉日 氏子中」の墨書銘がある。この对馬守は、板井國広のことであるという。また制作年不詳であるが、国東大恩寺文殊仙寺の奥院にある、常夜燈(燈籠約六の一燈)に、「夷村 板井國廣」の名を見ることができる。18世紀末から19世紀初めにかけての作であろう。

半蔵の子基藏(寄伯・國俊)は、寛延元年(1748)に生まれ、法橋補任状を持つ最初の人物で、木彫仏や石燈籠・石造仁王像が残っている。木彫仏は、寛政7年(1795)銘の今井薬師堂(香々地町長小野)の十二神佛像、寛政9年(1797)銘の不動明王像(香々地町夷夷通観音堂)などがある。今井薬師堂の仏像が、昭和37年に山火事で焼失したのは惜しいことである。石造品の方は、現豊後高田市田染から同長岩屋・真玉町・香々地町に分布し、活動範囲の広さがうかがえる(年表参照)。中でも田染石工の本拠地である豊後高田市権崎の延寿寺に、彼の石燈籠があるとすることは、その技量のほどを認められたということであろうか。彼の墓石は、香々地町夷夷畑の板井家墓地にあるが、無縁塔形式の



写真22 木造聖観音立像 (板井对馬守作)  
香々地町道園観音堂



写真24 木造不動明王立像 (板井基藏作)  
香々地町道園観音堂



写真23 同上 底板墨書銘

墓(国光の作)で、裏面に「道園に、暗郭公々々々 月船堂 寄伯」と、評世の句らしいものが刻まれている。「寄伯」は石造仁王像に「法橋寄伯」とあるが、併号であったかとも思われる。

基藏の子貞四郎国光は、天明7年(1787)に生まれ、技量的にもすぐれ、石造仁王像のほか、鬼



写真25 同上 底板墨書銘

面・神楽面・木彫仏、あるいは粟田彦彦の絵を描くなど、幅広い活躍をしている。しかしどちらかといえば、木彫が中心で、石造品は香々地町聖光八幡社の仁王像、同前田の仁王像などがあるにすぎない。その仁王像も木彫を中心に手がけたせい



写真26 石燈籠 (板井基蔵作) 豊後高田市延寿寺



写真27 板井基蔵墓石 香々地町夷



写真28 石造仁王像 (板井国光作)  
香々地町聖寺八幡社



写真29 板井国光墓石 香々地町夷



写真30 春哉翁像 香々地町夷

柔らかい。それにもかかわらず、内に秘めた内強さを感じられるのは、やはりそのすぐれた力量のせいであろう。嘉永4年(1851)7月19日に没している。基蔵の墓石と並ぶ墓標は、随所に木造建築の手法を取り入れた、石調型(その子國光の作)である。

貞四郎国光あるいはその父基蔵俊と同時代(文化、文政頃か)に活躍したと思われる石工に國之がいる。後でのべる利三郎国良の父であるが、現在のところ、作品は一点だけしか確認していない。

貞四郎の子泰助西安は、安政4年(1857)に法橋位を付与されているが、明治9年(1876)鈍の、門東町文殊仙寺役者像など作例は少ない。明治24年12月21日没。明治期に制作活動を行なった春哉は、漢方医も兼ねたといひ、旧暦前には弟子達で作った石造の春哉像が立っている。左手に鞭をかかえた姿は、漢方医としての春哉翁であろうか。台石に次の文と門人56名の名を刻んでいる。

法橋板井春哉、以天保十五年六月庚村生、為人謹直、精醫道能工業及、諸劉到門人等相願、大正七年十月建此



写真31 木造観音坐像 香々地町横岳観音堂



写真32 同上 像底墨書銘

門人は、香々地町内の人物がほとんどであるが、中に現国見町の石工久保田鶴松の名が見える。彼は安政6年(1854)に生まれ、伊美の慈雲寺聖観音像、岐阜除蔵寺仁王像、伊美別宮社今熊社のさいの神(磐礫石)などの作者である<sup>91)</sup>。

以上板井系仏師・石工について簡単に述べたが、



写真33 本道大日如来坐像(百楽右衛門太夫作)  
院内町西光寺旧像

初期の半蔵・基蔵・貞四郎等は、石造品に比らべ木造品の方を多く手がけ、「彫物師」「佛師」の名を使用している。このことから板井系石工は、最初は木彫を主とした佛師で、石を素材とした作品は、余技的なものであったとも推定される。それが次第に石造品中心へとなっていくのである。

なお夷地区には、板井系石工以外にも、石工の名を記した石造品が分布している。しかしここでは、法橋位を有する石工ということに限った。

次に、夷地区に仏師・石工の集団があった背景は、どういものが考えられるであろうか。

まず当地は、六郷山寺院の古刹天台宗の夷山靈仙寺があり、平安時代末頃から六郷洞山文化の栄えた所であったこと、その遺産として、この付近の山中に多く分布する岩窟には、藤原時代末・鎌倉初期の木彫仏が、江戸時代まで安置されていたこと、あるいは地元に狩場石と呼ばれる石材を産することなどがあげられる。しかし、宗教的な環境のもと、また古い仏像を目にする機会が多かったことから、仏師が生まれたというは、あまりにも短絡的である。もしそうであれば、藤原



写真34 猿田彦像(板井門光筆)香々地町夷

時代末・鎌倉初期に続く鎌倉・南北朝・室町の各時代に、仏師が存在してもいいはずである。現在のところ、この地区で中世の仏像は横濱観音堂に、文庫3年(1503)銘の木造観音坐像が1軀あるだけである。

そこで、江戸時代の板井系仏師・石工誕生の背景を、さらに別の面から見ていかなければならない。現段階では推測の域を出ないが、宇佐宮神官百楽右衛門太夫(和五郎)道章という仏師が、板井系仏師誕生に大きな影響を及ぼしたのではないかと、と思われるのである。

まず、現在まで判明している百楽右衛門太夫と、その子と思われる百楽右衛門左時右の、墨書銘のある木彫仏をあげてみる(次ページ表)。他に宇佐郡院内町野地観音菩薩像に、「宇佐宮住 百楽和五郎□□」とあるが、年代不詳なので除く。

これから見ると、佛師百楽氏は18世紀前半に、宇佐郡・速見郡・国東半島と広範囲で、活躍していたことがわかる。また板井系仏師の本拠地である夷地区、あるいは板井半蔵の修理銘路の二十八部衆のある山香町西明寺、同じく板井国光の修理銘



写真35 猿田彦大神座箱墨書 香々地町夷

の十二神将像のある真玉町無動寺などに、仏師百楽氏の作品が残っているということもわかる。

また次のことから、百楽氏と板井氏との関係が推測できないだろうか。香々地町夷道園地区で行なわれている庚申講の、猿田彦像の掛軸を入れた木箱に、次のような墨書がある。

(東) 猿田彦大神座箱墨書

(西) 宝曆二年壬申 尊像講申候

宝曆二年より文化十五年迄六十六年  
成、文化<sup>15</sup>元七月より文政元年卜成、文政  
元七月<sup>15</sup>尊像書換為板井国光筆、同<sup>17</sup>  
年六月ヨリ神道待二任ル 大正九年十

百楽氏関係作品一覧

年号	西暦	事項	所在地	関係墨書銘
正徳4	1714	釈迦如来修理銘	国見町平等寺	墨書宇佐宮住・細工百楽和五郎道章
享保2	17	人物像	山香町西明寺	住職堀工人・宇佐宮道園の百楽右衛門太夫遺草
#	#	大日如来像	院内町旧西光寺	宇佐宮百楽右衛門太夫作
13	28	聖観音修理銘	真玉町無動寺	組工者宇佐宮神官・百楽右衛門左時右
#	#	阿彌如来修理銘	安岐町輝瑞光寺	宇佐宮神官・百楽右衛門左時右作
15	30	地藏菩薩像	真玉町吃磨寺	宇佐神官・作者百楽要人渠田時右
21	36	神像	香々地町永四郎社	作者・宇佐宮神官百楽右衛門左重田時右作

(年代の判明する作品のみ)



写真36 猿田彦像 香々地町夷

月廿四日此箱二付書換

すなわち、道園地区では、文政10年(1827)、庚申待ちを仏教系から神道系に改めたいということである。現在でも神官が主宰する。この講中では、宝曆3年(1753)銘の猿田彦像を彫った庚申塔を祀っているが、その棟に享保14年(1739)銘の、背面金剛を彫った塔が横たわっている。この猿田彦像の造立年が宝曆3年ということは、板井系仏師・石工(年代から見て半蔵か)が、「宇佐宮神宮」百楽氏の影響で、神道系の猿田彦像を彫ったのではなからうか。庚申待ちの方も、このころから次第に神道系がとなり、文政10年にはっきりと神道待ち



写真37 石造地蔵像（板井系三郎作）香々地町聖仙寺になったのであろう。その時点で、仏教系の背面金剛塔が無視されるにいたった、と考えてもよさそうである。

前にも述べたように、百薬氏と板井系仏師・石工との関係を裏付ける史料はなく、あくまでも憶測ではあるが、以上のようなことや、板井家本家が代々神職を継いでいたことからみて、両者は非常に密接な関係(師弟関係?)があった、とするのは早計であろうか。ともあれ、江戸時代後半、夷地区に板井系石工・仏師の出現する下地は、十分にあったといえそうである。

板井系仏師・石工の中には、建築関係の仕事をしたり、大工の棟梁として活躍している者もある。いずれも法橋位を有する、利三郎圓良・林三郎圓政・徳四郎圓吉などである。この3名は、安政7年(1860)銘の聖仙寺石造地蔵像の作者でもある。

利三郎圓良は大工の棟梁と伝えられ、林三郎圓政の名は、元治元年(1864)の夷六所神社棟札などに、大工として名が出てくる。徳四郎圓吉については、夷六所神社改築に関する「改築費途計算書(明治十五年十月十五日)」に、「一金拾円 石工板井徳四郎

渡 但神殿地盤請負金額」とある。神殿の土台を担当したのであろう。

明治以降、板井系仏師・石工の名は、しだいに少なくなるが、仏像や石造品の需要が減少する一方、建築関係の仕事を主にこなうようになったのかも知れない。

- 注1)板井家系図(『香々地町誌』昭和54年刊所収)  
 ②ただし、系図に、「幾内文政八年永四郎社棟札とある人物が、宜内国直ではないかともいわれている。  
 ③『山背郷土史』志手編 大正6年刊  
 ④関係作品9例中 本彫関係が6例  
 ⑤『国見町沿革史』清和源光 昭和43年刊  
 ⑥例えば、香々地町夷前田家庭社の、石祠(寛政11年(1799)銘)に出てくる彫製勇助など、彼の作品は、豊後高田市から国見町千穂にかけて分布している。  
 ⑦現在、香々地町夷町六所神社に保管  
 ⑧板井益光氏保管資料

表3 板井系仏師・石工関係年表

(S57.10現在)

年号	西暦	事項	所在地	仏師石工名等	
寛延	1748	甚蔵生る		甚蔵	
寛延	3	二八彫衆修理院	山香町内河野西明寺	浦辺忠比須村 仏師 伴蔵 (1)	
宝曆	2	社殿墨書	香々地町夷真神社	彫物師 板井半蔵 (2)	
宝曆	9	千手観音仏像	真玉町有寺多宝院	仏師 夷色 板井半蔵	
明和	元	64	半蔵没	半蔵	
天明	3	83	木造觀音菩薩像	香々地町道園觀音堂	仏師 板井対馬守
天明	4	84	手洗鉢	香々地町横岳觀音堂	石工 板井國次 圓吉 舎人
天明	7	87	貞四郎生る	貞四郎	
寛政	7	95	木造十二神符像	香々地町長小野井宗築院	仏師 板井甚蔵 (3)
寛政	8	96	利三郎生る	利三郎	
寛政	9	97	木造不動明王像	香々地町道園觀音堂	仏師 板井甚蔵
享和	元	1801	園広没	園広	
享和	2	02	石燈籠	豊後高田市御崎延壽寺	石工 板井甚蔵因俊
享和	3	03	仁王像	真玉町上黒土身籠神社	夷村石工 板井甚蔵
文化	元	04	〃	豊後高田市新城地蔵堂	石工夷村 板井甚蔵
文化	5	08	法橋補任状	香々地町板井政吉氏墓	補任 比叡山 僧師職之法橋國俊 右以勅宣之旨令補与之也 宣被承知着執書如件 文化五年八月 山門西塔執行代本住持法印大僧都 大和尚住徳麟 豊後國夷色板井甚蔵因俊
文化	9	12	石塔台座	豊後高田市長岩照天念寺	仏師 夷村 法橋寄伯
文化	10	13	仁王像	豊後高田市今井山神社	仏師 夷村 法橋寄伯
文化	11	14	木造十王像	豊後高田市並石十王堂	夷色 板井圓光作
〃	〃	〃	鬼会面	真玉町城前弥勒寺	夷色 板井圓光作
〃	〃	〃	「過去帳」	香々地町夷聖仙寺	文化十一年戊辰四月廿一日 法橋寄伯信受大徳 ヲハタ 貞四郎父 不法橋寄伯信受大徳 文化十一年戊辰四月二十一日 道僧に傳郭公々々 月船堂 寄伯 行年六十七才
〃	〃	〃	墓石	板井家墓地	
〃	〃	〃	徳四郎生る		徳四郎 (4)
文政	元	18	猿田彦像圓	香々地町道園地区	板井圓光筆
文政	2	19	仁王像	香々地町五柱神社	石工 板井齊内
文政	8	25	法橋補任状	香々地町板井政吉氏墓	比叡山職位之事 園光 宣被法橋位 右以勅宣之旨令補与之也 宣被承知着執書如件 文政八年十月 日 執行探題正觀院前大僧正慈映
文政	12	29	林三郎生る		林三郎 (5)
天保	2	31	鬼会面	真玉町城前弥勒寺	夷色 法橋圓光作

年号	西暦	事項	所在地	仏師石工名等
天保2	1831	鬼会面	安坂町岡子岡子寺	法橋國光
天保6	35	石 祠	香々地町前田兼盛社	石工大井路 板井宮内國貞
天保7	36	鳥 居	香々地町下佐古金伏琴平高	石工 栗村 板井宮内國貞
天保7	36	回國供養塔	国見町千灯坂行若堂	石工 或村 板井利三良因良
天保10	39	仁王像	香々地町聚来八幡社	像者 栗村 法橋國光作
天保15	44	十二神将修理銘	真玉町黒土黒動寺	夷 法橋國光
弘化2	45	香敬生る		春敬
弘化2	45	齋敬供養塔	香々地町佐古福慧寺	石工 羽根村 野上栄蔵直正 夷村 法橋板井國良 佐古村 □□永光 全 市丸九平
弘化3	46	仁王像	香々地町英城成山神社	石工 法橋國良
嘉永4	51	「過去帳」 墓 石	香々地町夷雲仙寺 板井家墓地	嘉永四辛亥天七月十九日 法橋法徳真意禪定門 尾相貞因四郎 法橋法徳真意禪定門 嘉永四辛亥天七月十九日 板井貞四因光行年六十五才
嘉永6	53	鬼会面	香々地町夷雲仙寺	仏師 板井徳四良因吉
嘉永7	54	仁王像	香々地町夷雲仙寺	石工 板井法橋國良 石工 板井林三郎國政
安政2	55	一字一石塔	香々地町夷前田	石工 法橋板井國良
安政4	57	法橋補任状	香々地町板井政吉氏蔵	補任 比叡山延壽寺 僧職職之事 根本如法堂 法子 国安 宣叙 法橋位 右以勅宣之旨令種与起也 宣叙承知者納啓如件 安政四年十月五日日代 首府殿別当探題前大僧正眞嗣
安政5	58	石灯笼	香々地町夷六所神社	石工 法橋板井国吉
安政6	59	木造持廻り庚申	香々地町夷六所神社	石工 法橋 板井国吉
安政7	60	地藏像	香々地町夷雲仙寺	仏師 板井徳四郎 板井林三郎
万延元			香々地町長小野大力量墓地	夷色 法橋國安
万延2	61	「過去帳」	香々地町夷雲仙寺	万延二辛酉如月四日 法橋情彩良永禪定門利三郎事
元治元	64	様 札	香々地町夷六所神社	小工 板井利三郎
明治2	69	神樂面	香々地町夷道園地区	板井国義作
明治7	74	益二彫生る		益二郎
明治9	76	役者生像	国東町大恩寺文殊仙寺	夷村石工 仏師 法橋國安 同 板井國義
明治13	80	六所神社遊樂 神楽の神懸合	香々地町板井益光氏保管資料	石工 板井徳四郎
明治15	82	釋教再建札	豊後高田市長岩屋天念寺	創・川棟梁 板井林三郎國政

年号	西暦	事項	所在地	仏師石工名等
明治19	1886	宝篋印塔	国見町西方寺清浄光寺	石工 三重亀松 夷 法橋板井林三良 内村 北清清九良 夷 井ノ口佐八 同 長野亀太郎
明治20	87	地藏像	国見町西方寺清浄光寺	石工 夷 法橋 板井林三良 板井千別 井ノ口三良 岡部六人良 ミメ 竹田津六之助 西ホジ 北崎清九良 イノ上 井上勘十良 永ノ亀松 ミメ 井本源九郎 板井朝太良 中野晋松
明治21	88	国造生る		国造
明治22	89	「過去帳」	香々地町夷雲仙寺	明治廿二己丑二月十九日 佛秀国吉居士 板井徳四郎夷
明治24	91	林三郎没	香々地町夷雲仙寺	明治廿四年十月廿六日 觀瀆内抄禪定門板井林三郎事 明治貳拾四年辛卯二月廿一日 法橋聖国安法子板井春敬父
明治29	96	法橋補任状	香々地町板井政吉氏蔵	豊後国西国東郡三重村板井春敬 授法橋位 明治廿九年六月三日 天台宗 総本山延壽寺
明治36	1903	二十三観音像	香々地町聖宝泉寺	三重村字夷 仏師法橋板井春敬 信吉 米田 勝馬
明治43	10	任職の墓	香々地町見目光岡寺	石工 板井春敬
大正7	18	春敬翁像	香々地町夷板井家前	井口三郎以下門弟名56名あり
大正10	21	法橋補任状	香々地町板井政吉氏蔵	板井国正 補法橋 大正十年二月二十六日 天台宗主 大僧正 吉田源政
昭和4	29	能行大菩薩像	香々地町夷中山仙峯入口	石工 法橋板井益二郎 板井関平 板井国造
昭和5	30	不動明王	香々地町坂口不動堂	製作板井益二郎
昭和25	50	益二郎没		益二郎 (76才)
昭和53	78	国造没		国造 (91才)
(不 明)		常夜燈(燈籠狛犬)	国東町大恩寺文殊仙寺	夷色 板井國広
		木造豊田彦大神面	香々地町夷六所神社	豊後国東郡夷村 板井甚政作 (6)
		神楽面(9面)	真玉町有寺地区	夷村 板井國光作
		仁王像	香々地町前田	法橋國光
		三十三観音像	国見町野田平等寺	仏師法橋夷村板井但馬国之作
		木造十一面観音	香々地町夷雲仙寺	仏師法橋板井利三郎國良作 板井林三郎國政
		木造持廻り庚申	香々地町夷小野道	仏師法橋國安
		鬼会面(4項)	豊後高田市加礼川長安寺	法橋 板井春敬

- 「山香郷土史」所収
- 「六所鎮山開元文化財総合調査要覧-豊後高田町・真玉町・香々地町の部一」所収
- 「三重鎮土史」所収、仏像は昭和37年の山火事で焼失。
- 板井利太郎氏の調査による。
- (4)に同じ。
- 「神社財産目録(板井益光氏保管)に「村社六所神社(西二年九月二日三夜録)木面1 木造須田彦大神面豊後国東郡夷村板井甚政作津茂氏寄附」とある。面は現存しないとのこと。

## 2 土谷善三郎定勝

現西国東郡真玉町城前の地で、江戸時代後半を中心に活躍した石工である。彼の一族には同じく石工を営んでいた者もいる。略系図を書くとき次のようになる。土谷孫太良は、豊後高田市大字草地の安永3年(1774)銘の石塔に、「城前石工 土谷孫太郎」、あるいは真玉町湯原温泉前の寛政8年(1796)銘の石燈籠に、「石工土谷孫太良」とある人物で、貞吉・善三郎の父親と考えられる。考えられるとしたのは、応慶寺過去帳に出てくる「文政甲子白翁常玄信士大御方貞吉父」という人物の位牌が、貞吉信房の末裔である。土谷政知氏宅(真玉町城前秋葉)にあるからである。ただし過去帳に、「文政乙未日録山浄覚信士七月廿日貞吉父」とある、孫太郎本人の位牌は残っていない。なお真玉町城前清台寺の「奉拜願南無観世音菩薩」とある、安永3年(1774)銘の石塔に「石工 土谷善平」とあるが、この人物と孫太郎の関係は定かではない。あるいは過去帳に見える、「孫太郎父」かもしれないが、この作品1点だけからは何も判定できない。



写真38 石燈籠(土谷孫太良作) 真玉町湯原  
貞吉信房は、善三郎定勝の兄で、真玉町城前大  
清社鳥居(寛政4年(1792)石工 土谷貞吉)や、真玉  
町城前寄せ四国(文政3年(1820)石工 土谷貞吉)、  
などに名が見られる。天保14年正月20日没。

宇之吉は当主蓮美氏の父であるが、蓮美氏の幼時に49才で死んだため、蓮美氏は石工としての手ほどきは、他から受けることとなる(後述)。

さて善三郎定勝であるが、明治12年(1879)に91才で没したともいわれているが、詳細は不明である。ただし、わずかな資料や彼の制作時期から推測すると、91才より10才ほど若くして、死んだのではないとも考えられるので、そのことから述べていくこととする。

彼の年齢を推定する資料はほとんどないが、明治9年(1876)1月付の、「国民軍成丁簿」第一大区七小区」がヒントを与えてくれる。

この資料は、徴兵令に関連して作成された、管内(現真玉町の西真玉・中真玉・上真玉地区)の成人男子の名簿で、天保7年(1836)から安政6年(1859)までの間に、生まれた者の名が生年月日とともに記されている。この中の城前村の項に、「土谷善三郎

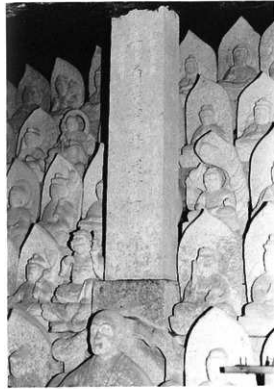


写真39 寄せ四国石仏(土谷善三郎作) 真玉町城前  
土谷嘉六 弘化二年五月十六日生、「土谷善三郎  
土谷長八 弘化四年正月廿九日生」と出てくる。  
嘉六が33歳、長八が31歳である。このように、孫  
の年齢が33歳ということは、当時善三郎はいくら  
少く見ても、70歳は越えていると見てさしつか  
えあるまい。

次に現存する作品の紀年銘から、その制作年代を見ると、表のようになり、最も多くの作品を残したのは1840年代であることがわかる。伝承どおり91歳で死んだとなれば、作品を最も多く作った時期は、50歳を過ぎた時期ということになる。

年 代	数
1810年代	1
1820年代	2
30 〃	1
40 〃	9
50 〃	3
60 〃	3
70 〃	0

現在でこそ30歳代といっても、仕事は十分にできても、仕事ではあるが、当時としては少年を取りすぎているような感がする。

それでは彼は、何歳ころから石工の仕事をはじめたのであろうか。はつきりしたことは不明である



写真40 土谷善三郎定勝墓石 真玉町城前  
が、後述の安藤源平国恒の弟子鷺海藤八の例を参考までにあげておく。先述の「国民軍成丁簿」によると、藤八は天保9年(1838)8月23日生まれとされている。彼が安藤源平と並んで、初めて石造品に名を刻むのは、安政4年(1857)の真玉町下黒土呂真徳庵仏の石匠である。数え年20歳の時である。

これから見て、善三郎も10代の後半には、石工の仕事をしていただのはなかろうか。現存の作品のうち、最古のものは文政2年(1819)銘の、真玉町大岩岸八所神社の鳥居である。この時期が、鷺海藤八同様20歳前後とするならば、作品を多く残した時期は40歳代で、没年は80歳ころということになる。伝承どおり91歳で没したとするならば、寛政元年(1789)ころ生まれたことになるが、以上の資料や制作年代から推測して、生年は1800年代初頭、没年は80歳ころと考えるのが妥当ではなかろうか。いずれにせよ、長寿であったことにはまちがいないまい。

彼は孫太良、あるいは貞吉に石工の手ほどきを受けたと思われるが、隣村夷地区の板井貞四郎国

### 土谷家略系図



光に師事したといわれている。そのことは、技術を修得したことを認められる、次の史料(土谷運美氏蔵)からも推測できる。

天保六年  
 4朔月吉日  
 夷村  
 法橋国光傳  
 城野前  
 上谷善三郎

当地で、この時代を代表する石工といえ、やはり法橋板井国光ということであろう。

前述の寄せ四国の石材、あるいは真玉町大岩屋応賢寺の、地震像(元治元年(1864)安藤源平国作)の石材は、共に東地区の持場石を使用している。また善三郎のいた現上真玉地区には、板井国光をはじめとする、板井系佛師・石工の作品が残っていることなどから見ると、この地区と隣接の真地区との交流は盛んであったらしい。

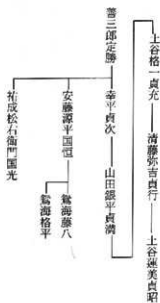
このあと善三郎は、天保14年(1843)に法橋位の補任状を受けている。こうして石工としてその技量が認められた彼のもとには、多くの弟子達が集まってくる。くわしい人数は不明であるが、墓石には「法橋定勝墓 門第二十三人」とある。

これらの弟子のうち、その相伝関係が判明する分だけを見ると次のようになる。

善三郎定勝の作品が多く残っているのに対して、安藤源平を除き弟子達の作品は少ない。幸平貞次は、真玉町常盤安養寺の文久4年(1864)銘の地震像に、「石工 城前邑 幸平」とある。山田銀平貞満については、現在のところ作品は確認できていない。ただし、城前の清台寺前の人家敷にある、山田家累代之墓に刻まれている石工人名の中に、「銀平門土谷松平 山田興作」とあるので、石工として活躍していたであろうとは、十分推定できる。土谷格は、真玉町城前尾南江記念碑(明治35年(1902))や、真玉町大村天満社燈籠台人(大正4年(1915))など、各種の石造品に名が見られる。清藤弥吉の名も、真玉町下黒土身瀬神社鳥居(昭和5年(1930))などに、名が刻まれている。

安藤源平については、次項でくわしく述べるが、彼は善三郎定勝の一の弟子であったといわれている

### 善三郎師弟関係図



るが、確たる史料はない。ただ、弘化3年(1846)銘の、真玉町山畑飯半礼社下宮の大嘗夜燈に、善三郎定勝と並んで、安藤源平の名が見られるくらいである。また土谷家の当主運美氏(68歳)が、祖母から聞いた話では、毎年五節供の日に、安藤家から米一升を持参していたが、弟子は必ず親方の所に米を持参することになっていたのであろうという。このようなことから、一応ここでは、安藤源平も弟子として取り扱うこととした。

祐成松右衛門国光も作品が少なく、現在のところ、豊後高田市草地区黒松山神宮の安政7年(1860)銘の鳥居に、「常盤村 石工 助成松右ノ門」とあり、他に真玉町城前弥勒寺三社大権現の文久3年(1863)銘の鳥居に、「常盤邑 法橋 祐成松右ノ門 国光作」、真玉町常盤梓菜大明神社の元治2年(1864)銘の石燈籠に、「石工 祐成松右ノ門」とあるだけである。彼が善三郎定勝の弟子であったということは、技術習得を認められたと思われる、次の史料(土谷運美氏蔵)から推測するだけである。

明治五年  
 7月吉日



写真41 石鳥居(祐成松右衛門作) 真玉町城前  
 城前邑  
 佛師法橋  
 土谷善三貞定勝傳  
 常盤邑  
 法橋  
 祐成松左衛門国光



写真42 祐成松右衛門国清墓 真玉町常盤



写真43 五百羅漢演回会 真玉町土谷運美氏蔵



写真44 同上



写真45 石造地藏像(土谷善三郎作)真玉町来迎寺

この史料には「松左衛門」となっているが、作品の方は全て「松右エ門」であるので、両人は別人とも考えられる。しかし同形式の史料で、善三郎が法橋圓光から受けたものには、「傳」の上に印が押されているのに対し、この史料には印がない。「松右衛門」とすべきところを「松左衛門」と誤ったため、印も押さずに、そのまま土谷家に残っていたのではなかろうか。これから見ると祐成松右衛門圓光は、やはり善三郎定勝の弟子といえよう。

なお、彼の墓は真玉町常盤山ノ上墓地にあるが、正面に「法橋之墓」、裏面に「祐成松右エ門國清 善嵩長松居士」とある。「國光」を「國清」と変更した。時期や理由はわからない。

最後に、現在残っている善三郎定勝の作品について簡単に触れておく。作品の種類は、石仏・鳥居・石燈籠・石祠など多いが、中でも地藏像の例が多い。土谷家には、「土谷法橋定勝」の墨書のある「五百羅漢図巻」4冊と、「紋帳」1冊とが残っている。彼の作品に儀軌通符丹念に彫ったものが多いのは、その性格からとも思われるが、これ



写真46 石造地藏像(土谷善三郎作)真玉町真町寺

らの本を参考としたからであろうとも考えられる。また彼の作品は主に真玉町を中心に分布しているが、豊後高田市や大田村などに残っている。

豊後高田市新築城島宮の天保11年(1840)銘の鳥居、大田村下香掛岩尾洞の方基元年(1860)銘の大日如来像には、土谷定勝の名前と並んで、鶯海僧四郎の名が出てくる。大力村(豊後高田郡甲)の石工である鶯海僧四郎と、善三郎定勝との師弟関係は詳かでない。

注1)「真玉町誌」真玉町 昭和53年刊

(2)筆者蔵

(3)応慶寺の地藏像には、安藤恒臣・鶯海藤八、岡格平等の石工と並んで、「神村康洋儀平 再彫設壇平」の名が出ている。典の石工といえは、板井茶石工が代表的であるので、この同名は山から石を切り出した石工と思われる。

(4)土谷藩美氏所蔵資料、及び同氏開取りなどから作成。

(5)そのほか土谷藩美氏所蔵資料の中に、「佛彫彫刻寸尺書法之書」というものがあり、次のように記している。

これら参考していただいたのであろう。  
○佛彫彫刻寸尺書法之書  
△堂尺卷寸10巻尺二寸、青栴如堂

- 只巻尺ハ兵乱不純也
- 九寸、〇七寸ハ違差難
- 四寸、三寸、六寸ハ壽命長遠子孫繁昌也
- 三寸、〇二寸、〇五寸ハ災難不断
- 巻寸〇巻寸五歩 認難成致也
- 右佛堂陽井ノ上寺御傳也

表4 土谷善三郎定勝関係年表

(S57.10 現在)

年号	西暦	事項	所在地	仏師石工名等
安永3	1774	石塔	豊後高田市草地	城前 石工 土谷孫太郎
寛政4	92	鳥居	真玉町城前天満社	石工 土谷貞吉
寛政8	96	石燈籠	真玉町湯原温泉前	石工 土屋孫太良
文化元	1804	「過去帳」	真玉町大岩屋応慶寺	白崎善玄居士 ハギワ孫太郎父
文化6	09	「過去帳」	真玉町大岩屋応慶寺	緑山浄賢居士 ハギワ孫太郎事
文政2	19	鳥居	真玉町大岩屋六所神社	石工 土谷善三郎保行 (1)
文政3	20	石仏群	真玉町城前寄せ四国	石工 当村 土谷定吉 土谷善三郎
文政8	25	地藏像	豊後高田市長岩所天念寺	城前村 石工 土谷善三郎
天保2	31	鳥居	真玉町山畑飯牟礼社	石工 土谷善三郎
天保6	35	免許状(?)	真玉町城前土谷蓮英氏蔵	城前村 土谷善三郎
天保11	40	鳥居	豊後高田市新築城島宮	石工 城前村 土谷善三郎 大力村 鶯海僧四郎
天保15	42	地藏像	真玉町城前尾南	免願主 土谷善三良
天保14	43	「過去帳」	真玉町大岩屋応慶寺	寅原宗石居士 ハギワ貞吉事 比叡山僧願職之事 定勝 宣叙法橋上人位 石以 勸宣之旨令補美之処 也宣叙承知者執書如件 天保十四年三月十七日 山門執行探題大僧正真純
#	#	法橋補任状	真玉町城前土谷蓮英氏蔵	
#	#	玉垣	真玉町小河内山神社	石工 城前村 土谷善三郎
#	#	石祠	真玉町横泊山神社	(2)
弘化元	44	「国民軍成丁簿」	筆者蔵	9月3日 山田銀平生
弘化2	45	「上ノ」		5月16日 善三郎孫土谷嘉六生
弘化3	46	常夜燈	真玉町城前八面宮	石工 法橋 土谷貞勝 同 土谷源助
弘化3	46	常夜燈	真玉町山畑飯牟礼社	石工 城前村 土谷善三郎貞勝 常盤村 祐成源十郎 大岩村 安藤源平



年号	西暦	事項	所在地	仏師石工名等
弘化3	1846	常夜燈		当邸 高崎権右エ門 同 藤ノ為四郎 □ 渡辺 □
弘化4	47	「国民軍成丁簿」	筆者蔵	1月26日 善三郎孫 土谷長八生
〃	〃	地藏像	真玉町白野来理寺	仏師 法橋 土谷定勝
〃	〃	〃	真玉町山畑玉養寺	仏師 法橋 土谷定勝 高崎富士右衛門
嘉永5	52	〃	真玉町大村真玉寺	法橋 土谷定勝
安政2	55	〃	真玉町常盤公園内	仏師 法橋 土谷定勝
安政3	56	一字一石塔	真玉町白野来理寺	仏師 法橋 土谷定勝
万延元	60	大日如来像	大田村下春樹岩屋洞	仏師 法橋 土谷定勝 鷺高信四郎
文久4	64	地藏像	真玉町常盤安養寺	石工 城前色 幸平
元治2	65	仁王像	真玉町八平金比羅社	仏作 法橋 定勝
慶応2	66	地藏像	真玉町湯原中	仏師 法橋 土谷定勝
明治12	79	「過去帳」	真玉町大岩屋定勝寺	法橋 永石居士 ハギワ善三良友

(1) 土谷善三郎氏行とある例は、現在のところ一例だけである。善三郎定勝と同一人物と思われる。

(2) 「真玉町誌」昭和53年3月刊



写真47 常夜燈  
真玉町飯牟礼社



写真48 燈籠狛犬  
真玉町真玉八幡社



写真49 燈籠獅子  
真玉町真玉八幡社

### 3 安藤源平国恒

現西園東郡真玉町大岩屋で生まれ、その地で石工として活躍している。出生年は檀那寺である真玉町浜の浄心寺過去帳に、50歳とあるところから推定すると文政5年(1822)となる。彼がいつ石工となったかなどは、現在のところ一切不明であるが、前項にも触れたように、善三郎定勝の一の弟子であったと伝えられている。

源平の名が、石造品に初めて出てくるのは、弘化3年(1846)銘の真玉町山畑飯牟礼社下宮の常夜燈である。25歳の時の作品である。この常夜燈には、善三郎定勝と並んで名を刻んでいることから考えると、彼はこの数年間、すなわち20歳前後には、善三郎の弟子となっていたと考えてもよからう。その後真玉町を中心に多くの作品を残しているが、30代から40代前半に集中している<sup>(1)</sup>。このころが最も充実した時期だったのであろう。作品の種類は、石仏・狛犬・石燈籠など多岐にわたっているが、中でも狛犬を多く手がけているようである。また寸法の大きな石造品も多く、その技量のほどがうかがえる。

狛犬を多く手がけているとしたが、逆形の狛犬

以外に、彼は頭に火袋を載せた、独特の形のものを作り出している(以下この種の狛犬を燈籠狛犬と呼ぶ)。現在のところ、嘉永5年(1852)銘の応福寺のもの、文久2年(1862)銘の真玉八幡宮のもの2対だけである。数が少ないのは、このような変わった様式が、なかなか受け入れられなかったとも考えられる。当時の人々にしてみれば、このような風変わりな、いいかえればぶざけた狛犬ではなく、オーソドックスなものを望んでいたのであろう。しかしこの様式は後世の石工にも受け継がれ、真玉町内で次の3対が確認される。

年号	西暦	所在地	石工名
大正4	1915	真玉町大村天満社	石工 城前土谷清吉 ハナノ尾川藤三郎
〃	9 20	下馬上身蔵社	石工 正屋辰太郎・安藤
〃	13 24	山畑飯牟礼社	なし

燈籠狛犬を詳細に見てみると、数段の基礎の上に、前脚を玉の上に構えた狛犬を配し、頭上には講花状の蓮弁を載せ、その上に火袋・隈根・宝珠をのせた形となっている。狛犬の顔貌などは、他の通



写真50 燈籠童子 真玉町応福寺

形のものとなり、醜怪な感じさえあり、できはあまりよくない。頭上に火袋などを載せることから、全体のバランスをとるのがむずかしく、こうなったのであろうか。宝珠については特徴的な形式が見られるが、これについては後述する。

このように、源平国恒は、石燈籠など神仏呪の守護莊嚴のために、置かれるものをつくつて作っている。それらの中で、作者に刻名は出ていないが、彼の作であろうといわれているものに燈籠童子がある。各作品には石工名もなく、源平国恒の作であるという確証はないが、一応ここでは承にしたいが、彼に関連した作品として考えてみる。

まず最初に触れた渡辺信幸氏の「灯籠童子とその作者」から、作品の一覧表を参考に、明らかに源平国恒の作と思われるもの、またそのように伝えられているものをあげると次のようになる。このうち黒土田原商店前のものは、源平国恒の子孫である安藤家から移したものであるという。

渡辺氏は前掲の報告の中で、これらの燈籠童子の制作年代を、大きく3段階に分類している。すなわち源平国恒が、制作したであろう時期を第2

所在地	数	銘文
真玉町 徳大寺神社	2	渡辺三平・井野口伊平 安政七年三月丙辰石
真玉町 大岩願必願寺	2	源平中三日月口後藤宗十郎吉次 安政七年後藤宗十郎吉次
真玉町大宮堂 十一面観音堂	2	後藤治左衛門・後藤彦十良
真玉町 藤原宗華神社	1	なし
真玉町 下城前稲荷社	1	#
真玉町 上城前金堂神社	1	#
真玉町 黒土田原商店前	2	#
真玉町 黒土前正公本願寺	2	#
豊後高田町 一の弘福社	1	#

段階とし、その前段階と後段階とに分けたものである。そして第1段階に属するものとして、真玉八幡宮の燈籠童子、及び応福寺の太鼓童子(太鼓・火袋)を背負うとしている人物の後から、集の1人が手を貸している)をあげている。

確かに真玉八幡宮のものは、第2段階のものに固さが見られるのに対し、固さも見られず、非常に手なれた優品である。渡辺氏は、その作者を「根拠が無く、勝手な想像が許されるなら」と断つて、その巧みなデザイン、着想のおもしろさなどから、板井系仏師・石工と推定している。仮りに板井系石工の作であるとするならば、木彫仏などに非凡な才能を発揮している、板井光あたりであろうか。

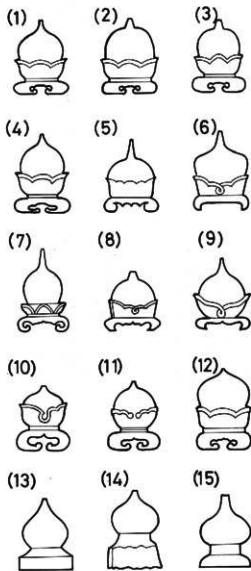
ところで、この作品を板井系石工のものとした場合、ここにて一つの疑問が残る。それはなぜ彼等の手なれた優品である奥地帯一帯に、同形式の作品が残っていないのだろうか、ということである。板井系仏師・石工の作品は、見てわかるように(板井系仏師・石工の作品は、見てわかるように)燈籠童子のようなく、自由な発想のもので作られた作品はほとんど見当たらない。ただし、真玉八幡宮の燈籠童子が、願主あるいは施主の注文で、このような形に作られたと考えるならば、板井系石工の手になったともいえる。しかし、現段階では、板井系石工をその作者に比定するには資料不足である。いづれにせよ今後の調査に待ち

たい所である。

次に源平国恒の作といわれる一群の作品であるが、先にも触れたようにやや固さが見られ、技術的にも劣る感じがしないでもない。しかし、同じ燈籠童子でも頭上に火袋を載せたり、太鼓上に腹いになってバツクロ首を持った形にしたり、玉の上に片足を載せたりなどその様式は多様である。このように、様々なポーズのものへと発展させていったのは、彼が研究熱心な性格の人物であったからだ、と考えられる。それまでの現成の枠にとらわれず、斬新しい様式の作品を作出していくという傾向は、燈籠狛犬にもいえることである。また文久3年(1863)銘の、真玉町白野西村金比羅社の石燈籠のように、卒から中台にかけて装飾(兼?)を施した作品にも、そのことがうかがえよう。

さて以上見てきた燈籠狛犬・燈籠童子の中で、銘文など明らかに源平国恒の作とわかる作品と無銘の作品とを比較すると、共通する特徴があげられる。前にもちょっとふれた宝珠の特徴がそれである。薄い露盤上に、猫足状の台を彫り、さらにその上に二重に縁どった、請花状の模様で下部を包んだ宝珠が、載っているという形式である。次にその略図を示すが、燈籠狛犬には後述のものにまで、その様式が継承されている。また墓石の笠の宝珠などは、現在までこの形が見られる。図の(4)は無銘ではあるが、竿の部分の装飾が、(3)の燈籠と同じ形をした燈籠の台に載っている。このことから作者は源平国恒と考えてよい。(00~05)は燈籠童子のものであるが、いずれも作者不詳、02は(1)~(3)とよく似ており、宝珠の特徴からみると源平国恒の作と考えられる。この宝珠の形は、彼の作品より古いと思われる、00真玉八幡宮の燈籠童子に使用されている。00真玉八幡宮の様式と一緒に、この宝珠の形も踏襲したのではなかろうか。

このほかにも特徴のある装飾として、宝珠の代りに小さい狛犬が逆立ちしたものがある。天保14年(1843)銘の石燈籠(真玉町城前天神社)、弘化3年(1846)銘の常夜燈(真玉町黒土前神社)、無銘ではあるが真玉八幡宮の燈籠などである。城前大



図一 安藤源平国恒および関連作品の宝珠例

- (1) 真玉町応福寺燈籠狛犬大藤原平作永5 (1852)
- (2) 真玉町真玉八幡宮燈籠狛犬安藤源平作文久2 (1862)
- (3) 真玉町白野西村金比羅社燈籠安藤源平作文久3 (1863)
- (4) 真玉町高寺燈籠無銘
- (5) 真玉町寺前大明神社燈籠松尾三門作元治2 (1864)
- (6) 真玉町大黒土前神社燈籠狛犬土格平作文久4 (1915)
- (7) 真玉町大黒土前神社燈籠狛犬石尾隆作大正9 (1920)
- (8) 真玉町船中神社燈籠狛犬大石文男大正13 (1924)
- (9) 真玉町城前山田家歴代の墓上格平ら下真の家屋代
- (00) 真玉町真玉八幡宮燈籠童子無銘
- (01) 真玉町白野赤松金比羅社燈籠童子無銘
- (02) 真玉町黒土前正公燈籠童子無銘
- (03) 真玉町応福寺燈籠童子安政7 (1860)
- (04) 真玉町徳大寺神社燈籠童子安政7 (1860)
- (05) 真玉町高寺十一面観音堂燈籠童子年号、石工名なし



写真51 石燈籠逆立狛犬 真玉町城前天満社  
 満社の燈籠には石工名はないが、嘉永5年(1852) 鋭の庇羅寺の燈籠狛犬(安藤源平)に刻まれていると同じ「章標」の文字があることから、源平國恒の作ではないかと推測されている。もし彼の作品だとすれば22歳の時の作となる。版半礼社常夜燈には、土谷善三郎定勝らと並んで安藤源平の名が見え、笠上の逆立定の狛犬は、彼の手になるものではなからうか。真玉八幡社の例は、源平國恒と思われるものより、作も優れ古拙も感じられるので、燈籠童子の例と同じく、彼はこの作品の様式を踏襲したとも考えられる。

源平國恒の現存する作品は、土谷定勝等と比べて数が少ない。しかし以上のような特徴を有する、無銘の作品を詳細に調査すれば、もっと多くの作品が確認されると思われる。

安政2年(1855)法橋位を受け、その後作品に弟子と思われる人物の名が出てくる。鷺海藤八・同格平で、安政4年(1857)銘の福真磨崖仏の石燈、元治元年(1864)鋭の庇羅寺の地藏像などがある。共に明治期まで作品に名が残っている。例えば、明治5年(1872)銘の香々地町中村観音堂の地藏(石



写真52 石燈籠代 真玉町真玉八幡宮  
 工 黒土鷺海藤八(八)の、明治28年架橋の真玉町黒土の大黒江(碑に石工鷺海角平の名が見える)などである。

建(1)	20代	30代	40代
	2	4	6

(2)燈籠など空珠の場所が高く、計測不可能なものが大半であるため、写真などからだいたいの形を計ったものである。

(3)『国東半島の石仏』渡辺信幸 昭和46年刊

表5 安藤源平国恒関係年表

(S.57.10 現在)

年号	西暦	事項	所在地	仏師石工名等	年齢
文政5	1822	出生		真玉町浜 淨心寺過去帳から	1
天保9	38	「国民軍成丁簿」筆者歳		8月23日 鷺海藤八生	17
弘化3	46	常夜燈	真玉町山畑飯半礼社	石工 城前村 土谷善三郎貞勝 宮整村 祐成源十郎 大岩照村 安藤源平(以下略)	25
#	#	「国民軍成丁簿」筆者歳		7月8日 鷺海角平生	#
弘化5	48	馬頭観音像	真玉町大岩屋庇羅寺	石工 安藤源平	27
嘉永5	52	燈籠狛犬	真玉町大岩屋庇羅寺	石工 安藤源平	31
嘉永6	53	十六羅漢像	真玉町湯原延命寺	石工 大岩屋 安藤源平	32
安政2	55	法橋補任状	真玉町大岩屋安藤源氏藏	補任 比叡山僧綱職之事 國恒 直叙 法橋上人位 権任 比叡山之旨令権与之処也 宣被承知者執事如件 安政二即年正月 日 山門執行執事正観院前大僧正門如	34
安政4	57	狛犬	真玉町大岩屋庇羅寺	法橋安藤源平國恒	36
#	#	石屋	真玉町下黒土福真磨崖仏	石工 大岩屋 法橋 安藤源平國恒 鷺海東八重光	#
文久2	62	燈籠狛犬	真玉町大村真玉八幡社	石工 大岩屋 源平	41
文久3	63	石燈籠	真玉町白野西村金比羅社	石工 大岩屋 源平 寺田 長石工門 黒土 藤八	42
元治元	64	地藏像	真玉町大岩屋庇羅寺	法橋 当村 安藤國恒 黒土村 鷺海藤八 岡田 格平 奥村 藤井歳平 同 猪谷歳平	43
慶応元	65	地藏像	真玉町小内河内中寺	仏師 大岩屋 法橋國恒 鷺海藤八 岡 格平	44
#	#	狛犬	真玉町小内河内山神社	石工 大岩屋村 法橋國恒 黒土村 鷺海藤八 岡 格平	#
慶応4	68	狛犬	香々地町長小野日枝神社	石工 大岩屋村 安藤源平 仲野芳平 短瀬源平 須瀬直三郎	47
明治3	70	宗廟家 「一代記」 (2)		景清生目八幡宮は、長峰増大権分、瀬口元助所有地の山に三石あり、其の上天然石を立て、景清の像を彫附け生目石と崇め奉る。 石工 大岩屋村 源平父子、 寺田の長右衛門 建入夫 中村二十三人、寺田二十五人 運宮祝詞は榎本筑前守 明治三年庚午五月九日 觀式 宗 清寧	49
明治4	71	「過去帳」	真玉町浜淨心寺	明治四年六月二十一日 法名 釋善寧 安藤源平 善善六父五十歳 明治四年十月二十二日 法名 釋尼妙善 安藤源喜寛 源平妻四十八歳	50

(1)「年齢」は源平の年齢をさす

(2)「真玉町誌」所収 昭和53年3月刊

おわりに

今回の調査で、見落した作品の数は多いと思う。また関連史料の調査も不十分であったので、この報告の推測部分を中心に、将来書き直される部分があるであろうことは承知の上である。一応ここでは、今回の調査の報告としてまとめたものであることを付記しておく。

最後に板井・土谷・安藤の各石工の、関係作品分布状況・石工師弟関係図、および石工年代表を書くことによってまとめる。

報告書印刷の段階で、新たな資料が判明したので最後に付け加えておく。豊後高田市真木大堂の木造不動明王立像の右手腕後世補足の木片に、次の墨書銘があるという。「佛師 表月舟彩色之」(宇佐歴史民俗資料館刊「豊後土産」所収、河野「六郷真山関係遺跡」より。)

板井甚蔵の墓石に「月船堂」とあることや、彼の作品が真木大堂近くの紙寿寺にあることから考えると、「月舟」は甚蔵のことかと思われる。

関係作品分布状況

	板井系石工	土谷定師	安藤系石工	計
大田村		1		1
豊後高田市	7	3		10
真玉町	6	17	11	34
香々地町	33		1	34
国見町	4			4
国東町	2			2
安岐町	1			1
山香町	1			1
山計	54	21	12	87

(※) 年代、銘文のはっきりしたものを取りあげた。

板井・土谷・安藤各石工師弟関係図

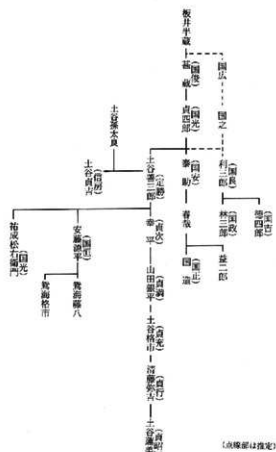
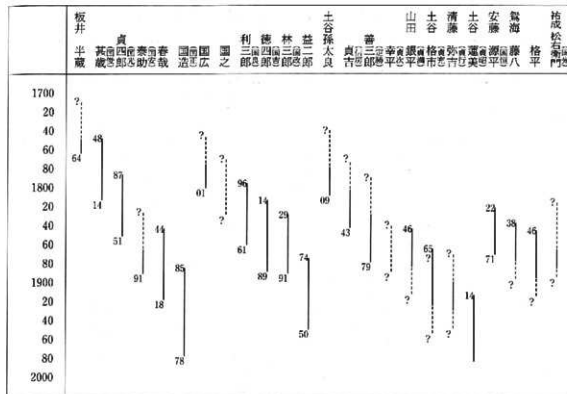


表6 石工年代表 (法橋関係)



## 第2章 田染の石工

### 第1節 石工の系譜と生活

#### はじめに

関東半島全域の石造物はおびただしい数に上るので、石工が各地で活躍したことは推測できる。しかし田染に数十名の石工が居て、石塔を専門に刻んでいることは知らなかった。「石工の生活」を分担したが、農耕をしながら副業としての石工であったから、生活的には農家と特に異なる点は殆んどなかった。したがって調査の重点を石工の系譜においた。

幸い昭和初期に結成された同業組合が、「田染石工同業組合協定価格簿」の外、種々の記録を所蔵しているので、昭和時代の石工を把握することは可能であった。明治・大正時代については、聞き取りではあいまいさを免れなかったが、大門旧墓地・間戸旧墓地・共同墓地で師匠墓を見出した。9基の師匠墓は、明治時代から昭和初期までに建てられ、弟子の氏名を刻んでいる。田染石工が江戸時代末期に始まり、明治時代の渡辺順六と渡辺林平が、興隆に貢献したことが判明する。後者は仏像を得意としたが、前者は石塔作りに新生面を拓き、田染石工に大きな影響を与えている。

作製した「石工の系譜」に住所を記入し、田染系石工の分布する範囲を確認した。田染系石工は、主として大門と間戸に分布しているので、両集落については、石工との関係の有無を家ごとに調べて、「石工の分布」図を作製した。調査日数が足りなかったため、系譜・分布とも不徹底であったことをお詫びする。

「石工の生活」は修業と生活に分け、修業で弟子の期間、生活では衣・食・信仰について記した。職人らしい点は、法橋位石工の系統である真玉町城前の方に見られた。

#### 1 石工の系譜

田染石工同業組合所属の現組合員は、組合員25

名、準組合員5名、計30名である。「田染石工同業組合協定価格簿」（以下「協定価格簿」と略す）を手掛りに、現組合員の親子、師弟関係をさかのぼり、田染石工の系譜作製を試みた。「協定価格簿」は、石工同業組合の最も基本的な根簿であり、昭和13年・18年・39年の全組合員を記載し、それぞれ36名、37名、34名で、昭和57年の組合員より数名ずつ多い。

現組合員と昭和18年の組合員とを照合すると、約40年隔たっているために殆んど代替りし、双方に名が見えるのは、倉成哲男・渡辺伊三郎の兩名だけである。河野正利・山田益夫・河野徳夫・東本安治・渡辺進・渡辺止・倉成正義・豊田今朝松・河野静・渡辺仁士・金高百郎・渡辺達雄・都甲円・渡辺数男の14名は、それぞれ河野隆・山田正八・河野俊一・東本政治・渡辺謙・渡辺武則・倉成義臣・豊田公俊・河野菊義・渡辺重典・金高義明・渡辺嘉徳・都甲力・渡辺義明の父である。子が組合員になっていないのは、藤田隆義・河野武男・綾部喜寿・河野義十郎・川野堅志・水江国彦・水江光・渡辺盛三・渡辺隆義・渡辺菊雄・豊田今朝治・野田吉人・渡辺信吉・渡辺弥六・財前久造・渡辺一策・渡辺義男・渡辺高男・渡辺官一郎・清原喜八・渡辺恒義の21名である。

昭和57年と18年のほぼ中間にあたる、39年の組合員で、57年と18年のいずれにも氏名が出ていないのは、河野好子・財前豊子・渡辺一・岩田利光の4名である。女性2名は夫（忠義と権郎）が石工、渡辺一は美登志の父、岩田利光は河野藤市の弟子であるが、戦後に石工になっている。

昭和13年の組合員で、昭和18年の名簿に見えないのは、河野忠一・河野一二三・河野慶之助・清原喜十・金高三次・都甲八郎・渡辺一郎治・渡辺嘉太郎・渡辺保・渡辺佐太武の10名である。

さらに「組人名座当り覚」によって、昭和3～13年に座元を務めた、新市・義隆・河野徳十郎



の3名が加わる。

なお聞き取りによって、河野辰之助(藤田隆義師匠)・安部三好(雅夫父)・河野藤市(兼輔父)・河野春夫(誠部喜寿師匠)・河野種蔵(河野儀十郎父)・渡辺与作(一・進・止父)・水江清八(光・国彦父)・倉成権六(正義・哲男父)・渡辺秀五郎(隆・盛三父)・渡辺三郎(伊三郎父)・渡辺寛一(菊雄父)・渡辺伊四郎(寛一三郎父)・豊田秀吉(今朝松・今朝治父)・河野小作(静父)・渡辺寿作(仁士父)・渡辺健作(弥六兄、達雄・信吉父)・渡辺清(都甲内師匠)・渡辺長次郎(義男父)・渡辺義十郎(敬男父)・渡辺市松(高男父)・渡辺順平(清治父)の21名が浮かび上がり、百名を越す石工を知ることができた。

中村地区には、大門旧墓地・間戸旧墓地・共同墓地と3か所の墓地がある。大分県は、明治時代に墓地の位置を制限している。明治35年、「墓地及埋葬制限細則」を改正して、墓地は人家等から60間以上距ることに定め、この規定に適合しない墓地に埋葬することを禁じている。このため新・旧両墓地のある集落は多いが、中村の共同墓地は新墓地、明治末期からの墓地である。

右記の表のように師匠墓を、大門旧墓地8基、間戸旧墓地2基、共同墓地4基、計14基を見出すことができた。14基のうち、墓碑銘によって、石工の師匠と確認できるのは次の3名である。⑦渡辺順六は「石工門人六名集而副石立碑」、⑩渡辺林平は「石細工ヲ修得シテ農事ニ併テ生業トス」、⑪渡辺俊六は「石工職ヲ業トシ」とある。この3基に記す弟子数はどれも10名未満である。石工の弟子が10名未満は多過ぎるようであるが、一応10名未満のものを石工の師匠墓と考えよう。

弟子が17名以上もある4基のうち、江戸時代に建てられた渡部(渡辺)姓の3基についてみれば、2渡辺十左衛門は「横瀬村渡邊小兵衛淳綱男」で「同苗助致養父」、4渡部與助は「杏樹村田原直光二男」で「為右衛門賣父」、3渡部為右衛門は「十左衛門賣父」と記す。したがって、渡辺小兵衛十左衛門清一與助綱致一為右衛門芳綱一十左衛門宣綱となり、下線を施した3代の墓である。3基とも笠塔で、氏名が家柄のようであり、弟子数も

## 田染石工の師匠墓

No.	年号	西紀	被葬者氏名	弟子数	墓地名
1	文化11	1814	河野吉之悉	8	間戸旧墓地
2	文政7	1824	渡辺十佐衛門清	25	大門旧墓地
3	安政4	1857	渡部為右衛門芳綱	19	〃
4	文久3	1863	渡部與助綱致	17	〃
5	明治10	1877	渡辺俊逸	32	〃
⑥	〃	〃	渡辺喜助	3	〃
⑦	〃	21 1888	渡辺順六	6	〃
⑧	〃	35 1902	倉成友平	4	〃
⑨	〃	〃	河野種蔵	3	間戸旧墓地
⑩	〃	40 1907	渡辺林平	9	共同墓地
⑪	大正8	1919	豊田秀吉	1	〃
⑫	〃	〃	河野小作	2	〃
⑬	〃	1924	渡辺俊六	4	大門旧墓地
⑭	昭和4	1929	河野藤市	5	共同墓地



写真 53 渡辺為右衛門師匠墓

多いことから、庶民教育機関である寺子屋の師匠墓ではないかと思う。5渡辺俊逸は「治養父」とあるのみであるが、笠塔と弟子の多きから、前3基と同じように寺子屋の師匠と思う。1河野吉之

丞の墓も並塔で、弟子数も多いので、寺子屋の師匠ではないかと推測する。以上のように、江戸時代末期から明治初年にかけて建てられた、弟子数の多い5基は石工の師匠墓とは考え難い。

6 渡辺喜助以降の9基について記そう。渡辺喜助は、明治10年が「行年六十一歳」であるから、江戸時代末期には大門に石工が聘たことを立証するが、弟子3名は横樺・池部・蔭の出身である。

渡辺順六は、田染石工の興隆に最も貢献した。師匠墓だけでなく記念碑が建っているのは彼だけである。田染石工は主として石塔を刻んでいるが、石塔製作を重視したのが彼の最大の功績であるという。このことに関して、次のような興味ある話が伝えられている。明治時代、白杵から石工を招いて、蓮華座や猫足などについて教わった。その時に指導を受けた順六が、田染石で石塔を作るように奨めたという。

白杵は磨崖石仏で全国的に著名であり、灰石とよばれる凝灰岩の産地である。しかし田染石工、白杵の灰岩を使用し始めたのは最近のこと、田染と白杵はあまりにも離れているから、白杵の石工を招いて指導を受けたという伝承は、いわかに信じ難い。ところが大成寺住職渡辺宏紀氏が「手向の花」という句集を所蔵している。約10年前、松木鑑(西鑑)を改竄した際に発見されたという。この句集によれば、田染と白杵が全く無縁はいわれないという。同句集は、「大應寺先住道月老翁」と、「元大正正頼梅樹翁」の句集会の遺傳句集である。渡辺順正兼月老翁は、明治32年2月8日、74歳で入寂しているから、句集は32年から33年に刊行されたものであろう。投句者は、田染を中心に国東半島に及んでいるが、例外的に白杵からの酔笑・水文・克己・農素の歌載っている。兼月老翁と梅樹翁のいずれが、白杵に俳友を持つようになったかは不明であるが、浄土真宗寺院の住職である兼月老翁が、宗派の会合で機会に恵まれ、兼月老翁を介して、梅樹翁も白杵に俳友を持つようになったと推測するのが自然であるまいか。そうであるならば、酔笑は「七十七翁」と記し、兼月老翁より5歳年長である。酔笑が、白杵市の浄土真宗寺院の住職であるかを知りたい。



写真54 渡辺順六翁記念碑

墓碑銘によれば、順六は浄土真宗の熱心な信者であるばかりでなく、調理・挿花にも堪能であった。明治21年は行年63歳であるから、大成寺の渡辺順正住職と同年の生まれである。順六が俳句を嗜んだかどうかは不明であるが、宗派や趣味を通じて渡辺住職と親しかったことや、住職を介して白杵の俳人と交誼を持ったとしても、ありえないことはない。しかし白杵から石塔作りや、蓮華座・猫足などの指導を受けたとは考え難い。江戸時代末期の石塔、あるいは蓮華座・猫足のある石塔は旧墓地にある。何かの話の中で、石塔作りの将来性や、蓮華座・猫足を採り入れた石塔が、田染石の長所を活かすことを感得したのではあるまいか。また大成寺住職は、同業組合結成前から、田染石工と深いかわりを持っていたことわかれる。

順六の墓は、門人6名が刻んだと墓碑銘に記すが、門人の名は、河野吉之十・渡辺伊四郎・倉成友平・河野權造・渡辺建十郎・渡部寛造・渡部嘉太郎の7名である。順六の子は権八であるから、門人7名が建てたのであろうか。順六の弟子で、



写真55 渡辺順六師匠墓(明治21年)

有銘の作品があるのは、河野權造と河野吉之十である(「石造品に見える石工跡画」)。また師匠墓が立てられているのは、⑨倉成友平と⑩河野權蔵であり、⑭河野藩市は河野權蔵の弟子である。

順六と並んで、大きな影響を与えたのは⑪渡辺林平である。墓碑銘によって、林平の師匠が渡辺初助であったことがわかる。渡辺初助の作品として注目されるものに、杵築市の八坂神社がある。石造社殿としてはまれな大きさと、細部まで丁寧に彫っており、天保十三年(一八四二)の建立である。本年度末に県指定が予定されている。林平の弟子は、河野小作・河野貞平・後藤重太郎・渡辺寛一・河野百一・河野菊馬・岩尾伊六・河野源作・豊田秀吉の9名である。しかし全員が石工であるかは疑わしい。林平は石工としては「佛像/彫刻二種技ヲ有シテ相當數ノ佛龕以上」に及んだという。また順六と同じように多芸で、「幼ニシテ池坊ニ入門。熱心花道ヲ修得シ其興隆ヲ究ム。田染陋習矯正ヲ志シテ門生ノ養育ニアル。風ヲ聞イテ入門師事スル者、東、西両東、遠見ノ各郡ヨリ廻ヲ援ス」とある。前記の弟子の中には、花道の



写真56 渡辺六師匠墓(大正13年)

弟子が含まれている可能性もある。例えば⑬豊田秀吉は、⑯河野小作の弟子として名がある。恐らく石工としての師匠は河野小作で、林平は花道の師匠ではないかと推測する。いずれにせよ、林平の弟子で師匠墓があるのは、前記河野小作と豊田秀吉である。

石工の師匠墓は死後建てられているが、渡辺俊六は生前の大正6年に建てられている。俊六は大正13年に79歳で死亡し、他の石工に比べて長寿のためと思う。俊六は13歳の時に父をなくしているから、青少年期にかなり苦学を経験したようで、順六や林平のような趣味は持たなかった。「伍兵・惣代・郡村會議員・区長・土地整理委員・大分通行道路委員等村長ニ多參與シ、公共事業ニ盡精シ」とある。俊六の弟子は、渡辺長太郎・財前久蔵・岩尾金十・岩尾九八の4名である。

⑧倉成友平、⑨河野權蔵兩名の墓には、弟子の名を記すだけで墓碑銘もない。倉成友平の弟子は、河野柳月・渡辺秀五郎・豊田幸次郎・渡辺新作の4名、河野權蔵の弟子は渡部佐太郎・渡部与作・河野藩市の3名である。河野小作の弟子は渡辺良

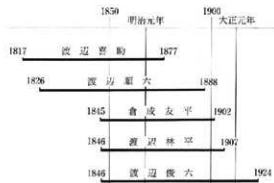




写真 57 倉成友平師匠墓 (明治 35 年)

作・豊田秀吉、豊田秀吉の弟子は河野今朝男、河野藤市の弟子は山田益夫・河野武男・東本安治・河野徳夫・岩田利光であり、河野藤市が師匠墓のある最後の石工である。

墓碑で生没年の判明する、渡辺喜助・渡辺順六・倉成友平・渡辺林平・渡辺俊六の生存期間は下表のようである。



石工としての活動期間からいえば、渡辺喜助は江戸時代、渡辺順六は江戸時代と明治時代が半ばしている。倉成友平・渡辺林平・渡辺俊六は、生年は弘化2、3年で、この3名は明治時代の石工

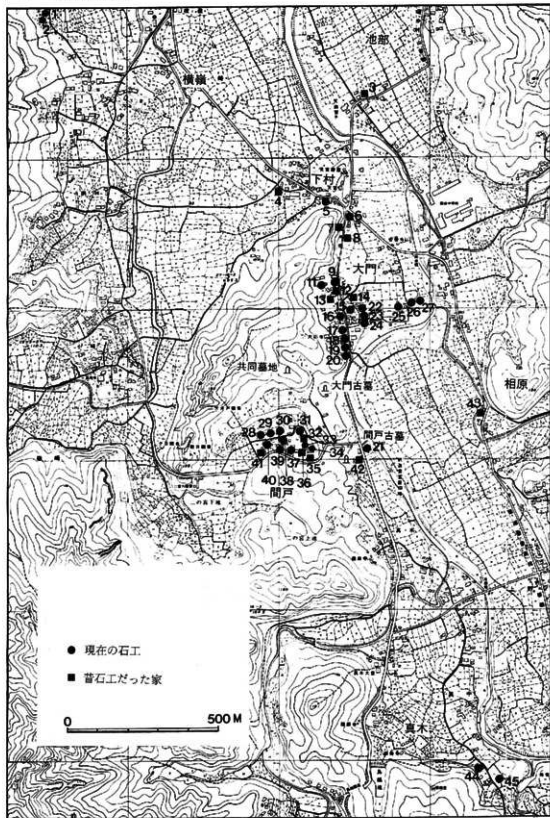


写真 58 河野種藏師匠墓 (明治 35 年)



写真 59 河野藤市師匠墓

図-2 田染石工の分布



といえる。

祖父・父・子と3代以上にわたって石工を続けているのは、渡辺与作・倉成友平・渡辺伊四郎・豊田秀吉・河野小作・渡辺健作等の子孫であり、石工の石切り場を所有している家が殆どである。大門坊に建っている1丈3尺の大御殿は、大正時代末、渡辺与作・河野儀十郎・渡辺一策等が刻んだ。石材は共同墓地付近で切り出した。運搬の便が悪かったので、頭部と脚は荒削りしてそりに載せ、登り坂はころを便い、大門全戸の奉仕で数日間かけて運んだ。河野儀十郎は名工として知られ、文盲であったが彫った字が生きていたという。

石工は普通の農家より現金収入が多少いけれども、飲みごとの好きであるから財産は乏しかった。渡辺達雄は働き者で、大門の人々が松葉掻きをしていた山を取り崩し、田を2町ほど買入れた。

分布 田染の石工は、「石工の系譜」の集落欄に見るように、大門・間戸・下村・横瀬・真木・相などのであである。以上の集落のうち、特に多い大門・間戸について「石工の分布」図を作製した。世帯主が、現在石工をしている家は●とし、戸主・祖父・父・夫などが、石工をしていた家は■として、一連番号を記している。「石工の系譜」の分布図欄の番号と同じである。大門・間戸では、多くの家が石工を出していたかが理解できる。特に間戸では、戦後の転入者を除けば、石工を出さなかったのは耕地面積の多い1戸だけである。

## 2 石工の生活

修業 親や兄が石工の場合は家で修業するのですが、他人の弟子になることは少なくなっていた。高等小学校を卒業して弟子入りし、3年間修業するものが普通であった。午前8時ごろ作業小屋に行き、親方は道具の手入れ、弟子は小屋の掃除を始めた。石起こし、直線切り、細工の順に修得するが、親方は「見て覚えよ」と言い、盗み覚えが技術習得の方法であった。修業期間は無報酬で、益・正月・5節の休みに、は2〜3銭の小遣をくれた。親方は少しでも長く居てもらいたかったが、

人目があるので3年すれば独立させた。親方が番匠がねと膝を離れてくれた。石山を3坪ほど買ひ、近くに間口2間、奥行1間半の小屋を建てた。小屋開きには親方や先輩の石工を招いた。益・正月のたびに親方の所へ挨拶の挨拶をし、難しい細工物は親方に教えを請うと、詳細に教えてくれた。字の上手な先輩には、石塔に字を書いてもらうなど世話になった。

一生の間弟子を1回とれば良い方で、たいいてい石工は、男の子が尋常小学校の高学年になれば、学校を休ませて手伝いさせてきた。

法橋位を持つ土谷系石工の本拠地である真玉町城前では、15歳から21歳までの間に弟子入りをし、親方の家に住み込み内弟子と、通いの外弟子との2種があった。内弟子は、夜が明けると牛馬の草を切り、6時にはふいごの火を起してのみを焼き、7時半ごろから山へ石切りに出掛けるなど、親方の家の雑用一切をした。朝食や夕食には最後に膳に着き、最初に席を立った。2年間ほどは親方の道具焼きをし、3日目から自分の道具一式を作り、石塔や仏像、土台石作りをした。技術の習得は田染と同様に盗み覚えであった。5年間経つと、弟子入りの際に世話してくれた仲立ちが、1〜2年間のお礼奉公の話をまとめてくれた。この期間は技術を本格的に教えてくれ、給金をもらった。独立祝いに親方が道具類を贈ることはなかった。清藤弥吉が最も多く弟子を持ったが、5名くらいであった。

城前では、戦後に戦死者の軍人塔を切つてから、石塔を手掛けるようになった。

生活 田染の石工は散反の耕地で農耕しながら、石工を副業としていた。石工の仕事は、1月中旬から4月末までと、8月中旬から10月末までの農閑期であり、この間に益費用稼ぎの石塔切りもした。2尺5寸の石塔で20〜30日を要し、1年間に3基も作れば良い方であった。石工の出稼ぎは、大正末期から昭和初年にかけて、2名ほどが山香町に石切りに出た。当時は米1俵5円50銭で、日当は80銭ほどであった。

石切り場や作業小屋は、道路より入っているから、人目を心配しなくても良かったし、石工仕事

は汚れといたみがひどかったので、使い古した衣類を身につけた。夏は麦から帽子をかぶり、上半身は裸体で、下半身はもつこべこびとつであった。その後はメリヤスのシャツ・半パツチに厚手の前掛、地下足袋を履いた。地下足袋が普及したのは昭和初年である。冬季は手拭で頬かぶりをし、シャツの上に袖無半天、下半身は股引であった。女性は殆んど石履きが主で、腰巻・古長着に半幅帯を締めて尻をかぶり、足半履きであった。作業小屋で女性が働き出したのは、戦時中に労働力が不足してからである。注文取りの時は、鳥打帽子・あつし・股引・地下足袋姿であったが、鉄鉤袖の半天・パツチ・前掛・地下足袋になった。

城前では、半履半日であったけれども、職人らしく江戸履を着用した。昭和10年ごろまで、大工の棟梁が寺社建設の際、名前や紋を染め抜いた白半天や、江戸履を配っていたからだろう。仕事場に着ければ印半天を脱ぎ、夏は麦から帽子・江戸履・草鞋、冬はシャツ・江戸履・袖無半天を着た。戦時中に衣料不足で江戸履は姿を消し、古シャツを着るようになり、現在はシャツ・ズボンに靴履である。

食事 普通は農家と同じであった。大正半ばまで、米1升・粟2合の粟飯であったが、昭和初年から米3合・麦7合の麦飯となった。戦時中から戦後の23年までは食糧難で、芋やうどなどが多かった。朝食は味噌汁に漬物、昼食は朝と同じ、夕食は季節の野菜の煮付けなど、自家で栽培する野菜が主であった。野菜は大根・なす・きゅうり・にんじん・じゃがいも・唐芋・里芋・南瓜・白菜・豆などを作った。長洲から魚売りが来ていたので、1週間に2〜3回は鯖・ハモを買った。昭和40年代に入ると、市販の食品を買うようになり、食生活が豊かになった。小麦粉の蒸し餅やこね餅はなごにこれに作り、石組工を夜なべにするとはなかったから、夜食はしなかった。

城前では、夕食には雑炊・団子汁・ほうちようかまで、うどんは祭りなど晴れの食物であった。昼食は御行亭に3人分くらいの麦飯を詰め、梅干・漬物をお茶にした。

信仰的にも普通の農家とさほど違ふ点はない

た。石工の禁忌やふいご講は全く聞き出さなかった。真中にあった1軒の鍛冶屋ではふいごを祭っていたという。ふいごが使われ出したのは昭和10年ごろである。

城前では、戦時中に戦傷者が、「神や仏があるものか」と言い出して、山の神祭りの講はと組とも廃絶した。しかし石工達は、石割りの前に、石を切る周囲を掃き清め、酒を注いで火を焚き、「この場所で石を切りますので事故のないように」と、祈願してゐた。田染では、また大晦日には、家の土間に1斗俵の上にお年玉を供える。玄能の柄には、モロムキ(黒白)・鶴亀(黒鯛)・松と、白紙に包んだ持ち来紅白の水引で結ぶ。田染では、作業小屋から持ち帰った番匠ね・綿をきれいに洗い、白紙を巻いて紅白の水引をかけ、床の間に置いてお年玉一重ねを供える。

## 第2節 同業組合と製品

### はじめに

「石工同業組合と製品」としてあるが、組合所属の石工は、思い思いに注文生産しているから、同業組合と製品とは直接関係はない。調査で分かった石工同業組合と、製品をまとめて題にしたのである。

田染石工同業組合は、「石工同業組合協定価格簿」(以下「協定価格簿」と略す)という、基本的帳簿を所蔵している。主としてこの「協定価格簿」によって、同業組合の結成・太子講・役員・活動の概要を記した。同業組合が昭和2年に結成されたのは、不況による値崩れ防止が目的であったと思う。戦前は、太子講を正・5・9月の3回開き、そのうちの1回に定例総会を開いていた。役員には、正・副会長と数名の幹事(理事)があった。全ての氏名を確認できるが、歴代の会長氏名のみを記した。同業組合は、規約を制定していないことから分るように、戦前は価格協定を目的とした親睦的性格が強かった。会費を徴集するようになった27年以降、同業組合らしい活動が見られるようになる。

製品は、種類・販売・価格の変遷・年間総生産量に分けて記した。種類は、4年の協定価格表と、23年の最低価格表(以上「協定価格簿」)、47年の石塔点数基準表に記された品名をあげた。田染石工の製品は圧倒的に石塔が多く、次第に高級品の傾向が強まっている。そして戦後の40年代からは累代墓、特に機械の導入による御影石製へと変化する。

### 太子講産元一覧(1)

	昭和3年	昭和4年	昭和5年	昭和6年	昭和7年	昭和8年
正 月		義隆	渡辺 義隆		新市 渡辺 弥六	河野 十郎
5 月	渡辺 与作	渡辺 保	渡辺 一策	東本 安治	河野 正利	河野 静
9 月	渡辺 数男	渡辺 雄雄	河野 徳夫	河野 武男	財前 久蔵	山田 益夫
	昭和9年	昭和10年	昭和11年	昭和12年	昭和13年	
正 月	渡辺 盛三	倉成 正義		豊田今朝治	渡辺 菊雄	
5 月	豊田今朝松	野田 吉人	鎌部 喜寿	渡辺伊三郎	渡辺 高男	
9 月	河野兵之助	渡辺 八郎	清原桂二郎	渡辺 寿作	河野儀十郎	

製品は名称だけでは理解し難いので、石工が注文取りに携行する「絵図」の絵図を載せた。また共同墓地で多く建立されている種類を調べた。販売は開き取りであった。価格の変遷も、4年の協定価格表、6年の標準価格表、25年の最低価格表(以上「協定価格簿」)と、47年の石塔点数基準表によって記した。年間総生産量は、個々の石工が注文生産しているので把握が困難であるから、石碑出荷控帳によって53年度分のみを記した。

### 1 石工同業組合

結成 石工達は、大正初年ごろから、3月と7月の21日に太子講を催し、数名ずつで懇親を深めていたらしい。昭和2年9月21日、石工同業組合が結成されたことは、同組合所蔵の「協定価格簿」に、昭和2年以降の役員が記されている、ことによって確認できる。組合結成は、税金対策のためとする意見もあるが、組合維持をはかるための、協定を結ぶ目的であったと思われる。前記「協定価格簿」は、組合の最も基本的な帳簿であるが、「協定価格簿」と表記してあることから、当時の石工にとって、価格の協定と維持が、死活の問題であったと思う。ただし「協定価格簿」に記す協定価格は、昭和4年が最初である。組合結成を契機したのは、渡辺儀作・渡辺義海両氏であるという。渡辺儀作氏は酒造業を営み、田染村長や県議員を歴任した。渡辺義海氏は大応寺(本願寺派)住職であった。両氏は、昭和6年に同業組合顧問に推されている。

### 太子講産元一覧表(2)

	昭和43年	昭和44年	昭和45年	昭和46年	昭和47年	昭和48年
正 月		渡辺 高徳	渡辺 武則	都甲 一養	都甲 力	渡辺 重典
9 (8) 月	河野 秀治	渡辺 隆徳	渡辺 勝彦	山田 正八	倉成 義臣	財前又一郎
	昭和49年	昭和50年	昭和51年	昭和52年	昭和53年	昭和54年
正 月	安部 豊夫	河野 忠義	河野 豊雄	河野 盛	金高 静彦	豊田 公俊
8 月	渡辺伊智雄	河野 菊義	河野 万七	渡辺 義明	渡辺 正人	渡辺 梯
	昭和55年	昭和56年	昭和57年			
正 月	東本 政治	渡辺 末義	倉成 義臣			
8 月	渡辺英登志	渡辺 菊義	河野 秀治			

注 苗字不詳者がいる。

太子講 太子講は、戦前は、正・5・9月の21日に開いていた。「組合人名座当り算」によれば、昭和3年から13年までの座元は表(1)の通りである。

昭和43年の「太子講組合員ざぶね覧」も、昭和56年の「太子講ざぶね覧」によれば、昭和43年から57年までの座元は表(2)の通りである。

5月の太子講は農繁期のために廃止され、昭和48年から9月は8月21日に変更している。9月21日は大応寺が彼岸まで多忙のためである。

太子講の際は、座元の床の間に聖徳太子像の軸を掛け、お神酒・御供・ろうそく・緑香・色花を

供える。聖徳太子の軸は大応寺が寄贈したものである。大応寺の院家が阿弥陀経を誦読して、お神酒をいただく。座元を務めた人を除外して、くじ引きで次の座元を決めてから、直会となる。直会の講は、吸い物・酢の物・煮付けと押し抜きである。押し抜きは、10cm角の木枠で押し抜いた五目飯である。座元の属するグループの組合員が、座元の手廻を手伝って、買物や調理をする。直会の半ばで、「座崩れをしよう」と声がかかる。座元が「ただ今より頓置渡しをします」と挨拶し、次の座元の前に木箱を持参して、お神酒をさして座渡



写真 60 太子講



写真 61 聖徳太子掛軸

しをする。木箱には聖徳太子の輪・座敷敷・押し抜きの木枠を納める。座敷敷を受けた座元は、次の太子講まで聖徳太子の輪を床の間に掛け、お仏飯を毎毎供えて祭る。

太子講の時に総会が開かれるが、定例総会は次のように変遷している。昭和6年から13年は5月21日、昭和14年から18年は9月21日、昭和23年からは旧正月3日、昭和37年以降が新正月21日である。

**役員** 昭和2年の役員は会長1名、幹事6名である。昭和6年以降は正・副会長各1名となる。幹事は昭和6年から18年までは3名、昭和23年は2名に減少する。昭和25年からは理事と改称して3名になり、その後は3～4名である。石切り場的小屋が近い者がグループを作り、グループごとに世話人として選んだのが理事で、理事が正・副会長を連選するしたりである。役員の中には、昭和6年の総会で2年と定めている。この時に顧問2名を設け、石碑最低基準価格の改訂を行っている。

歴代の会長は次の通りで、( )内は就任年である。

あ。

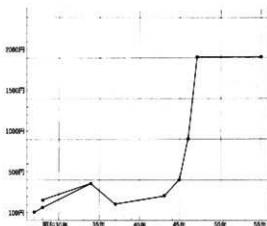
渡辺与作 (昭和2年) 一渡辺保 (6年) 一河野辰之助 (8年) 一部八郎 (10年) 一渡辺一策 (12年) 一東本安治 (14年) 一渡辺仁上 (16年) 一渡辺達雄 (18年) 一野田吉人 (23年) 一河野徳男 (25年) 一渡辺一 (26年) 一安部三好 (27、29年) 一豊田今朝松 (31年) 一渡辺佐武 (33年) 一岩田利光 (35年) 一部一義 (37年) 一金高義明 (39年) 一渡辺正人 (41年) 一河野菊義 (43年) 一渡辺義明 (45年) 一河野豊樹 (47年) 一部一夫 (49年) 一河野豊樹 (51年) 一倉成義昌 (53年) 一東本政治 (55、57年)。

**活動** 同業組合が組合として活動するためには、運営資金が必要である。田染石工同業組合は結成以来、年3回の太子講を開いていたが、講ごとに会費を徴集するのみで、組合費は納入させていなかった。「協定価格簿」によれば、組合費を徴集するようになったのは、戦後の昭和27年からである。組合費を徴集するようになるまでは、同業組合とはいえないが、価格協定を主目的とした、親睦団体的性格が濃かったといえる。その性格を反映するように、戦前は「協定価格簿」の総会記載事項は極めて少ない。村界者に贈る帛旗・香典(13年)、県警察接見会と防空協会への寄付(18年)、積み立て金の開始(16年)などである。積み立て金は基本金を意味しない。衣料給付を受けるためのものであったことは、積み立てをしないうちは衣料を配給しない、という決議に窺える。

昭和27年、組合費100円を徴集して以後、組合費は表のように値上げされている。昭和28年150円、34年450円となりながら、37年200円と下がった理由は不明である。450円は3期に分納するもので、37年の200円は1期分かもしれない。45年以降の急上昇は、物価の上昇だけでなく、市民税申告の件についての交渉と関係している。47年の2,000円は、太子講会費を含むものと考えられる。それほど値上げではなさそうである。

組合費徴集を始めた翌28年6月27日、予期しない水害が発生し、県税減免申請書を取りまとめて提出するという、組合らしい活動が必要となり、27年度事業税が免除された。さらに昭和31年には、豊後高田税務署に所得税減免申請をしている。こ

## 組合費の変遷



の年は間年であったから、石塔を主製品とする田染石工への影響が大きかったことが推測される。昭和45年以降は、前に記したように、市民税申告の件について、豊後高田市役所税務課との交渉が行われる。各人の月ごとの出荷を点数で、組合長へ提出する方法を主張し続けたが、49年には市税務課の要請を容れて、青色申告に踏み切ったようである。

昭和39年9月21日の総会では、組合員証の交付を決議している。仲買人が増加し、石屋を詐称して製品を受け取り、劣質な製品を納めたり、全く製品を納めないような悪質者が居て、田染石工の評判を低下させたことに対する自衛策である。組合員証を持たない者は、組合員でないから、注文しないように、組合員が広く知らせて回って、声価の回復に努めたという。さらにこの総会では、誇大吹聴の自衛を併せて決議している。

同業組合の最も重要な機能である価格協定を除いて、組合の活動の概要を記した。価格協定については次の製品の項で記す。

## 2 製品

**種類** 田染石工の製品は石塔の外、くど・流し・風呂の焚き口・瀝瓦・石樋・石調・鳥居・狐・唐獅子・仏像・灯籠・国東塔・記念碑など多種多様である。しかし石塔が主で、石塔は1割にも満た

ななかったという。くどは昭和10年ごろまで、瀝瓦は社寺・医者・富農の土葬の石瓦である。石樋は、昭和26年ごろ、西原池の敷敷を請けたことが記憶されている。全長約20間で2か月ぐらいの作業量であった。堤防の下に埋設するので、特に硬い石を使った。長さ3～5尺、幅2尺、高さ5寸、個体3寸幅に、幅2尺、厚さ3寸の蓋をかぶせた。仏像の例としては、大門坊に巨大大師像が建っている。大正時代末、河野徳男・渡辺与作・渡辺一策等が刻んだものである。灯籠や国東塔は昭和40年代半ば以降に増えた。記念碑などは共同で建てている。

昭和4年の協定価格表の製品が、当時の標準的な製品であるが、次の20種に及んでいる。

小石塔、小社、くど、2尺社、7尺立石灯籠、1尺5寸二重、1尺8寸二重、1尺8寸すり足三重、1尺8寸二重花三重、1尺8寸ぐり足三重、1尺8寸角三重、1尺8寸角四重、1尺8寸四重、2尺角三重、2尺角四重、2尺本五重、空塔2尺四重、2尺5寸本五重、3尺本五重。

石塔外は、小社、くど・2尺社、7尺立石灯籠の4種で、他の16種が石塔であり、小石塔から最高級の3尺本五重までである。

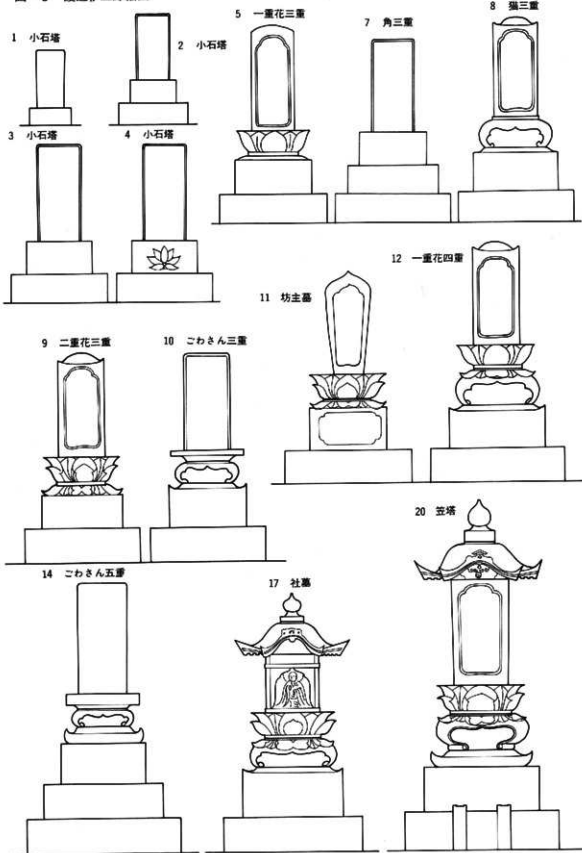
戦後の昭和23年の最低価格表に記された品目は、次の22種とやや増加している。

小社、小石塔、1尺5寸二重、1尺8寸二重、1尺8寸一重花三重、1尺8寸角三重、1尺8寸4重、1尺8寸すりばん五重、1尺8寸本五重、2尺4重、2尺本五重、2尺笠塔四重、2尺2寸本五重、2尺5寸本五重、2尺5寸笠塔五重、2尺7寸本五重、3尺本五重、3尺単人塔三重、4尺単人塔三重、4尺5寸単人塔三重、5尺単人塔三重、6尺単人塔三重。

くど・2尺社・7尺立石灯籠が消えた反面、石塔が21種と増え、特に単人塔5種の新設が目目される。戦後は一段と石塔製作へ傾斜し、戦死者の石塔建立が増加している。

経済の高度成長は田染石工にも大きく影響した。昭和40年代に入ると、都市部で見られた景観基建設の波が、国東半島にも押し寄せた。しかも高級品指向から御影石の注文が増えた。田染石に

図一三 渡辺伊三郎繪圖



比べて硬度の高い御影石の加工には、機械の導入が不可欠であった。このような状況を反映して、昭和47年の石塔点数基準表には、次の25種が記載されている。

- 1 尺8寸花三重、1尺8寸四重、1尺8寸五重、2尺角三重、2尺四重、2尺五重、2尺笠塔、2尺2寸五重、2尺2寸笠塔、2尺5寸角三重、2尺5寸本五重、2尺5寸笠塔、2尺5寸東京型、3尺角三重、3尺本五重、3尺笠塔、3尺東京型、1尺5寸社、5尺立回東塔、8尺立回東塔、10尺立回東塔、6尺立五重塔、雷見灯籠(笠径2尺未満)、雷見灯籠(笠径2尺以上)、5尺立春日灯籠。

石塔が17種と減少したのは軍人墓が消えたためである。2尺未満の個人墓が減り、地形・玉垣を持つ累代墓が12種と、石塔の中心になっている点が注目される。また石塔外の8種は、国東塔・五重塔・雷見灯籠・春日灯籠など、庭園の景観物が目立っている。

- 石工が注文取りに携行する「絵図」によって、石塔の形態・部分名称・寸法・用途の概略を記す。まず田染石工が、本五重と呼んで重視するもの部分名称を記す。最上段を穂、次が花(上花と下花共に二重花である)、猫足(猫と通称し、足が外側に巻いた本塚と、内側に巻いたぐり猫とがある)、角地盤、二番、下地盤であり、二番が入れば香立がつく。各部分の寸法は、穂高3尺に例を取ると次のようである。穂(高さ3尺・幅1尺3寸・奥行1尺2寸)、上花(高さ7~7.5寸・幅1尺9寸・奥行1尺8寸)、猫(高さ9寸・幅2尺・奥行1尺9寸)、角地盤(高さ1尺2寸・幅2尺3寸・奥行2尺2寸)、二番(高さ1尺・幅3尺4寸・奥行3尺3寸)、下地盤(高さ9寸・幅4尺5寸・奥行4尺4寸)
- 12 二重花四重
  - 13 二重花五重 13に二番が入っている。
  - 15 ごわさん五重 穂、ごわさん、そうばん(そうばんと通称する)、角地盤、二番、下地盤。戦死でない軍人墓にもする。
  - 16 そうばん五重 穂、二重花、ぐり猫、そうばん、角地盤、下地盤。
  - 17 社墓 穂の部分が笠付の社、二重花、ぐり猫、角地盤、下地盤。
  - 18 本五重
  - 19 そうばん六重 穂、二重花、本猫、そうばん、角地盤、二番、下地盤。
  - 20 笠塔

次に渡辺伊三郎氏の「絵図」によって説明する。図は段上達縁が省略した。6・13・14・16・18・19は後出する。岩田利光氏の「絵図」は、渡辺氏の「絵図」と重複するものを避けた。

- 1 小石塔 水子用。穂(高さ1尺・奥行4寸)、下地盤(高さ3寸・幅8寸・奥行7寸)。
- 2 小石塔 小児用。穂高1尺5寸。
- 3、4 小石塔 子供や墓さん用。穂高1尺5寸。穂、角地盤、下地盤。3と4は穂高は同じで、

奥行に厚みがある。

- 5 一重花三重 穂、花、角地盤、下地盤。穂の薄い平塔。

- 6 二重花三重 穂の厚い角塔。
- 7 角三重 神道用の平塔。
- 8 猫三重 穂、猫足地盤、二番、下地盤。
- 9 二重花三重 穂、二重花、角地盤、下地盤。
- 10 ごわさん三重 穂、ごわさん、角地盤、下地盤。

- 11 坊主墓 天台宗や禅宗の僧侶墓。穂(円)、花、角地盤(上部が花)、下地盤。
- 12 一重花四重 穂、花(一重)、ぐり猫、角地盤、下地盤。

2尺未満の四重 花が二重である点が12と異なる。

- 14 二重花五重 13に二番が入っている。
- 15 ごわさん五重 穂、ごわさん、そうばん(そうばんと通称する)、角地盤、二番、下地盤。戦死でない軍人墓にもする。

- 16 そうばん五重 穂、二重花、ぐり猫、そうばん、角地盤、下地盤。

- 17 社墓 穂の部分が笠付の社、二重花、ぐり猫、角地盤、下地盤。

- 18 本五重

- 19 そうばん六重 穂、二重花、本猫、そうばん、角地盤、二番、下地盤。

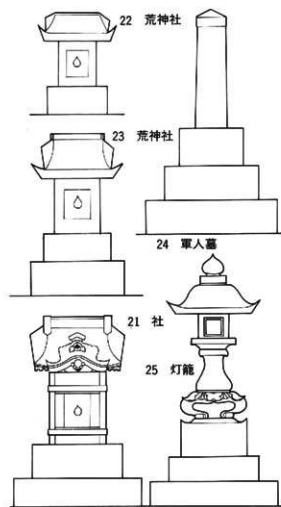
- 20 笠塔 穂、二重花、本猫、そうばん、角地盤、二番、下地盤。笠(高さ2尺・幅2尺6寸)、穂(高さ2尺5寸・幅1尺3寸以上)。花以下は3尺本五重と同じ。

- 21 社
- 22、23 荒神社。
- 24 軍人墓 日露戦争以後の戦死者の墓。

- 25 灯籠 頭、笠、火袋、火台(お膳ともいう)、脚(竿ともいう)、本猫、角地盤、二番、下地盤。高さ7尺から1丈まで。

「協定価格簿」や、石工の「絵図」に見える石塔は20種以上であるが、どういった種類の石塔が多く製作されたかを共同墓地で調べた。時間的制約のために半分のくらいしか調査できなかったし、「絵図」と照合しながらの調査ではなかったので、分

図一 渡辺伊三郎「絵図」



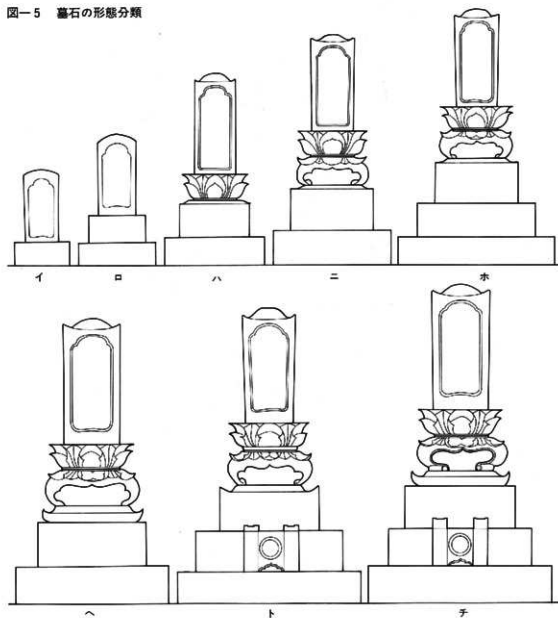
類はかなり不正確である。数基以上あったものは、イ(羽田利光「絵図」1)、ロ(同2)、ハ(渡辺伊三郎「絵図」6)、ニ(同13)、ホ(同14)、ヘ(同16)、ト(同18)、チ(同19)の8種である。ただしイとロは、碑の表面に彫り込まないものを含み、ロには小石塔と称すべきほど徳高のあるものも入れた。ハには横須がイ、ロと同形のものを食めた。ニ〜チには、猫足地盤(木箱とぐり罎)の相違や、香立・花立など付属品は無視した。以上8種の石塔の建立年・数基は表の通りである。

イには年不詳が7基あるので最も多く24基であり、戦後は建てられていない。年不詳7基は、著しく少ない昭和時代のものであろうか。ついで多いロ(23基)・ハ(16基)は、それぞれ最終年が昭和

表 8 共同墓地の石塔

	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ
明治 30		1						
38			2					
39			2					
40		1			1			
41	2		1	1				
42	2							
43	1							
44	1	1	1	2	1			
45	1				1			1
大正 2	1	1						1
3	1	1	1					
4		1	2	1		1	1	
5								
6		1	1		1			1
7	1	1	1	1				
8		1	1	1		1		
9	1	2	1	1				
10	2							
11						1		
12		1					1	
13		1						
14		1	1		1			
15	2	1	1	1			1	
昭和 2								1
3		2						
4					1	1		
5							1	
6	1							
7		1	1		1			
8		1						
9		1						
10		1						
11		1	1		2	1	1	
12							1	
13		1						
14			1					
15								
16								
17								
18						1		2
19		1	1					
20			1					
21			1		1			
22								
23					1			
24								
25								
26		1					1	
27								
28								
29						1		
30								
31								
32								
33					1			
34								
35								
36					1			
37								
38								
39								
40								
41						1		
42								
43								
44								
45								
46						1		
計	17	23	16	8	16	7	7	7

図二 墓石の形態分類



26年・21年である。ニ〜チは、二重花と猫足を共通に持ち、精巧で花やかな石塔で、田染石工の得意とするものである。ニ〜チの中では、明治〜大正期に最も多いのはニであるが、昭和時代に入ると建てられなくなっている。明治時代に稀れであった。より高級なヘ〜チへ傾いたことが考えられる。ト・チが、それぞれ昭和12年・26年を最終年とするのに、36年まで建てられている。ヘは約30年間の空白の後、昭和年代に2基建立されている。二重花・猫足を持つ石塔は、昭和40年代半ば以後姿を消したように見えるが、調査対象になかった笠塔や累代墓に受け継がれている。

販売 販売圏は、西国東・東国東・連見3種が主で、中津・宇佐・別府・大分方面が二次圏であった。昔はあてもなく注文取りに出掛けていた。世話をすると一杯飲んだりしている。注文先ができた。1軒から注文を受けること、それが伝手になって注文が出るようになる。福岡県など県外の場合は知人を頼って行った。都市部に石工が居ても、労賃の低い出染の方が有利であった。注文取りには絵図を持って行き、見せながら具体的に説

明した。

以前は製品は荷馬車で運搬した。どの集落にも馬車挽きがあったので、注文主の集落の馬車挽きに頼んでいた。石切り場の小屋で荷馬車に積み込む時は、グループの者が加勢し合った。馬車に葎を敷いて石塔の部品を載せ、部品の間にはねじ蕨を入れて詰めにした。2尺5寸以上の大きな石塔は数名を必要とするので、積み込みが終われば一杯出すときりであった。金福寺では、石切り場から道路まで、約120mあったので、製品搬出の時期をできるだけ揃え、馬車何台にもなれば、運び出し後に一杯飲んだ。石切り場から道路までは、道幅が約3尺しかなかったから、石塔の礎の2箇所をロープで縛り、棒2本を斜めに通して、3尺礎は4名、記念碑は6〜8名で担いだ。馬車1台分の値段を定め、荷出し出方を記録しておき、盆と正月前に清算した。金額は分配せずに、積立金を増やして道路建設費に充てた。

先方に到着すると、馬車で運べる所から先は棒で石塔を担いだ。先方での荷降ろしや運搬に必要な人夫賃、石工の宿泊費は注文主の負担である。石塔立てに加勢する石工の口当は、受注した石工が負担する。石工同志が手間換えしたり、手間賃を払う。東関東部であれば、運搬・建立は2日を要した。現在は累代高が多く、10名で2、3日を要する。石塔請け(地形材料費を注文主が負担)と、悉皆請け(運搬、人夫、材料など全費用を注文主が負担)がある。

**価格の変遷** 昭和4年の協定価格表、昭和6年の標準価格表、昭和23年の最低価格表、昭和47年の石塔点数基準表によって、表9「価格の変遷」を作製した。昭和4年の協定価格が6年に改正されたのは、不況による需要減に対処するためであったと思われる。平均3割3分程度の引き下げであるが、小石塔は4割3分、2尺本五重は3割2分、2尺5寸や2尺7寸の本五重は、2割7分の値引きにとどめている。戦後の23年は悪性インフレによる値上げである。平均では172倍になっている。小石塔は300倍、小社500倍、1尺5寸二重267倍、2尺本五重182倍、2尺5寸本五重159倍、2尺7寸本五重129倍である。37年には、物価騰貴に

スライドして、5割値上げを決議している。47年の点数基準表は納税申告のためのものであり、現在もこの基準表を使っている。47年は1点が約12,000円、57年は約17,000円である。1尺8寸一重花三重を基準として、1尺8寸四重・2尺本五重・2尺5寸本五重の倍率を出すと、下表のようである。手間を要するものほど工賃を多くみているようである。

品名	年	昭和4年	昭和23年	昭和47年
1尺8寸一重花三重	1	1	1	1
1尺8寸四重	1.8	1.4	2	
2尺本五重	3.3	2.4	5	
2尺5寸本五重	6	4.1	10	

**年間総生産量** 個人ごとの注文生産であるため、同業組合としての年間総生産量を把握することは断念していた。幸いにも、昭和53年度の石碑出荷検帳があり、個人経営の18名が判明した。これに会社組織のものを加えて、表10「昭和53年度総生産量」を作製した。品目や大小を無視すれば、総生産量は200以上である。そして石塔の比率は9割以上で、玉垣・地形付きの累代高が6.5割に達している。個人経営と会社とは生産量をほぼ折半しているが、石材と品目では相違がはっきりしている。会社は機械化の利点を活かして御影石を使い、角三重を多く生産している。これに対して、個人経営では灰石(田楽石を含め)を使用して、細工の多い本五重に重点をおいている。

なお、本数だけを考えることは危険である。個人経営のA〜Rは点数の多い順である。最高のAが75点、最少のRは5点である。本数でみれば、BはFの半分に満たないが、点数ではB(60点)はF(50点)よりも多い。労働量や収入を考える場合は、表9「価格の変遷」の、昭和47年の点数表を参照する必要がある。なお表10のイ〜ホは会社組織の方である。

図-6 岩田利光「絵図」

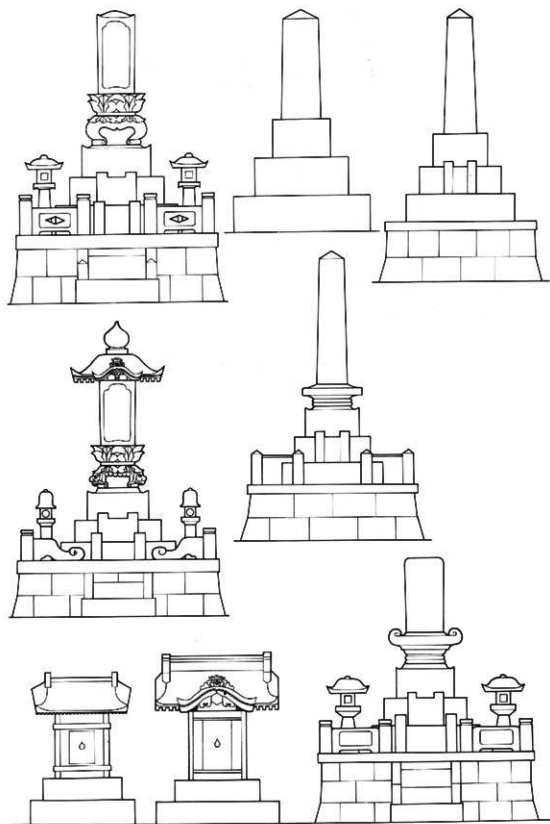


表9 価格の変遷

品名	年	昭和4年	昭和6年	昭和23年	昭和47年
小石塔	70銭	40銭	120円	石塔	地形五銭
小	2円	1円20銭	620円		
く	2円50銭				
1尺5寸	2円50銭	1円50銭	400円		
1尺8寸	3円80銭		600円		
1尺8寸	1重花三重	5円	3円	850円	0.5
〃	2重花三重	6円	3円30銭		
〃	ぐり足三重	6円50銭	3円80銭		
〃	角二重	6円50銭	3円80銭	1,000円	
〃	尾四重	8円			
〃	四重	9円	5円	1,200円	1
〃	そろばん五重			1,350円	
〃	本五重			1,500円	1.5
2尺	角三重	11円			1.5
〃	尾四重	12円			
〃	四重	13円	8円	1,500円	1.5
〃	本五重	16円50銭	11円	2,000円	2.5
〃	笠塔四重	19円		3,500円	3.5
2尺2寸	本五重			2,700円	3.5
〃	笠塔五重				5.5
2尺3寸	角三重			3	3
〃	本五重	30円	22円	3,500円	5
〃	笠塔五重			6,000円	7.5
〃	東京型				4
2尺7寸	本五重	48円	35円	4,500円	
3尺	角三重				4
〃	本五重			6,000円	7
〃	笠塔五重				10
〃	東京型				5
3尺	単人塔三重			1,200円	
4尺				2,200円	
4尺5寸				2,700円	
5尺				3,500円	
6尺				6,000円	
社	22円				1
7尺立石灯籠	22円				
5尺立国東塔					2.5
8尺立					6
10尺立					8
6尺立五重塔					3
笠塔(2尺未満)雪見灯籠					0.5
笠塔(2尺以上)					1
5尺立春日灯籠					2.5

表10 昭和53年度総生産量

品名	石工	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	イ	ロ	ハ	計
一尺八寸二重							4																4
一尺八寸花三重											1												1
二尺二寸										2													2
一尺五寸二重																1							1
一尺八寸本五重															1		1						2
二尺角三重											1							1	1				3
二尺四重															2								2
二尺五寸二重											1												1
二尺本五重																1							6
二尺二寸角三重																							3
二尺五寸花四重																							2
二尺五寸角三重																1		2		1	6		12
二尺二寸本五重																							1
二尺三寸本五重																							1
二尺角三重																							1
二尺五寸本五重																							9
二尺五寸角三重・地形																							42
二尺二寸本五重・地形																							25
三尺角三重・地形																							1
二尺五寸本五重・地形																							2
二尺二寸笠塔・地形																							4
二尺八寸本五重・地形																							1
三尺本五重・地形																							1
二尺五寸笠塔・地形																							4
五尺立国東塔																							1
六尺立国東塔																							3
社・地形																							3
仏像																							2
記念碑																							2
柱下																							4
計																							203



### 第3節 石切場と道具

はじめに

関東半島の西側には、凝灰岩系と安山岩系と、2系統の石工技術が共存してきた。マイシ(灰石)という安山岩を彫刻したのは、真玉町と香々地町の、法橋位を持つ石工の系統である。これに対し

て、ハイシ(灰石)と呼ぶ凝灰岩は、主として豊後高田市田染の石工が用いた。凝灰岩と安山岩とでは、その石工道具に違いがあった。石材の切り出しにおいて、凝灰岩では溝を掘ると同時に矢を用いて石を割るが、安山岩では矢で割ることしかない。また仕上げの段階において、凝灰岩では

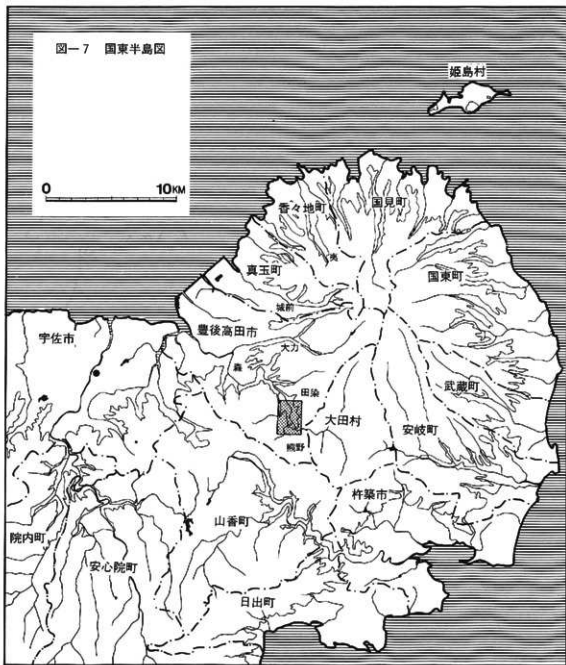


図-7 関東半島図

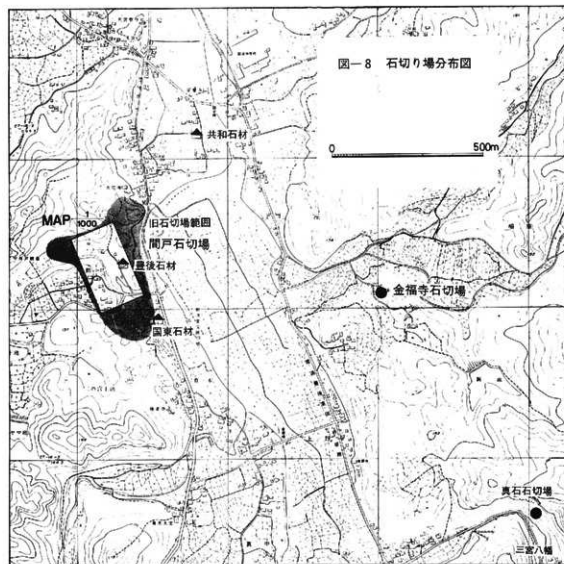
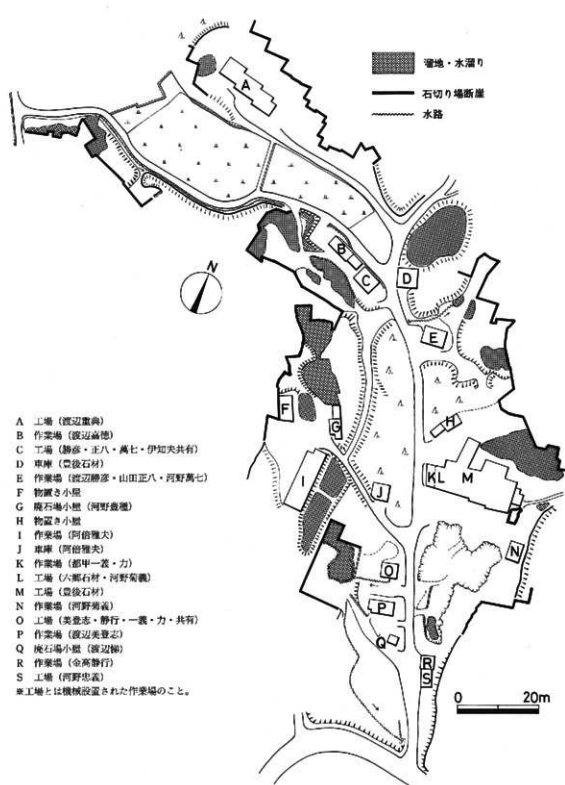


図-8 石切り場分布図

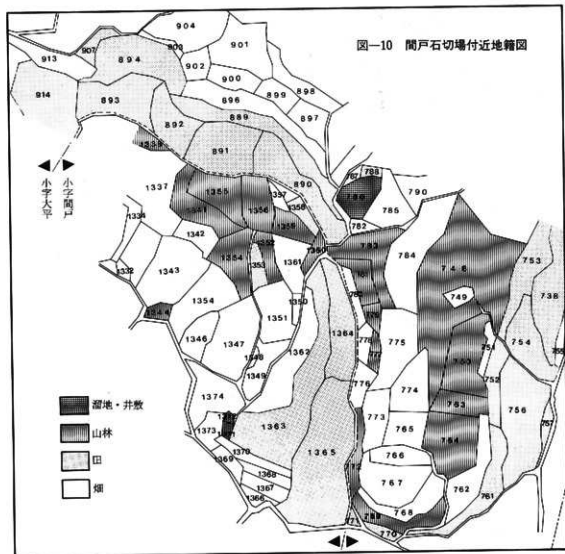


写真 62 金福寺石切場

図一 9 間戸石切場分布図



図一 10 間戸石切場付近地籍図



均しという一種の砲で、石の表面の凸凹を削って平らにする。安山岩ではマナゲという、斧に似た刃物の先で叩いて平らにする。石材の硬さによって、道具の形態や使用方法は違っていたのである。安山岩は、中世から五輪塔や国東塔等の素材として使われた。近世以降発達した凝灰岩系の道具について記すことにする。

### 1 石切り場

**石切り場** 国東半島西部の田染(豊後高田市)や、夷(真玉町)には、耶麻溪のような奇岩からなる溪谷がある。これらの景観を形成しているのは凝灰角礫岩である。熊野岩窟仏も凝灰角礫岩であるが、凝灰岩中に多数の礫が混入し、均質でないために、

石材として適しているとはいえない。

凝灰角礫岩の多い田染にも、大門・間戸・金福寺などには、良質な凝灰岩が産出する。間戸は古くから、金福寺は昭和10年ごろからだという。しかし大門の旧墓地や、間戸の旧墓地付近に石切り場跡が残っている。節匠墓で見られるかぎり、間戸よりは大門の方が歴史は古いから、江戸時代末期以降、大門旧墓地付近から石を切り出していたのはあるまいか。墓地に接近し過ぎて、崖崩れしたために石切りを廃めたという。現在は間戸が主な石切り場であり、金福寺よりも石質が良い。次に間戸と金福寺について概要を記す。

間戸の石切り場は、間戸集落への道を旧墓地の所から右へ行った所にある。大字真中の772~784



写真63 開戸石切場

香地(字大平)と、1337~1365番地(字開戸)で、地目は山林・原野・田畑などである。道路が豊後高田市有となっている外は、敷地面積など20名が細分し、5畝以上の所有者と面積は右表の通りである。所有者で石工をしているのは、渡辺伊三郎・河野忠義・倉成哲男・河野菊義・渡辺信吉・河野静等である。渡辺伊三郎は、祖父伊四郎・父三郎と3代続いた石工で、祖父の代から石切り場を所有している。清原喜八・河野義十郎・渡辺一策・渡辺数男・渡辺進・渡辺高男等に売っていたが、現在は弟伊智雄が切る外、渡辺一に20年の長期契約で切らせている。

氏名	面積
渡辺 徹	1畝8畝
渡辺伊三郎	1畝18坪
渡辺文雄	9畝21坪
渡辺国元	9畝19坪
河野忠義	7畝13坪
豊田勝美	7畝2坪

石切り場の最も高い所は、上から約3間全是く石材にならない。その下は軟い石で火に強いので、昭和20年代までよくど石に使った。現在は専業用の山や灯籠の火薬にしている。その下の最良の部

分を石塔の材料にする。さらに深くなると硬くなるが、地表下10mを越すと再び軟くなるという。石は坪(1間平方)売りをする。石の深さが2間あれば良い方で、浅ければ1間未済である。深浅や硬軟によって坪の値段は異なる。現在は税金が原石代の半分にもなるので、坪売りしては引き合わない。石売りが多くなるかも知れないが、石を起すのはしじむることがあり、日常になるとは限らない。

金福寺の石切り場は大字相原にあり、金福寺集落の共有地である。この石切り場を使っていたのは、河野忠義・河野俊一・財前権部・豊田今朝松(以上開戸)、水江光・渡辺武潤・渡辺梯(以上大門)、岩田利光・是永弘弘(以上相原)、渡辺今助夫(金福寺)の10名であった。昭和36年ごろ石切り場への道路を建設した。この時、金福寺集落まで道路延長の際、岩田利光の所有地を無償提供の約束で、道路敷を土地所有者が無償提供した。橋の材料は、柱礎の廃材を市から無償で払い下げてもらい、金福寺の住民と石工が延べ1か月くらい労力提供をし、石工の横立金も使った。道路完成までは、製品の運び出しが不便であったから、坪3,000円と開戸の半値以下であった。1人の年間原石必要量は1坪であったから、普通は1~2坪を買ったが、



写真64 石場小屋(渡辺美登志)

20坪も買う人が居た。

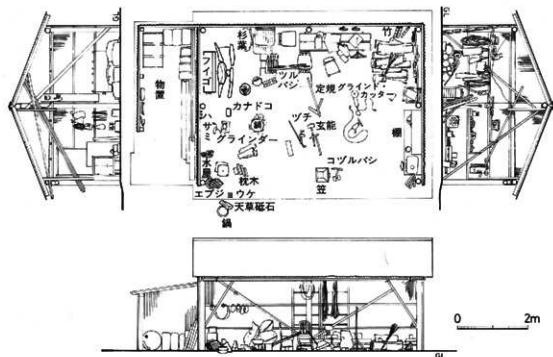
現在は表土2間、破石1間を除去しなければならぬので、排除する人夫賃が高くなり、安い灰石を購入した方が有利になった。

**石場小屋** 細工をする石場小屋は職場ともいう。開戸では石切り場の口近くに散在している。昔の石場小屋は3~4坪ほどで、掘立柱に茅葺き屋根、壁は古い建具を利用して表は開放にした。床には石屑を積み、石材を揃えるのに最適であった。鍛冶に必要なアゴと欠つぼを片隅に設置してあった。現在は面積が倍以上になり、トタン葺きになっている。小屋の中には道具類が所狭しく置いてある。文字切りノミ等の小道具は木箱に納めるが、棚に並べてある小屋も見られる。サキヤマ道具は戸外に放置されている。

**石糞** 田染石は均質であるが、縦横に目(破断面)が走っており、長大な石材を切り出すことは難しく、原石1個から3尺木五重1基分が取れることはまれである。垂直方向の目を柘日、水平方向を板目という。柘日は割りにくく、柘から目は割り易い。面は長く取るが、柘は折れ易いので長

く取らない。田染では石材切り出しに、ダイナマイトや黒色火薬を用いない。目が多いので爆破の効果が小さく、窓穴状に振るので快適さからである。石工は目を読み取りながら、手作業で慎重に適当な大きさに切り出す。溝が浅過ぎては通過できず失敗するからである。田染石の目は鉄分を含んでいるために灰褐色、軟いど石は褐色系の灰色である。石塔用の石は、掘り出した当初は、水分を含んで暗灰色であるが、乾燥すると明るく灰色になる。軟くて粘りがあるので細工し易いが、野外で日経が経過すると、表面が風化して硬くなり、細工も困難になる。

田染石は埋蔵量も少なく、切り出しに手間がかかるので、白杵市江無田・大分市吉野・山崎町勢場などから、凝灰岩を購入するようになった。昭和52年ごろから使うようになった勢場石は、山浦石とか賢得石とも呼ばれる。石塔の裏にすることもあるが、靱子が粗いので主として地形石にする。江無田石や吉野のこまは昭和55年から使っている。白杵の灰石にも硬軟2種がある。石に黒い物が多いのは、粘りがあるが脆くなくて底廉である。



白い物が多い方は主として石塔の體にする。いずれにせよ、外部材は田染石に比べると、硬くて粘りがないから、細工がしにくくてはげ易い、石塔建立時には区別がつかないけれども、2~3年すると青黒く変色してこげが生え易い。昔は原石切り出しが労力の半分とあったが、機械の導入によって8割くらいを占めるようになった。田染石の原石は、1才(1立方尺)が6,000円くらいであるのに、白杵の江無田石は3,000円、目のつんでいる吉野めこは3,500円である。

昭和48年、切削機・研磨機の導入が、硬い御影石の使用を可能にした。都岡県京都都入覧の花崗岩が最も多く、次は韓国産である。山口県徳山市の黒巖石、ポルトガルの白御影、南アフリカの黒

御影などを使うこともある。磨くと光沢の出る花崗岩の方が、凝灰岩よりも需要が増え、機械化した会社組織の生産の主力になっている。  
以上のように、昭和40年代後半から、機械の導入や石材の変化が起こり、必然的に田染石工の製品に影響を与えている。

イ、石切りと用具

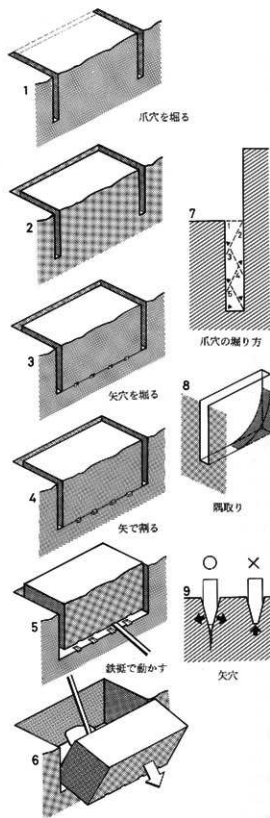
石材を切り出す作業は、口開け、先山、荒切りに分けられる。岩盤の上に堆積している土砂や、軟いど石の部分を除くのが口開けである。まず樹木を鉋や鎌で切り払い、鎌で掘った土砂はエブリックやもっこで運ぶ。ど石は岩掘りや爪孔を掘るが、矢はそれほど使わない。

岩盤から石材を出す作業を、先山とか石起こしという。岩盤は目によって岩塊状になっているので、岩塊を適当な大きさに切り割って、石材を採取する。爪孔とよぶ溝を、鴨ばしで掘って爪を取る。爪孔の溝幅は3寸が普通であるが、1尺以上の深さならば4寸くらいにする。オオヨキ(大舟)で輪郭と内側を浅く掘る。溝の断面がV字形になると掘れなくなるので、溝底の隅に鴨ばしの対先を打ち込む。爪孔の最奥部の掘り残しを、スミトリ(隅取り)で掘り上げる。柱目を爪孔で切り離したら、板目を矢で割る。鉄鉋の定規をあててのみの先で線を描く。3寸間隔で矢穴を掘る。大舟で矢穴の輪郭と内側を浅く掘る。次に小鴨ばしで深く掘り、ソコザラエ(歯線え)でV字形に仕上げ上げる。矢穴に矢を差し込んで楯で叩く。端から順次で玄能で叩く。同じ力で叩くことが肝要で、何回か繰り返すと石が割れる。目に沿って割る時は、矢の数は少くとも良い。鉄鉋を差し込んで隙間を広げ、間に小石を入れて支点にして、少しずつ動かす。

岩盤から切り出した石材を、必要な大きさまで大舟で削るのを、荒切りとか荒取りという。石面に斜めに大舟を打ち降ろして、少しずつ削る。荒石は製品よりも2寸ほどの余裕を残す。運搬に便利のように軽くなる。

次に先山に使用する道具について説明する。

**鴨ばし** 石材を岩盤から切り離す時に爪孔を掘る刃端である。鴨ばしで溝を掘ってゆくのは、軟らかい石でしか用いられない技術であり、凝灰岩系の代表的石工道具といえる。対先は先山の穴の角錐状をしている。あられという、3mm角ほどの四角い平面になっている。先端が尖っていると、



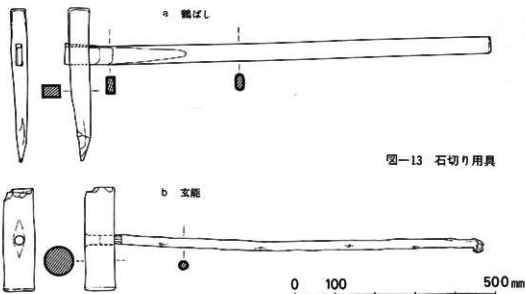


図-13 石切り用具

石にくいこんでしまつて破砕できなくなつてしまふ。あられの稜は尖つていて、それが磨滅して丸くなるに損れなくなる。あられは普通正方形である。軟い部分に爪孔を掘る時は長方形にして、多量の石が取れるようにする。丸1口切り出しをする時、5~6本を消耗するので、素焼きをして刃先を作り直す。石工は予備を含めて10本くらい持っている。減れば素焼きをして、刃先を作り直す。1人の石屋は予備を含めて10本近く持っていた。

昭和48年の切削機と研磨機の導入と同時期に、工場生産のみやよき等が用いられるようになった。タンゴロイという合金が刃先に埋めこまれており、焼き入れの必要がなく、グラインダーで砥ぐだけで良い。しかし、硬い合金製の刃先は、あられに整形するのが難しい。そのため、鑿ばしや剛取り等のあられを刃先につける道具は、現在でもなお鋼の刃先のついた昔ながらの道具を使っている。複製の柄を柄穴に差し込み、センゾク(鉄楔)で固定する。

刃楯部の長さ306mm、柄を含めた全長428mm、重量2.5kg、柄角90度(図-13a)

玄能 矢を叩く鋼製の大型金頭である。昭和初めまでの玄能は地鉄製で、打撃面が潰れてめくれ上がったので、打撃面に鋼をつけたものもあった。鋼の道具を鋼の鎚で叩くと、火花が飛んだり割れ

たりして危険であるから、鋼と地鉄、あるいは地鉄同志の組み合わせにする。1貫500匁(5.6kg)~3貫(11.25kg)の玄能を、1~2本持ち、大きい石を割る時は重い方を使う。玄能を持ち上げる時は、柄の端と楯近くを持ち、振り降ろす時は両手で柄の端を握る。柄には、粘りのある梅・榎・グミなどの細い幹を用いる。

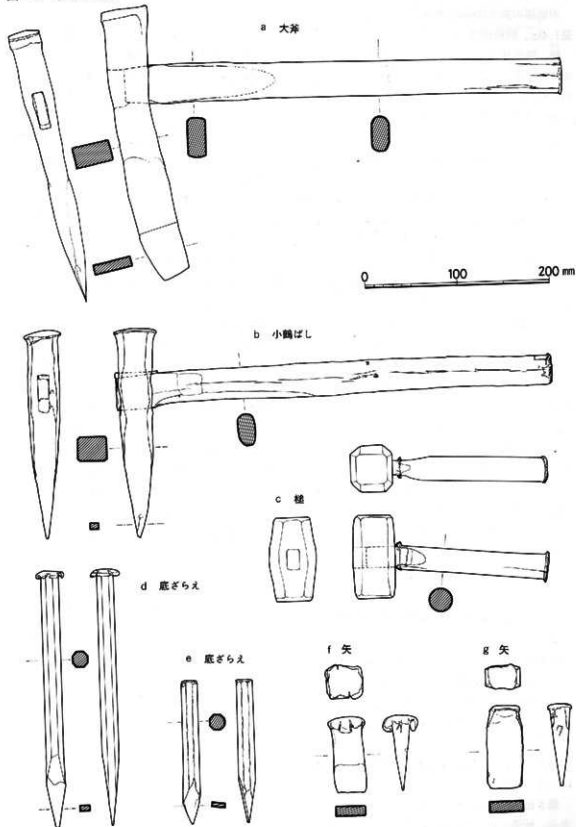
楯部の長さ207mm、直径58mm、全長794mm、重量4.44kg(図-13b)

オオヨキ(大斧) 切り出した石材を荒く整形する細身の石切り斧で、荒取り斧ともいう。斧には大斧・中斧・小斧と3種ある。最も多用する道具であるから、7~10挺持っていた。磨耗が激しく、毎日素焼きして刃先を作り直した。図の大斧の刃楯部の中央に先がけの痕跡がある。短くなった刃先に地鉄をかぶせて、臼状に復したのである。柄は整で作る。

刃楯部の長さ298mm、刃幅30mm、全長498mm、柄角83度、重量24kg(図-14a)。

小鑿ばし 矢穴を掘る刃楯である。まず大斧で輪郭と内側を浅く掘る。次に小鑿ばしで深く掘ってゆき、最後に底ざらえで底を鋭く掘って仕上げる。地形石の表面を荒く仕上げるときにも用いる。この仕事は腕力の小さい女性がすることもある。刃先はあられに作つてある。1人の石屋は1~2

図-14 石切り用具



本持っていた。

刃部の長さ226mm、柄を含めた全長473mm、重量1.4kg、柄角90度 (図-14b)

種 隅取りや底波えを叩くが、矢穴に穴をかます時にも使う中型の金種である。片手で使うから柄は短く、軽くなる。柄角は85度で、打撃面の方は鋭角である。種は地鉄を焼き入れて硬くしてある。

種部の長さ90mm、直径49mm、全長214mm、重量1.15kg (図-14c)

底ざらえ 矢穴を握るのみである。矢穴は握り口が長方形で、断面は楔状の台形である。矢穴の底が握りやすいように、刃先は偏平で尖った四角錐になっている。1人の石屋は2〜3本持っていた。図のソコザラエは両方とも、千種鋼の棒製である。

直径19mm、全長276mm、(図-14d)

直径19mm、全長155mm、(図-14e)

矢 石材を削る鉄製の楔。現在花崗岩等の硬い石に用いられる矢と比較すると大型である。先端は平らになっていて尖っていない。先端が矢穴の底につくと、力が直接垂直方向にかかり、割ることができない。せり割るとして、力が2方向に向かうようにする。地鉄(生鉄ともいう。生鉄)で作られ、カナアゲ(焼き入れ)をしてある。刃先を先、反対側を頭という。軟い地鉄なので頭は潰れるが、石材に過度にくい込む。割製は叩いた時に割れたり、飛んだりして危険である。

全長89mm、幅38mm、厚さ22mm、重量330g (図-14e)

全長81mm、幅40mm、厚さ38mm、重量320g (図-14f)

岩握り 口開けの時に爪孔を握る細身の鉄で、石屑の掻き出しにも使う。地表付近の軟いくど石の部分は、岩握りを使った方が能率が良い。刃先は7〜8mmと、小型の割には厚くて丈夫である。柄は軽である。

鉄先部の長さ220mm、幅40mm、柄角80度、重量1.1kg (図-15a)

掻き出し 爪孔に割った石屑を掻き出す道具である。地鉄の棒の先端を偏平にし、直角に曲げて

ある。溝幅が狭い所に使い、広ければ岩握りを使う。

刃先部の長さ76mm、幅12mm、厚さ4mm、柄の直径12mm、全長982mm (図-15b)

隅取り 爪孔の隅を握って仕上げる長いのみである。鶴はして爪孔を握ってゆくと、最も奥の下部がどうしても残ってしまう。その残部を握り除くのである。刃先はあられに作ってあり、先端を切った四角錐の形状をしている。1人の石屋は1〜2本持っていた。昔の隅取りは地鉄の棒の先に鋼を入れて刃先にしていた。鋼体の入手が容易になると、図のように、断面が八角形の千種鋼の棒を切って作るようになった。最近では、コンクリート用鉄筋の鋼棒で作ったものを使う石工も居る。図の隅取りは、直径19mm、長さ850mm、重量1.8kgである (図-15c)

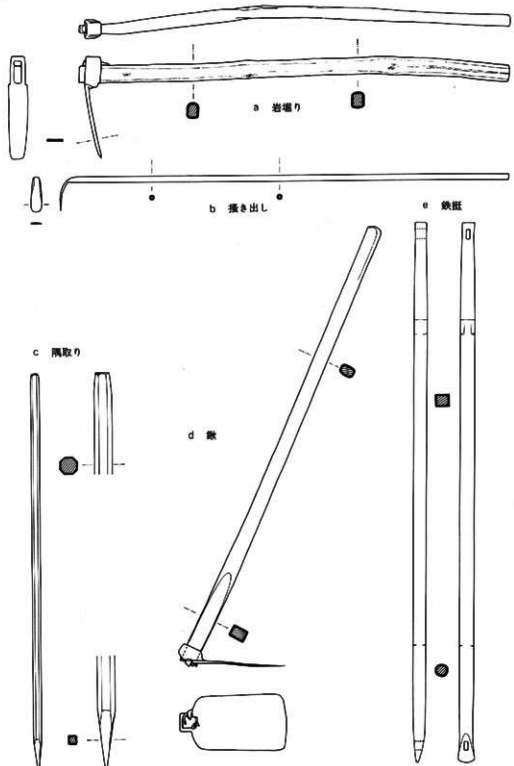
鉄 岩盤上の土砂を握りのける。馬鞍用の金鉄よりも小型で、柄は軽である。

鉄先部の長さ232mm、幅122mm、柄角65度、全長1036mm、(図-15d)

鉄棍 石材を動かす時に使う。地鉄の丸棒で作ったものが多く、長さ1.8mもある大きいものも使っている。図の鉄棍は、馬車の車軸を作り直したから、中央部は32mmの角柱で、両端が先細りの円柱になっている。一端を広げて偏平にし、狭い隙間にこじ入れ易いようにしてある。

全長1170mm、重量7.9kg (図-15e)

図-15 石切り用具



ロ、細工と用具

荒石を中弁で削って切り上げる。石塔の塔身や盤のような方形にする時は、まず一面を平らにして、他の面の基準にする。荒石の面の両端に定規2本を平行に立て、凹んだ部分を確かめてから、石にのみで線を引く。線に沿って隅切りで帯状に削り、ツラツケ(面付け)をする。次に切り上げといて、面付けした内側の凸部を中弁で削る。ほぼ平面になればナラシ(均し)で削って仕上げ上げる。ひとつの面が平らになれば、番匠がねで直角にとり、次々に面を平らにし、最後に裏面を平らにする。猫足や花などの裝飾は小弁で削り、丸のみや隅切りで整形する。最後に砥石で磨いて仕上げをする。

字彫りには、断面がU字形の蜜柑彫りと、V字形の栗研彫りと2種がある。両者とも、幅と同じ深さに彫れるという。字面の多少にもよるが、文字が3~4cm角以下であれば、蜜柑彫りは難しい。字彫りは、石面に墨書きして彫るが、墨書きした和紙を貼って彫ることもある。次に輪郭を字切りのみで線刻し、2~3mm内側を字切りのみで荒彫りし、最後に輪郭までのみを押しでさらえる。のみ先を取るといおうが、字彫り種では叩かない。

次に組工用具について説明する。  
中弁 石細工の中心的道具で、整形用の中型の石切り弁である。荒切りした石材の余分な所を削る。2~3本持ち、柄は楯である。

刃幅部の長さ206mm、刃幅38mm、全長442mm、柄角45度、重量1.44kg(図-16a)

小弁 猫足や花のような細部の整形をする小型の弁である。2~3本持ち、柄は楯である。

刃幅部の長さ156mm、刃幅18mm、全長344mm、柄角90度、重量770g(図-16b)表は、大弁・中弁・小弁の形態を数値化した一覧表である。大弁と中弁は純全体、小弁は腕先だけを動かす。重量を刃幅で割った数値は、刃先に加わる力を推測するために出した。大弁・中弁の順に弱くなることは、数値で納得できる。柄角と刃角(柄と刃先の角度差)も、使う動作によって微妙な違いがつけられていることもわかる。

大弁は現在も使用頻度が高いが、ディスク・ブ

図-16 細工作業図

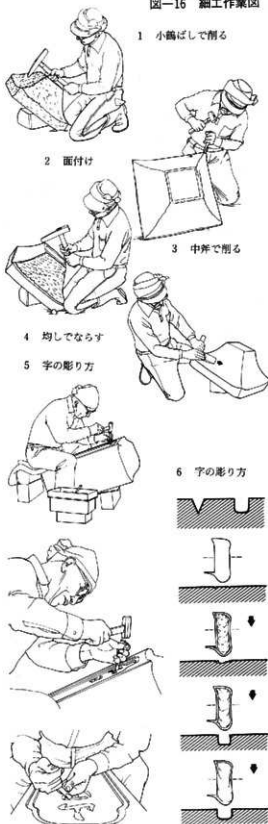
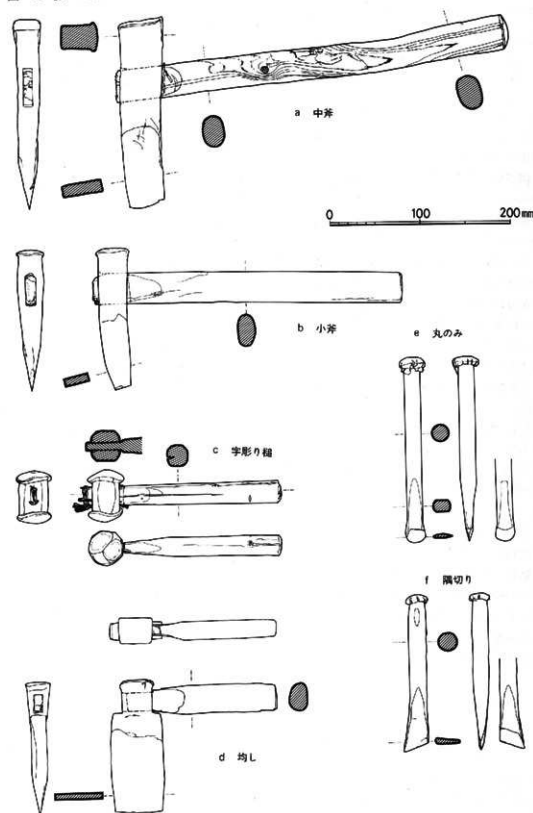


図-16 組工用具



斧比較表

	重量	刃幅	重 量 厚 さ	刃 幅 厚 さ	刃 幅 長	全長(柄)	柄 角	刃 角
大 斧	2,400g	30mm	80g/mm	298mm	498mm	83°(鋭角)	27°	
中 斧	1,440g	38mm	38g/mm	206mm	442mm	95°(鈍角)	4°	
小 斧	770g	19mm	40g/mm	156mm	344mm	90°(直角)	17°	

ラインダー(カッター)の使用により、中斧・小斧の使用は減った。

**隅切り** 石面を平らにする時、周縁部を帯状に削るのみで、平のみともいう。立体物の角を決め、平面の基準を作る。刃先は斜めで、地鉄の丸棒の先に鋼を割り入れてある。10本近く持っている。

全長175mm、直径19mm、刃幅28mm、刃角22度、重量320g(図-16f)。

**丸のみ** 運弁などの凹部を整形するのみである。鋼をつけた片刃で、鋼をつけた面は平ら、地鉄の面はふくらんでいる。大きな文字の字彫りのみにすることもある。

全長204mm、直径18mm、刃幅22mm、重量308kg(図-16e)。

**均し** 中斧で整形した面を平滑にする刃物。両手を添えて刃先で面をこするので、鍔の一種といえる。軟い凝灰岩に使う道具である。柄には強い力がかけられないので強固につけてない。1~2本持っている。

刃幅部の長さ147mm、刃幅52mm、全長185mm、重量910g(図-16d)。

**砥石** 石面を磨いて最終仕上げをする。荒砥・中目・細目の3種を順次に使う。平面は大きな砥石のまま、運弁などの細部には破片を使う。現在は、金剛砥石の荒目と細目、あるいは研磨機で平面を磨いている。

**字彫りのみ** 字の大きさによって各種の刃先ののりみを必要とし、20本以上持っている。刃先は丸と角とあり、鋼をつけた面は平らで、地鉄の方はふくらんでいる。石面にふくらんだ方に向け、左手の親指と人差指で持ち、字彫り槌で打つ。細かい部分を彫る時には、刃先近くを薬指と小指で挟み、微妙に動かす。

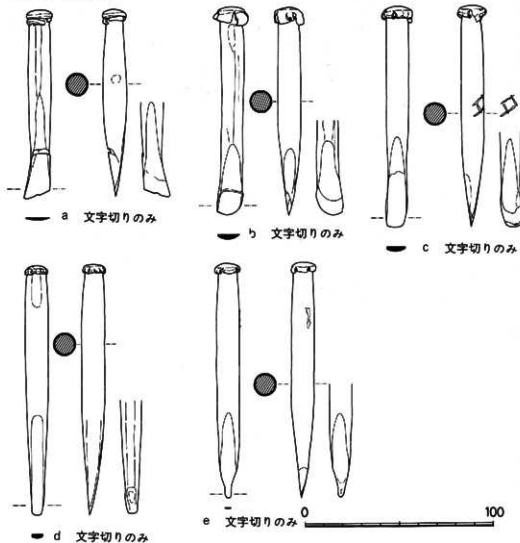
全 長	直 径	刃 幅	重 量	図
100mm	12mm	15mm	69g	図17-a
110mm	12mm	13.5mm	90g	図17-b
116mm	13mm	10mm	72g	図17-c
132mm	12mm	5mm	95g	図17-d
124mm	12mm	3.5mm	86g	図17-e

**字彫り槌** 字彫りのみを叩く小型の金槌である。槌部は軟い地鉄である。両方の打撃面はそれぞれ3面あり、手前と向こう側と、刃先を向ける方向で使い分ける。打撃面は潰れてくれあがっている。1~2本持ち、柄は樺である。図の字彫り槌はぐらつきを防ぐため、槌蓋をはめている。

槌部の長さ57mm、柄の長さ214mm、柄角90度、重量910g(図-16d)。

**枕木** 細工の便利さのために、敷いて石材を傾ける木片で、各種の大きさがある。

図-17 細工道具





## ハ、鍛冶と用具

石工の鍛冶仕事には、素焼き、鋼入れ、先掛けの3種がある。昔は素焼きしきせず、鋼入れ、先掛けは鍛冶屋に頼んでいた。鍛冶屋は、真中に清原喜十、大門にぐんさん、池部に河野さんが居た。清原喜十の息子は石工であった。ぐんさんは戦前まで井屋近く、河野さんは成神社近くに昭和40年ころまで居た。戦後から40年代までは、山首町立石の森川さんと呼んだ。石工の家に泊り、石場小屋のふいごを使って仕事をしていた。戦後暫くは地鉄が入手にくかった。23年ころ、馬上金山近くの国徳金山が廃山になった際、払い下げを受けて、石工道具に作り直したこともあった。鋼入れや先掛けを森川さんから習った石工も居る。地鉄や鋼は、量後高田市の中村という問屋から購入した。工場製の道具や機械を使うことが多くなったが、ツルハシのような代用品のない道具は、森の高瀬という鍛冶屋に頼んでいる。

素焼きとは、磨耗した刃先を焼き、叩き延ばして刃先を作り、焼き入れをする作業である。使用頻度の高いツルハシ・大斧は毎日素焼きの要がある。昼よこいやアサマガカリ(朝の仕事始め)に素焼きをする。火つぼの松炭に刃先を入れて焼く。鉄床の上で楯で叩いて刃先を作り直す。刃先の広い斧や均しは刃先を作り直す。刃先の広い斧や均しは刃先をたがねでまっすぐに切る。焼き入れをカナナグといひ、刃先を荒砥で仕上げをする。カナナグし終わったばかりの鋼は、カナナグタナクといって、荒砥でとげないほど硬くなっている。

磨耗して鋼が無くなった刃先に鋼をつける鋼入れには、割り鋼と片鋼の2方法がある。割り鋼は、刃先をたがねで削って鋼を入れる方法で、強い刃の加わる斧やツルハシにする。片鋼は、刃先の片側に鋼を貼りつける方法で、あまり力の加わらない文字切りなどに用いる。鋼と地鉄を焼き、同じく先に赤める必要があるがかなり難しい。接合面に霧砂を塗っていたが、戦後は鉄ろうを使っている。

磨耗した刃先に地鉄を継ぎ足すのが先掛けである。磨り減った刃先を叩いて薄くし、地鉄をかぶせ、刃先に鋼入れをする。

図一八 鍛冶作業図



写真65 フイゴ場

フイゴ 火起こし用の送風機である。長方形で気密の箱に取り付けたピストンを往復させる。ピストン部に獣皮を貼って気密性を高める。毛が軟くて抜けにくい狸の皮が最上で、うさぎや犬の皮は劣る。箱の両内側と底部にガラスを貼り、気密性とピストン往復運動の効率を高めている。箱には前室があり、弁が動いて常時送風できるようにになっている。送風口の鉄パイプは火つぼにつながる。火つぼは耐火性の高いど石の板石を2列に並べて溝にし、火が他に燃え移るのを防いでいる。送風口近くが火床で、溝の一方は炭を割ったり、面めておく炭敷になっている。

信濃深い石工は、ふいごや石工道具に正月には餅餅を供える。特にふいごは神聖視され、正月中にふいご祭りをして、石場組など悪徳な人を招かす。

ふいごは代々伝えたり、廃棄した鍛冶屋を譲ってもらい、新しく作ったものは殆ど無かった。ふいごを作れる大工が居なかったからである。昭和30年ころから電動送風機を使い、ふいごを使うことはなくなった。

全長1225mm、幅340mm、高さ620mm、重量22kg (四一21)。

松炭 鍛冶用の軟質の炭である。特注して黒炭がまだ焼いてもらうので、黒炭よりも少し高値である。火は起こし易いが、送風を止めるとすぐに消え、オケグナイ(火持が悪い)。炭が上って金属に熱が軟く伝わり、送風加減で火力の微妙な調整ができ、鍛冶に最適である。

鉄床 鉄を鍛える地鉄製の台である。長方形の鉄塊の下部を、輪切りにした木の台に固定し、適当な高さになるように埋める。

縦108mm、横232mm、高さ396mm、重量61kg (四一204)。

水鉢 焼き入れ用の水の容器である。焼いた刃先を入れた時の音から、ちゅんちゅん音ともいう。田染石製の四角な水槽であったが、戦後は鉄釜、最近ではバケツを使っている。焼き入れの水は、新鮮なものより溜り水が良いとしたが、田染石製は水洩れしたので、そのつど水を汲み入れていた。

鍛冶屋の棟 鍛冶の塙は、楯部の頭より先の方が長くなっている。飛び散る火花で火傷しないた

図-19 鍛冶用具

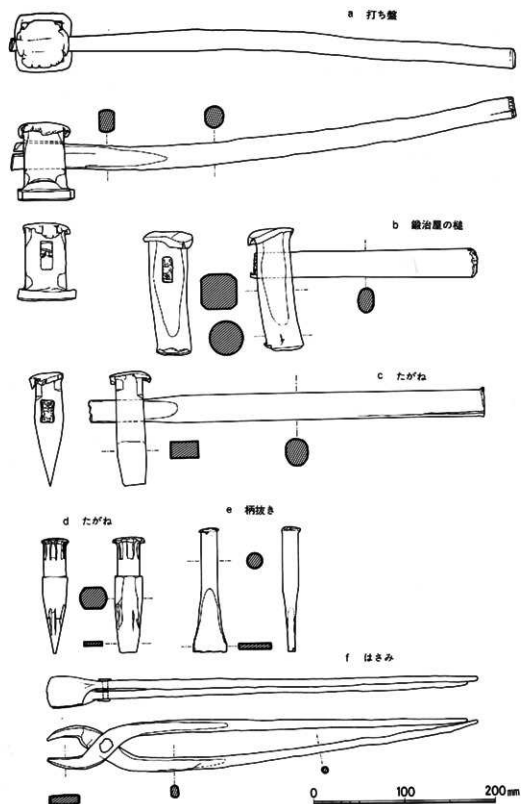


図-20 鍛冶道具

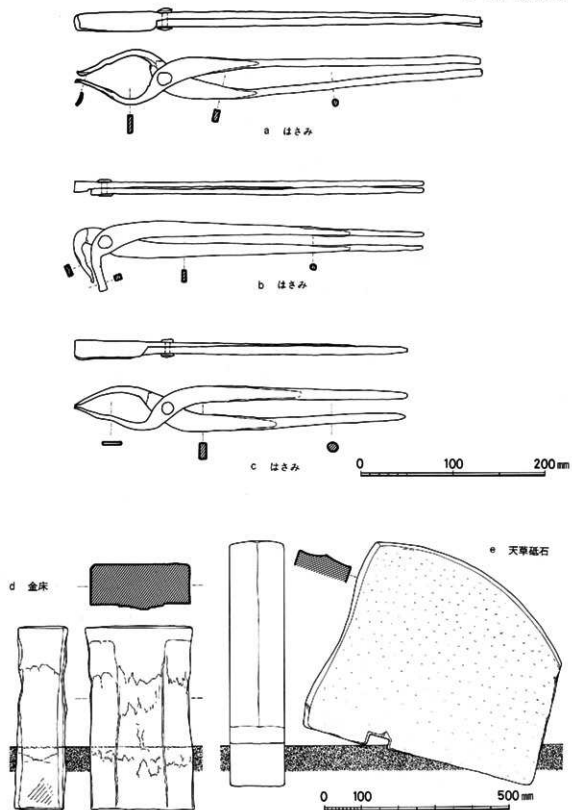
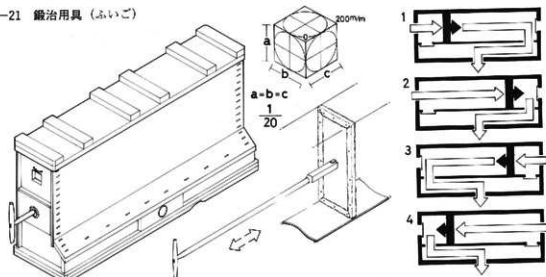


図-21 鍛治用具 (ふいご)



めである。

楯部の長さ132mm、柄の長さ251mm、梢角85度、重量1.38kg (図-19b)。

**打ち盤** 向う打ちが使い大型の金槌である。楯部は短かく、地鉄であるから打撃面はめくれている。均しや斧のような偏平で広い刃を打つ時に使う。玄能で代用することもある。

楯部の長さ85mm、柄の長さ560mm、重量1.43kg (図-19a)。

**たがね** 灼熱した鉄を切るのみである。図-19dのたがねは挟みて挟んで保持する。均しや斧の鋼入れ用で、刃先は幅2.2mmで平らである。尖っていると鉄が割れない。図-19cには極の長い柄が付き、先が尖っている。刃先を切断して整形に用いる。双方とも楯で頭を叩く。

全長127mm、直径31mm、刃幅19mm、重量420g (図-19d)。

楯部の長さ125mm、刃幅24mm、柄の長さ438mm、柄内88度、重量900g (図-19c)。

**柄抜き** 刃金などの楯部の柄を抜く時のみである。地鉄製で、刃先に鋼を入れず、尖ってもない。柄穴にあてて楯で打ち、柄を吹き出す。

全長131mm、刃幅34mm、刃厚8mm、直径20mm、重量282g (図-19c)。

**はさみ** 焼いた道具をはさむむばさみである。さまざまな形状がある。

全長476mm、重量800g (図-19f)。

全長44mm、重量555g (図-20a)。

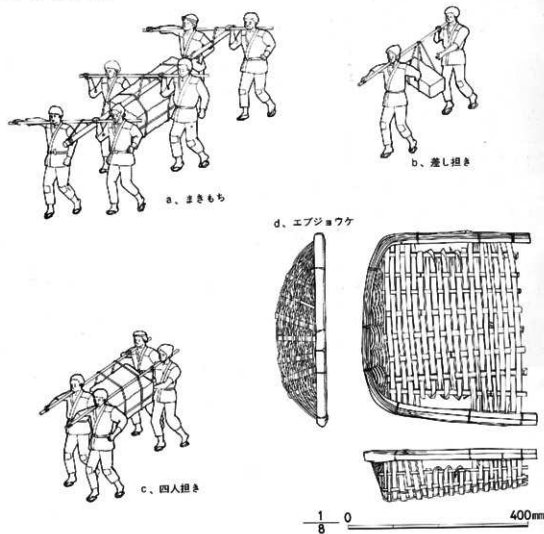
全長380mm、重量435g (図-20b)。

全長362mm、重量560g (図-20c)。

**天草砥石** 素焼きした道具の刃先を研ぐ。鍛冶屋は径90cm、厚さ12cmの円形砥石に台をつけ、回転させて使う。石玉は割れたものを埋め込んで使っている。

地上高436mm、径540mm、厚さ120mm (図-20e)。

図-23 運搬と用具



## 二、運搬と用具

ろで荒削りした荒石は、距離がさほど無いので、石場小屋まで担いで運ぶ。

比較的軽ければ2人で差し担きにする。荒石の長い方向に棒を置いて、しゅろ縄で2箇所を縛り、前後を担ぐ。石屑はもっことで差し担きにする(図-23b)。

差し担きで運べないほど重ければ4人担きにする。棒2本を平行にして2箇所をしゅろ縄で縛り、さらにしゅろ縄でしゅろ縄を鉢巻きにする。樽取りともいう。左右前後同じ肩で担ぐと、運び易い(図-23c)。

4人担きでも重ければ巻き持ちにしても、6人

～8人で担ぐ。杉丸太を芯棒にし、その両端をしゅろ縄の荷縄で縛るが、6人ならば3回、8人ならば4回縛る。石材を数箇所鉢巻きをする。1間ほどの横棒を荷縄と芯棒の間に差し込み、横棒を2人ずつで担ぐが、全員が左右いづれか同じ肩にする。左右の違うねじり肩は歩調が合わせにくい(図-23a)。運搬用のしゅろ縄は石工が手作りした。山野にシユロを植えてあった。細いしゅろ縄3本をみつくりして、径3cmほどの太い縄にした。現在は麻縄を使っている。

4人担ぎや巻き持ちは昭和40年代半ばまでで、それより後は、キャタビラー(小型無限軌道の商品名)、トップカー(小型多軌タイヤ輸送車の商品名)、フ



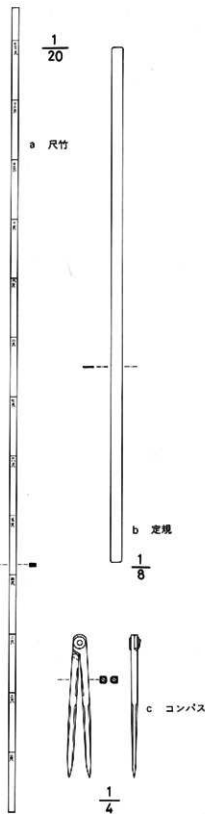
写真 72 たてのぼし  
フォークリフトを使っている。

たてのぼし 杉丸太の三脚である。3本の杉丸太の上部をしゅろ縄で縛り、開脚させて立てる。頂上部に滑車を吊り下げてしゅろ縄を通す。墓石のタテコミ（組み立て）に使っていたが、キャタピラーなどの荷台に石材を載せる時に用いる。滑車1個が普通であるが、非常に重い場合は近くの地面にもう1個の滑車を固定し、力を分散させて八重を取る。木製の滑車はチェーンブロックになった。

馬車 製品の石塔などは馬車道まで運んだ。現在の泉道中村一山香線である。馬車に積み替えて注文主の集落まで行く。墓地への道は細くて急傾斜が多い。差し担ぎ・4人担ぎ・巻き持ちなどで運んだが、急傾斜ではカガラン（神楽座）で引き上げたこともあった。神楽座はほろくろのことで、現在のウインチに相当する。馬車は戦後も使われたが、トラックを使うようになった。

エブジョウケ 竹製で両側に把手の穴が開けてある。口開けの時に土砂を運んだり、口から石屑を取り除くために使う（図-22d）。

図-24 計測用具



#### ホ、計測と用具

尺竹 口の坪の長さを測る長い物差で、1尺ごとに墨で印がついてあり、尺杖ともいう。図の尺竹は13尺まで割れ、材料は杉である。

全長411mm、幅33mm、厚さ21mm（図-24a）。

定規 面付けや石の面の平滑さを見るものであるから、目盛りは刻んでない。3尺と4尺の物を使うことが多く、鉄製であるからさびている。

全長1055mm、幅23mm、厚さ3mm（図-24b）。

曲りがね 石が直角であることを測る曲尺で、番匠がねともいう。鉄製と真鍮製の2種があったが、鉄製はさびるので真鍮製を多く用いた。石工が大切にしていた道具である。

墨壺 軍人塔などの長い石造物や地形などに、直線を引くのに使う。大工のものは糸の先に靱子を結び、木材に刺して使うが、石工は針を使えないので2人で墨糸を引いた。田舎では長大なものをあまり作らなかったで、殆んど使わなかった。

コンパス 花立ての穴など小円を描く鉄製コンパスで、本来は工業用のケガキである。

全長146mm（図-24c）。

ぶんまわし 国東塔の塔身部や、五輪塔の空輪・風輪・水輪などの円を描く。割り竹や篠竹の一端に釘を刺し、他方の端にのみや鉛等をあてて描き、使うたびに寸法に合わせて作る。

#### へ、機械の導入

昭和39年ごろ、下毛郡三光村に機械の視察に行ったグループが、42年に六郷石材を結成して切削機を購入した。(1)、六郷石材に参加したのは、河野菊義・河野豊種・渡辺末義・渡辺義明・東本政治・渡辺嘉徳である。渡辺嘉徳を除き、他の5名はほぼ同年輩で、石切場の小嵜が近かった。続いて46年以降、次々にグループごとに機械を購入した。(2)、渡辺一・都甲一義・都甲力・安部正夫・渡辺梯・金高静幸、(3)、倉成哲男・渡辺正人・渡辺武則・豊田公俊、(4)、渡辺佐太武・渡辺隆徳・財前又一郎・渡辺仁士、(5)、渡辺勝彦・山田正八・渡辺伊智雄である。

47年、六郷石材は最後石材と改称し、御影石用の切削機・研磨機を導入した。古い機械は作業場の隣りに据え、旧グループで使用しているが、御

影石に反対の東本政治は個人で購入した。(3)の渡辺正人・渡辺武則・豊田公俊に、河野菊義・河野秀治・渡辺梯が参加して、国東石材が設立された。その後、渡辺正人・河野菊義は個人経営に戻った。(4)の渡辺隆徳・財前又一郎は墓和墓石を設立し、渡辺佐太武は死亡し、渡辺仁士は個人経営に戻った。

機械設置の状況は次のようである。

豊後石材…切削機（大型1台・小型2台）、手動2台）、研磨機3台、フォークリフト1台、

国東石材…切削機5台、研磨機2台、フォークリフト2台。

協和墓石…切削機5台、研磨機2台。

阿倍石材…切削機4台、研磨機1台。

東本政治…切削機4台（1台は2重）、研磨機2台、

孔開機1台、フォークリフト2台

河野忠義…切削機1台。

金高静幸…フォークリフト1台。

渡辺一など共有…研磨機1台。

渡辺勝彦など共有…切削機1台。

大分県立宇佐風土記の丘  
歴史民俗資料館報告書第1集

## 国東半島の石工

発行日 昭和58年3月31日  
発行 大分県立宇佐風土記の丘  
歴史民俗資料館  
宇佐市大字高森字京塚 〒872-01  
Tel 0978372100  
印刷 佐伯印刷株式会社  
大分市古国府11組 Tel43-1211

